

# 日の出山窯跡群Ⅲ



## 序 文

多賀城跡調査研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の継続調査を行うと共に東北古代史を多角的に研究するため、多賀城と密接に関連する県内の城柵・官衙遺跡、生産遺跡などの発掘調査を多賀城関連遺跡発掘調査事業として年次計画に基づき実施しています。

当研究所では、この方針に基づき平成14年度から大崎地方に所在する多賀城創建期の窯跡群の内容解明を主目的とする調査に着手し、東松島市亀岡遺跡、大崎市木戸窯跡群・六月坂遺跡、色麻町日の出山窯跡群の発掘調査を実施してきました。その結果、窯跡の分布や構造などをより明確に把握することができたほか、多賀城跡との関連や東北古代史を考えるうえでも貴重な成果が得られました。

本年度は第8次5ヵ年計画の2年次目にあたり、平成20年度から実施している日の出山窯跡群F地点の発掘調査を行いました。3次にわたる調査の結果、F地点の東・西斜面で地下式窯窯跡7基、西斜面で工房とみられる竪穴住居跡・竪穴遺構5軒などを発見したほか、多賀城跡創建期の造営に伴う瓦生産が東斜面の窯場ではじめて捉えられました。F地点は各遺構や当時の地形が良好に保存されており、日の出山窯跡群のなかでも極めて貴重な場所であることが判明しました。

本書は日の出山窯跡群F地点の第3次発掘調査成果を報告するものですが、これまでの調査もまとめ、日の出山窯跡群の調査成果の総括としました。多賀城創建期の窯跡群の研究資料として活用され、遺跡の保護に寄与できれば幸いです。

刊行にあたり、日頃からご指導を賜っています文化庁と多賀城跡調査研究委員会の諸先生方、調査共催を快諾していただいた色麻町教育委員会、発掘調査にご協力いただいた地権者や調査参加者をはじめご支援をいただいた関係各位に心から感謝を申し上げます。

平成23年3月

宮城県多賀城跡調査研究所  
所長 阿部 博志

# 目 次

<b>I. 多賀城関連遺跡発掘調査事業の計画</b>	
1. 事業の目的 .....	1頁
2. 第8次5カ年計画について .....	1頁
<b>II. 日の出山窯跡群 F 地点第3次調査</b>	
1. 遺跡の概要 .....	2頁
2. 調査の目的 .....	2頁
3. 調査の経過と方法 .....	4頁
4. 発見した遺構と遺物 .....	6頁
A. 遺構 .....	6頁
(1) 窯跡 (2) 瓦集中遺構 (3) 潟 (4) 土壠	
B. 遺物 .....	14頁
(1) 出土遺物の概要 (2) 各遺構の出土遺物	
5. 考察 .....	39頁
A. 遺物 .....	39頁
(1) 瓦 (2) 土器	
B. 遺構 .....	44頁
(1) 窯跡の特徴と変遷 (2) その他の遺構 (3) 窯場の外観と年代	
C. 東斜面出土瓦の特質 .....	47頁
(1) 種類 (2) 平瓦について (3) 文字瓦 (4) C 地点との共通性	
D. まとめ .....	53頁
<b>III. 日の出山窯跡群調査の総括</b>	
1. 遺構について .....	54頁
2. 遺物について .....	57頁
3. 各地点の窯場の内容 .....	58頁
4. 調査の総括 .....	60頁
註・引用参考文献	
付表	
図版	

## 例　　言

1. 本書は平成22年度に実施した多賀城関連遺跡発掘調査事業(日の出山窯跡群F地点第3次調査)の成果を収録したものである。
2. 調査は多賀城跡調査研究委員会の指導のもと年次計画に基づいて実施している。
3. 日の出山窯跡群F地点第3次調査の要項は下記のとおりである。

所 在 地	宮城県加美郡色麻町大字坂堀20
調査指導	多賀城跡調査研究委員会 (委員長 須藤 隆)
調査主体	宮城県教育委員会 (教育長 小林伸一)
調査共催	色麻町教育委員会 (教育長 菅原利之)
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所 (所長 阿部博志) 阿部博志・古川一明・三好壯明・三好秀樹・吉野 武・廣谷和也
調査期間	平成22年5月31日～7月29日
調査面積	対象面積: 約2000m <sup>2</sup> 発掘調査面積: 約375m <sup>2</sup>
調査作業員	佐々木喜美男・鈴木祐一・高橋修逸・田中 幸・行澤真雄
整理作業員	相沢秀太郎・木村 歩・佐久間順子・柴田とみ子・高橋里枝・只木一美
4. 本遺跡の測量については世界測地系第X系座標に準じている。
5. 土色は『新版 標準土色帖17版』(小山正忠・竹原秀夫1996:日本色事業株式会社)を参照した。
6. 遺物の実測図は瓦を1/6、土器を1/3で掲載した。また、瓦の分類・型番は『多賀城跡 政庁跡 本文編』(宮城県多賀城跡調査研究所1982)に依拠した。
7. 参考文献のうち当研究所のものは多賀城跡の正式報告書『多賀城跡 政庁跡 本文編』を(本文編1982)、同図録編を(図録編1980)とし、宮城県多賀城跡調査研究所年報は発行年度を付して(年報1990)、多賀城関連遺跡発掘調査報告書は発行年を付して(関連2009)などと略記した。
8. 調査で得られた資料は宮城県教育委員会で保管している。
9. 本書は宮城県多賀城跡調査研究所の所員全員の検討をへてⅡ-4Aと図版を廣谷和也、他を吉野武が執筆し、吉野・廣谷が編集した。

# I. 多賀城関連遺跡発掘調査事業の計画

## 1. 事業の目的

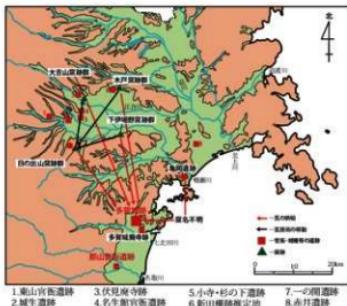
当研究所では、昭和49年以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の調査研究と併行して多賀城と密接に関連する県内の城柵官衙遺跡と生産遺跡の調査研究を継続的に実施している。この事業は古代の陸奥国、及び出羽国を統治する中心的な役割を果たした多賀城を多角的に調査・研究するとともに関連する遺跡の解明と保存・活用を目的としている。

## 2. 第8次5カ年計画について

調査は、多賀城跡調査研究委員会の指導に基づき5カ年計画を立てて実施している（表1）。第8次5カ年計画では、4年次目までは前回の5カ年計画に引き続き大崎平野に分布する多賀城第I期の窯跡群の発掘調査を実施し、5年次目からは同平野の北辺に所在する城柵官衙遺跡の調査に移行する。

前者は多賀城第I期の窯跡群の実態と瓦・須恵器生産の様相を捉えることで窯跡群と多賀城との関連や当時の工人集団とその体制、社会的背景などの諸問題を検討し（第1図）、後者は大崎平野北辺に連なるように分布する城柵官衙遺跡の実態を具体的に把握することを目的としている。

第8次5カ年計画2年次目の平成22年度は、一昨年度から始めた色麻町日の出山窯跡群F地点の調査を継続し、同地点の北半東斜面の発掘調査を実施した。事業費は2,846千円（国庫補助率50%）である。



第1図 第I期多賀城への瓦の供給

年次	年 度	遺 跡 名	調 査 内 容	対象面積 (m²)	発掘面積 (m²)	備 考
1	平成20年	日の出山窯跡群 城柵官衙遺跡分布調査等	F地点第2次発掘調査 涌谷町城山裏土窯跡発掘調査協力	4,425	620	日の出山窯跡群Ⅱ同行
2	平成22年	日の出山窯跡群 城柵官衙遺跡分布調査等	F地点第3次発掘調査 涌谷町城山裏土窯跡発掘調査協力	2,000	375	日の出山窯跡群Ⅲ（本書）
3	平成23年	大吉山瓦窯跡 城柵官衙遺跡分布調査等	第1次発掘調査	2,200	600	城柵官衙調査対象道路選定
4	平成24年	大吉山瓦窯跡 城柵官衙遺跡分布調査等	第2次発掘調査	(未定)	(未定)	多賀城第I期窯跡群の総括 城柵官衙調査対象道路選定
5	平成25年	城柵官衙遺跡発掘調査等	発掘調査	(未定)	(未定)	第8次5カ年計画の総括

※平成22年度までは実績。平成23年度以降は計画。

表1 第8次5カ年計画

## II. 日の出山窯跡群 F 地点第3次調査

### 1. 遺跡の概要

日の出山窯跡群は宮城県加美郡色麻町四竈字東原他に所在する（第2図）。遺跡は色麻町の中心部から約4km南東の通称「日の出山」周辺に位置し、標高50～70m前後の丘陵上に立地する。

本遺跡は、古くから陸奥国府多賀城の第Ⅰ期の瓦等を生産した窯跡群として大崎市下伊場野窯跡群・木戸窯跡群・大吉山瓦窯跡とともに周知されている。その製品のうち瓦は多賀城跡のほか、色麻町一の関遺跡・加美町城生柵跡・菜切谷廃寺跡・東山官衙遺跡・大崎市名生館官衙遺跡・伏見廃寺跡などの大崎平野西部の城柵・官衙・寺院等に供給され、須恵器は加美町米泉館山横穴墓群・色麻町色馬古墳群・大崎市山畠横穴墓・混内山横穴墓などの群集墳や横穴墓群にも出土例がある（註1）。

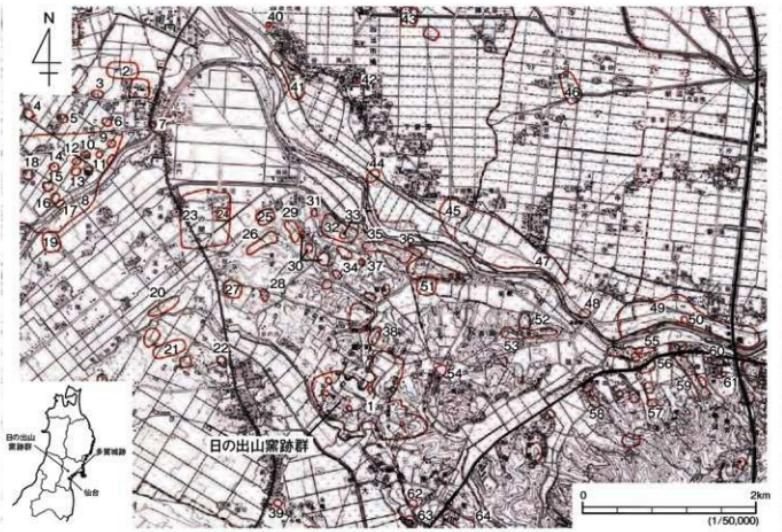
遺跡の範囲は東西約1.5km、南北約1kmで、窯跡の所在は A～F の6地点で捉えられている（第3図）。そのうち発掘調査が行われた A 地点（宮城県1970）と C 地点西部（色麻町1993）、磁気探査と試掘調査がなされた F 地点（色麻町1990）では内容が一部明らかになっており、A 地点は昭和57年（1982）に国指定の史跡とされ、整備されている。一方、B・D・E 地点では瓦や須恵器などの遺物は採取されるが、開発による地形の変更で多くの窯跡が壊されたとみられており、詳細は不明である。

### 2. 調査の目的

当研究所による調査は第7次5ヵ年計画4年次目の平成19年度から開始し、平成19年度は A 地点の史跡指定地と尾根を挟んだ北斜面、翌20年度からは遺跡中央部南側の北から南に「く」字状に延びる丘陵に立地する F 地点を調査している（関連2008～2010）。

その結果、A 地点北斜面と F 地点東斜面南半では窯跡に関わる遺構はなかったが、F 地点西斜面では窯跡や工房とみられる堅穴住居跡、粘土採掘坑などの原料の採集から製品の成形・焼成に至る一連の遺構を発見し、窯場の様相を明確にしうる成果が得られた。また、東斜面北半でも部分的な確認に留まるが、以前の磁気探査や試掘調査で捉えられていた斜面が東に張り出した場所に窯跡があることが明らかとなり、さらに範囲が広がる可能性も予想された。

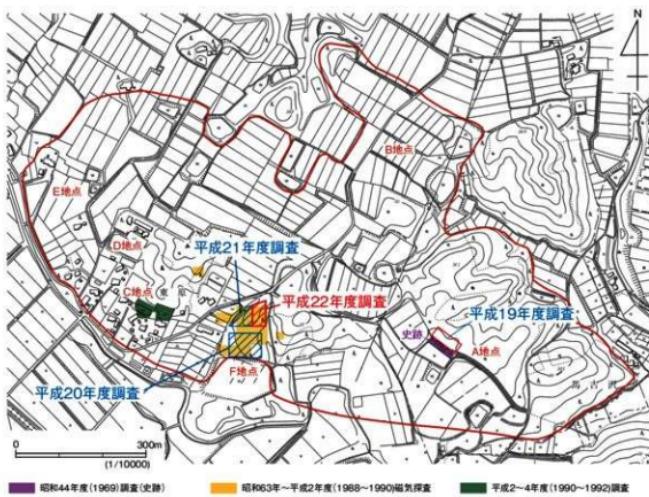
以上の成果を受けて、今年度は東斜面北半を対象に第3次調査を実施し、実態を明らかにすることにした。この調査によって F 地点全体の様相が把握されることになる。



\*宮城県道路地図(宮城県教育委員会1998)を作成

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	史跡 日の出山遺跡群	古墳	新良	23	一の岡遺跡	城柵壁・寺社?	奈良	45	原江遺跡	散布地	古代・中世
2	牛野遺跡	散布地	古代	25	真山遺跡	散布地・城塁	平安・中世	46	引田遺跡	散布地	古墳中
3	高木B遺跡	散布地	古代	26	鏡原遺跡	散布地・城塁	興文・奈良・古代	47	堤根遺跡	散布地	古墳中・古代・中世
4	兎井遺跡	散布地	古墳後	27	安山遺跡	散布地	古代	48	中川遺跡	散布地	古墳中
5	西昌今遺跡	散布地	興文・古代	28	愛宕山遺跡	空跡	奈良	49	舟見遺跡	散布地	古墳・奈良・平安・中世
6	田中遺跡	散布地	奈良・平安	29	百林瓦窯跡	空跡	奈良	50	飯石玉湖又持村跡	神社	平安
7	猪山遺跡	円墳・柱塚	古墳中・中世	30	奥原古墳	古墳	古墳後	51	板崎遺跡	散布地	古代
8	色麻古墳群	円墳・集落	古墳・古墳後・奈良・平安	31	猪野神社古墳	前方後圓・円墳	古墳	52	花山遺跡	散布地	興文・奈良・古代
9	上大久A遺跡	散布地	奈良・古代	32	傳ノ栗原跡	散布地・城塁	興文・平安・中世	53	花畠山古墳群	古墳	古墳後
10	地蔵堂B遺跡	散布地	古墳	33	奥原古墳	古墳	古墳後	54	道山野山古墳	空跡・散布地	奈良・平安
11	瀬山遺跡	散布地	古代	34	前原古墳群	円墳	古墳後	55	坂本山山穴墓群	横穴墓	古墳後
12	地蔵堂A遺跡	散布地	古代	35	新免跡	古寺寺跡	奈良開・円墳	56	青山山山穴墓群	横穴墓	古墳後
13	天王遺跡	散布地	古代	36	桃谷地遺穴	古墳後		57	青山山山穴墓群B群	横穴墓	古墳後
14	新宿A遺跡	散布地	興文・平安	37	東原夷葉塚古墳群	横穴墓	古墳後	58	青江B遺跡	散布地	古墳
15	新宿B遺跡	散布地	興文・平安	38	東原塚六基群	横穴墓	古墳後	59	守下塚古墳群	横穴墓	古墳後
16	下原A遺跡	散布地	古代	39	前原遺跡	散布地	古代	60	同上跡 山洞御古墳	横穴墓	古墳後
17	下原B遺跡	散布地	奈良・古代	40	加賀町			61	瀧内山山穴墓群	横穴墓	古墳後
18	新宿C遺跡	散布地	古代	41	鷲島押持古墳	古墳	古墳				大瀬村
19	上新田遺跡	集落	奈良・平安	43	水原遺跡	散布地	古代	62	樺垂空跡	空跡	古代
20	土器坂遺跡	散布地	奈良	42	御来遺跡	散布地	古代	63	吹付空跡	空跡	古代
21	大原A遺跡	散布地	古墳・古代	43	田尻遺跡	散布地	古代	64	吹付空跡	空跡	古代
22	上新町遺跡	散布地	古代	44	長井川原遺跡	散布地	興文・奈良・平安				

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡(主に古墳時代～古代)



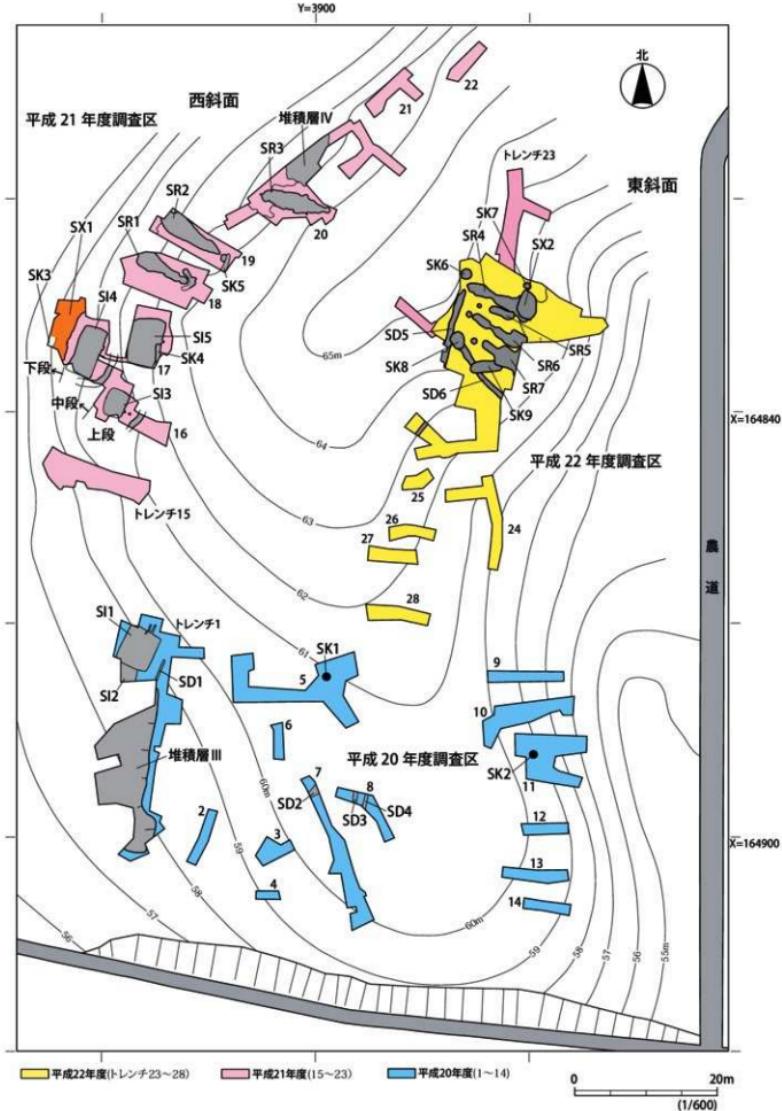
第3図 日の出山窯跡群 A～F 地点の位置

### 3. 調査の経過と方法

調査は平成22年5月31日に開始した。表土剥ぎはミニショベルカーで行い、昨年度に窯跡を確認した地点から範囲を広げるように遺構を検出した。その結果、窯跡の分布は斜面が東に張り出した狭い範囲に留まることが明らかになった。また、昨年推測した窯跡のうち北・南辺のものは溝や遺物を多めに含んだ堆積層であることが判明した。最終的に検出した遺構は窯跡4基、瓦集中遺構1ヶ所、溝2条、土壤4基で、設定したトレンチは6本(トレンチ23～28)である。

検出した遺構は保存を前提とし、掘下げによる精査は一部に留めた。遺構の登録はF地点調査開始の平成20年度以来、遺構の種類ごとに記号と番号を続けて付しており、今回の調査で確認した遺構はSR4～7窯跡、SX2瓦集中遺構、SD5・6溝、SK6～9土壤とした。記録は平・断面図を縮尺20分の1、及び200分の1で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。各遺構の精査は7月22日に終了し、23～28日には埋戻し作業を行った。機材やプレバブ等を搬出し、調査を終了したのは7月29日である。この間、7月14日には報道機関に調査成果を公表し、7月17日には現地説明会を開催して一般に公開した。説明会には約100人の見学者があり、成果について説明した。

なお、調査終了後の11月14日には「日の出山窯跡群発掘調査成果速報展」、12月11日には「平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会」、平成23年2月26日には「第37回古代城柵官衙遺跡検討会」で成果の概要を報告した。



第4図 調査区と発見した構造

## 4. 発見した遺構と遺物

### A. 遺構

厚さ10～50cmの表土を除去し、明褐色砂質シルト(7.5YR5/6)からなる地山で窯跡4基、瓦集中遺構1ヵ所、溝2条、土壙4基を確認した(第4・5図)。

遺構は斜面が東側に張り出した傾斜の緩やかなトレンチ23の北側に分布している。4基の窯跡は概ね長軸線を揃え、等高線にはば直交して造られており、瓦集中遺構、溝、土壙が周囲に位置している。

#### (1) 窯跡

地下式窯窯4基を確認した。いずれも部分的に精査を実施している。また、SR4～6の東側には炭化物を含む灰原が分布している。北から順に番号を付し、最も北側に位置する窯跡をSR4窯跡とした。

##### 【SR4窯跡】(第5～8図)

確認面の標高は62.8m～64.6mである。SR5窯跡、SX2瓦集中遺構より古い。本窯跡では燃焼部の一部のみを精査したのみで、それ以外の箇所については判然としない。

〔規模〕全長は、前庭部の東端が不明だが9.9m以上である。

〔方向〕長軸の中心線で座標の西に対して北に23°振れている。

〔燃焼部〕燃焼部の床面は4枚あるが(1～4次床面)、1次床面は2次床面を造る際に機能面を削平されているため残存しない。2～4次床面はいずれも上面が硬化している。

2次床面は1次床面を削平し、厚さ最大5cmのオリーブ黒色砂質シルト(8層)で嵩上げして床面としており、幅は0.8mである。

3次床面は厚さ最大10cm(6層)、4次床面は厚さ最大20cm(5層)の黒褐色シルトで嵩上げして床面としており、幅は3次床面が0.9m、4次床面が1.2mである。また、4次床面上では燃料として使用された長さ約45cm以上、幅10～15cmの炭化材が3個確認された。

〔前庭部〕平面形は膨らみのある方形とみられる。幅は平成元年試掘トレントで3.8m、深さ0.8mである。

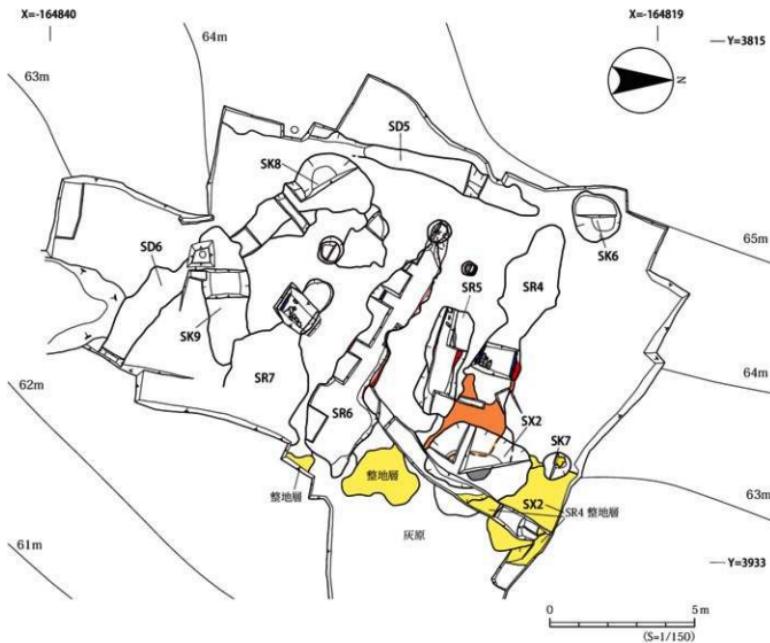
〔整地層〕窯の掘削時の地山土を主体としたにぶい黄褐色シルトを整地したもので、前庭部の北側を中心に長軸3.6m、短軸3.5m以上の範囲で分布がみられる。厚さは最大で0.3mである。なお、南東側にある同様の整地層は本窯跡かSR6窯跡に伴うものと思われる。

〔堆積土〕4層に大別した。1層は、小さな地山ブロックや炭化物を少量含む黒色シルトや暗褐・黒・褐色砂質シルトなどを主体とする自然流入土である。2層は地山や炭化物を少し含む黒褐色砂質シルトと地山主体のにぶい黄褐色シルト質砂などからなるSR5窯跡掘削時の整地層、及び多量の遺物を含む人為的な埋土である。3層は地山を多く含むにぶい黄褐色シルト質砂、及び青灰・赤褐色土ブロック主体の天井崩落土で、4層は4次床面に伴う黒色炭層である。

##### 【SR5窯跡】(第5・8・9図)

確認面の標高は62.8m～64.3mである。SR4窯跡より新しい。本窯跡では南半を中心精査した。

〔形状と規模〕煙道から前庭部までを確認した。平面形は焼成部、燃焼部、前庭部の境が不明瞭な細長い形状で、各部は傾斜の違いで区別される。前庭部の灰原側は斜面下方でやや狭まりながら収まる。



第5図 東斜面地区の構造

全長は5.5mである。窯体は3.0mで、焼成部が2.3m、燃焼部が0.7m、前庭部は2.5mである。

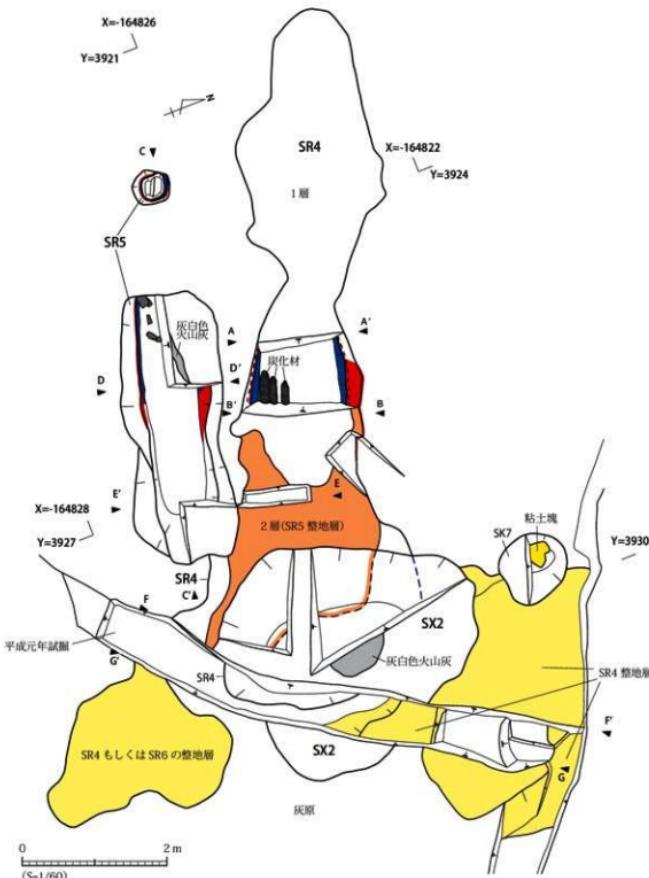
〔方向〕長軸の中心線で座標の西に対して北に16°振れている。

〔天井〕焼成部の奥で長さ約1.1m残存しており、床面(3次床面)からの高さは約0.6mである。

〔煙道〕平面形は直径0.5mの円形である。

〔焼成部と燃焼部〕焼成部、及び燃焼部床面は3枚で(1～3次床面)、いずれも上面が硬化している。1次床面は淡黄色粘土層の地山を直接床面としており、燃焼部はほぼ平坦で、焼成部は約11°の斜面をなす。2次床面は厚さ最大10cm(8層)、3次床面は厚さ最大15cm(5層)の灰色粘土質シルトを燃焼部から焼成部にかけて嵩上げして床面としている。燃焼部床面はほぼ平坦であるが、前庭部より若干窪んでいる。幅は、3次床面で0.7mである。

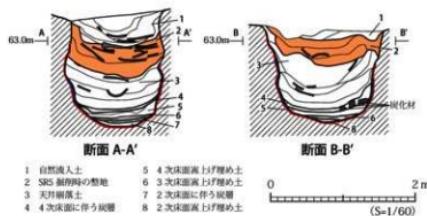
〔前庭部〕床面は燃焼部側から0.8m平坦面が続き、約20°の斜面で灰原方向に立ち上がる。幅は確認面で1.5m、床面で最大0.7mである。



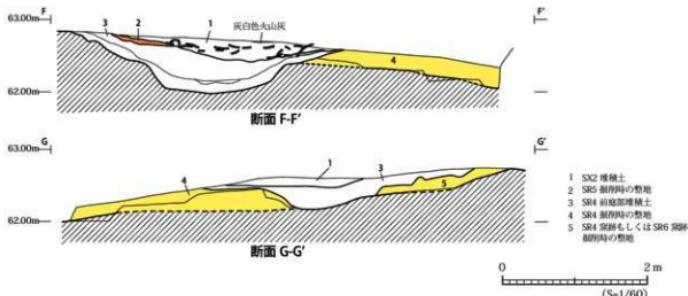
第6図 SR4・5 窯跡 SX2 瓦集中遺構

〔整地層〕窯掘削時の地山を主体とする土を北側のSR4窯跡廃絶後の窪地に整地したもので、少量の炭化物を含む。長軸4.5m、短軸2.5mの範囲で分布しており、厚さは最大で0.8mである。

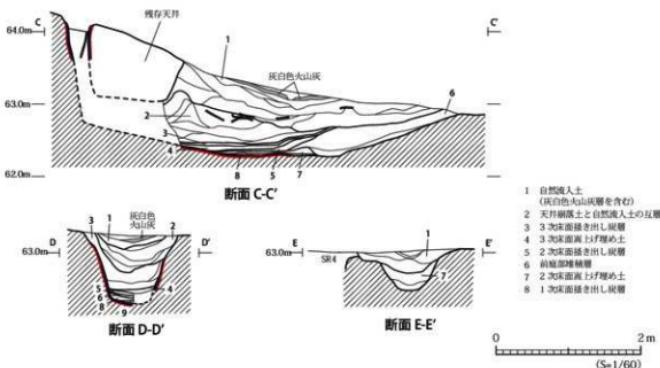
〔堆積土〕3層に大別した。1層は黒色シルトや黒褐・褐灰色砂質シルトからなる自然流入土で、灰白色火山灰を含む。2層は地山を多く含むにぶい黄褐色シルト質砂主体の崩落土、及び青灰・赤褐色土ブロック主体の天井崩落土、3層は3次床面に伴う黒色炭層である。



第7図 SR4窯跡断面図



第8図 SR4窯跡・SX2瓦集中遺構断面図



第9図 SR5窯跡

#### 【SR6窯跡】(第5・10図)

確認面の標高は62.3m～64.5mである。本窯跡では北半を中心精査した。

【形状と規模】煙道から前部までを確認した。平面形は焼成部と燃焼部の境が不明瞭な細長い形状で、境は傾斜の違いで区別される。全長は9.0mである。窯体の長さは床面でみると全長6.8m、焼成部4.2m、

燃焼部26mで、前庭部は1.9mである。窓体の平面形は焼成部と燃焼部の境付近で若干くびれる細長い形状で、奥壁付近に向けてやや狭まる。前庭部は焚き口から左右に張り出しており、平面形はやや膨らみのある方形をしている。

〔方向〕長軸の中心線で座標の西に対して北に31°振れている。

〔天井〕煙道から長さ0.3m残存しており、床面からの高さは0.7mである。

〔煙道〕平面形は直径0.8mの円形で、ほぼ直立している。

〔焼成部〕床面は2枚ある(1～2次床面)。ともに表面は青灰色に還元し硬化しており、幅は1.1mである。

1次床面は地山の黄褐色土からなるが、燃焼部との境付近では部分的な補修が認められる(7層)。補修部分の長さは1.0mで、最大10cmほど掘り込んで青灰色のシルト質砂で埋め戻している。

2次床面は1次床面に最大5cmのぶい黄褐色砂質シルトで嵩上げして床面としている。傾斜は5°～25°で奥壁方向に向かって強まるが、煙道直下は20°とやや弱まる。奥壁はほぼ直立する。床面には奥壁から二列分の焼台が原位置をとどめて残存している。奥から1列目が丸瓦、2列目が平瓦を各々凸面を上にして窯跡の長軸に対して直交する向きで並べられており、やや階段状を呈す。平瓦はIA類aタイプとIB類、丸瓦はIB類bタイプが使われている(本文編1982)。

〔燃焼部〕床面は5枚あるが(1～5次床面)、1次床面は2次床面を造る際に壊されて残存しない。また、5次床面は幅を30cm広げてつくられている。2～5次床面はいずれも平坦で上面が硬化しており、4次床面が焼成部1次床面に、5次床面が焼成部2次床面にそれぞれ対応する。

2次床面は、1次床面と1次床面に伴う搔き出し炭層(12層)を掘り込み、厚さ最大10cmの褐色砂質シルトで嵩上げして床面としている。

3次床面は、2次床面上に厚さ最大10cmの褐色シルトを嵩上げして床面としている。また、長さ約0.4m、厚さ3cmの部分的な補修が認められる(9層)。

4次床面と5次床面は、ともに前の床面上に厚さ最大10cmの褐色シルトを嵩上げして床面としている。床面幅は2～4次床面が1.0m、5次床面が1.3mである。

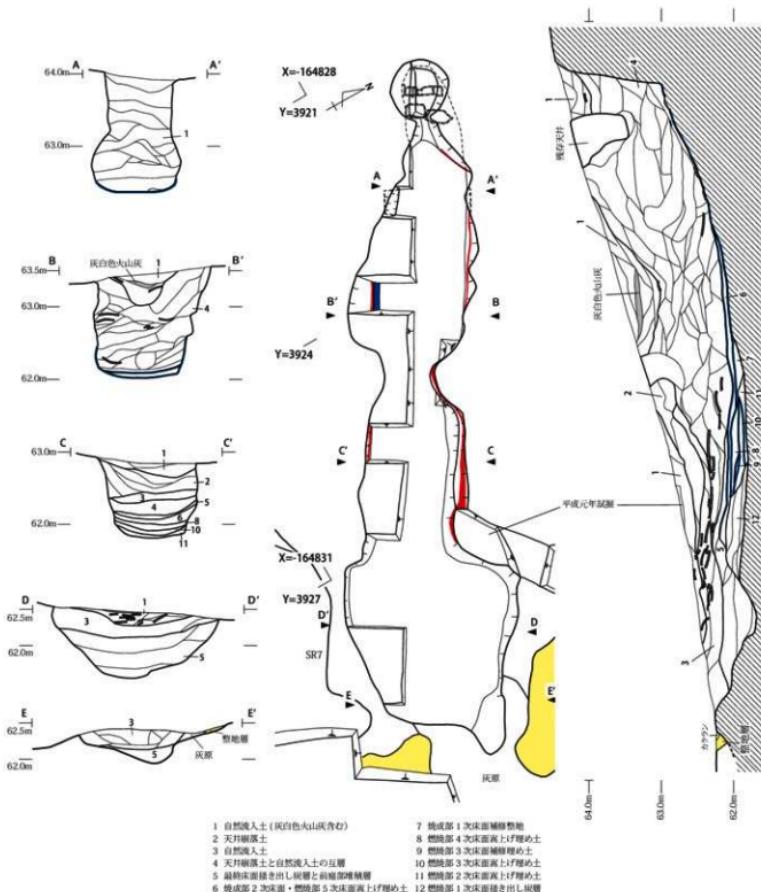
側壁は地山の明褐色砂質土と淡黄色粘土で、床面と同様に硬化している。また、3次床面に伴う側壁には平瓦を、5次床面に伴う側壁には丸瓦を、それぞれ粘土等で貼り付けて補修している。用いられた瓦は平瓦がIA類aタイプ、丸瓦がIB類bタイプである(図版4)。

〔前庭部〕焚き口から北側に約0.9m南側に約0.4m張り出しており、平面形はやや膨らみのある方形である。床面の長さは1.9m、幅は確認面で2.3mで、深さは最大0.6mである。

〔整地層〕窓の掘削時の地山土を主体としたぶい黄褐色シルトによる整地で、前庭部の北側と東側に長軸1.0m、短軸0.5m以上の範囲で分布している。なお、限定できないが、南東側にみられる同様の整地層は本窯跡かSR7窯跡に伴うものと思われる。

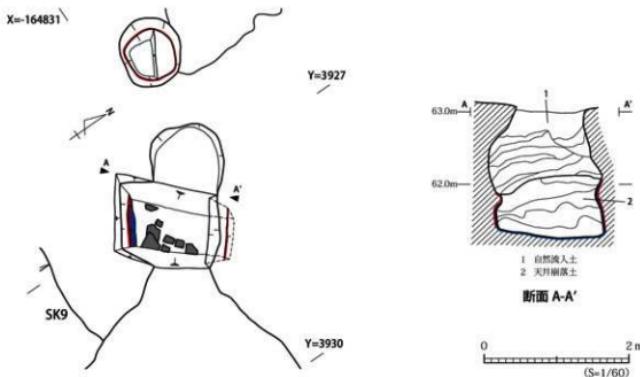
〔堆積土〕5層に大別した。まとまった天井の崩落が2回あり、4層が焼成部付近を中心とした1回目の天井崩落土、2層が燃焼部付近を中心とした2回目の天井崩落土である。

1層は黒褐・赤黒色砂質シルトからなる自然流入土で、灰白色火山灰を含む。2層は地山や焼土、及び炭化物を含む褐色砂シルト主体の天井崩落土である。3層は焼土や炭化物を含む黒褐色砂質シルト



第10図 SR6窯跡

の自然流入土、4層は地山を多く含む褐色やにぶい黄褐色のシルト質砂またはシルト、及び天井崩落によるブロック主体の青灰・赤褐色土の互層である。3・4層は燃成部から前庭部に多量の遺物を含む。5層は5次床面に伴う黒褐色炭層、及び挿き出された炭を含む黒褐色砂質シルト層である。



第11図 SR7 窯跡

**[SR7窯跡] (第5・11図)**

確認面の標高は62.0～63.9mである。SK9土壌より新しい。本窯跡では、焼成部の一部を最終床面まで精査した。

**[形状と規模]**確認面での平面形は、窯体が細長く、煙道の東3.1mの所から前庭部が左右に広がる形状をしている。全長は7.0m以上で、幅は最も広い所で3.2mである。

**[方向]**長軸の中心線で座標の西に対して北に26°振れている。

**[煙道]**遺構確認面から約0.2m掘り下げて検出した。平面形は直径0.7mの円形である。

**[焼成部]**最終床面は青灰色に還元し硬化しており、幅は1.4mである。なお、横断面側壁の形状などから、さらに古い床面があるとみられるが詳細は不明である。

**[堆積土]**2層に大別した。1層は地山の崩落土と褐色砂質シルトの自然流入土による互層、2層は地山主体の褐色・にぶい褐色シルト質砂とブロック主体の青灰・赤褐色土による天井崩落土である。

**(2) 瓦集中遺構**

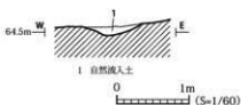
**[SX2瓦集中遺構] (第5・6・8図)**

SX2窯跡前庭部付近で確認した。SR4窯跡より新しい。平面形は長軸3.7m、短軸3.1mの不整な梢円形で、断面形は深さ0.3mの皿状をなす。堆積土は多量の瓦を含む黒色シルトで、上面には薄く灰白色火山灰がみられる。ともに自然流入土である。

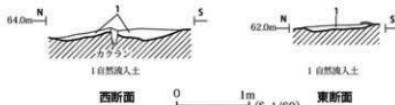
**(3) 溝**

**[SD5溝] (第5～12図)**

調査区の西を南北方向に延びる。確認した長さは11.5mでさらに南側に延びる。上端幅は約0.8m、深さは0.1mで、断面形は「U」字形である。堆積土は褐色砂質シルトで、自然流入土である。



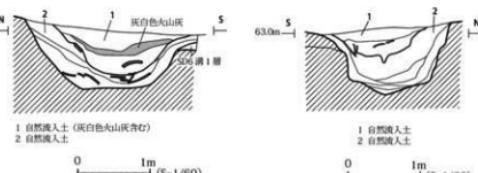
第12図 SD5溝



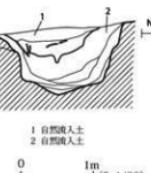
第13図 SD6溝



第14図 SK6土壤



第15図 SK8土壤



第16図 SK9土壤

#### 【SD6溝】(第5・13図)

調査区の南をSK8土壤から南東方向に延びる溝である。SK9土壤と重複するが、堆積土が薄く新旧関係は確認できなかった。確認した長さは9.0mでさらに東側に延びる。上端幅は北西側ではSK8土壤と接続するため1.8m、南東側では1.0m、深さは北西側で15cm、南東側で5cmである。堆積土は、SK9土壤より西側では炭化物を少量含む褐色砂質シルト、東側では炭化物と多量の遺物を含む黒色砂質シルトで(図版6)、ともに自然流入土である。

#### (4) 土壌

##### 【SK6土壤】(第5・14図)

調査区の北西隅で確認した。平面形は直径1.6mの不整な円形で、深さは0.5mである。断面形は、南側は逆台形状で壁が緩やかに立ち上がるが、北側の壁は若干抉りこまれて立ち上がる。堆積土は、1層が灰白色火山灰のブロックを少量含む黒褐色シルト、2層が地山土・炭化物を含む暗褐色砂質シルトで、いずれも自然流入土である。

##### 【SK7土壤】(第5・6図)

調査区北側のSR4窓跡整地層上で確認した。平面形は直径1.0mの不整な円形である。深さは14cmで、底面では長軸約0.3mの不整な形の淡黄色粘土塊を検出している。

##### 【SK8土壤】(第5・15図)

調査区の南西で確認した。SD6溝と一連とみられる。平面形は直径約2.2mの不整な円形、深さは0.9mで、南東側でSD6と接続する。断面形は逆台形状である。堆積土は2層に大別され、1層は灰白色火山灰を挟む黒色シルト、2層は地山を多く含む黒褐・褐色砂質シルトで、自然流入土である。

##### 【SK9土壤】(5・16図)

調査区の南で確認した。SR7窓跡より古い。SD6溝とも重複するが、堆積土が薄く新旧は確認できなかった。平面形は長軸4.8m、短軸1.6mの細長い梢円形で、深さは0.9mである。断面形は上半が少し開く逆台形状で、底面は中央がやや窪む。堆積土は2層に大別した。1層は炭化物を含む黒・黒褐色シルト、2層は地山・炭化物を含む暗赤褐・黒褐色砂質シルト主体で、いずれも自然流入土である。

## B. 遺物

多量の瓦と少量の土器が出土している。その概要と各遺構からの出土の様相について述べる。

### (1) 出土遺物の概要

#### a. 瓦

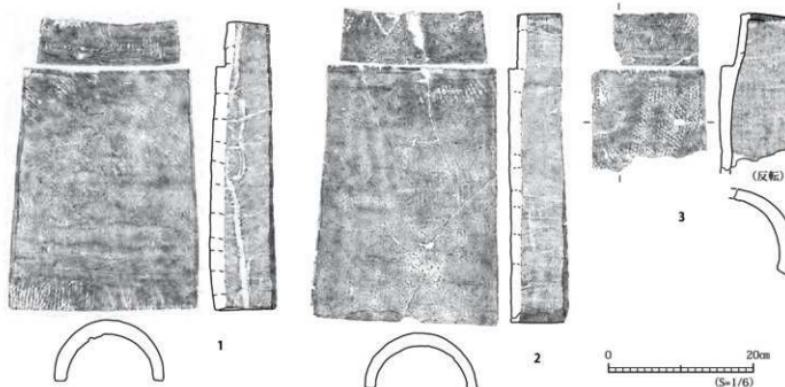
丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、隅切瓦、鬼板が出土しており（64頁付表）、それらの中には文字瓦も含まれている。数量は平瓦が主体をしめる。これらの瓦は概ね多賀城跡の分類（本文編1982）で捉えられるものであり、それに基づいて記述する。なお、多賀城跡の平瓦 I C・II B 類には各々細分があるが、今回の調査も含めて本窯跡群出土の I C 類は a タイプ、II B 類には a2 タイプに限られている。以下の記述では特に示さない限り、I C 類は a タイプ、II B 類は a2 タイプを指すこととする。

#### ①丸瓦（第17図）

446点出土した。粘土紐巻き作り、ロクロ調整による丸瓦で、多賀城跡の分類で II 類にあたるものである。有段・無段の形態が判明するものは全て玉縁をもつ有段の II B 類である。ロクロ調整前の叩き目には縄叩きの a タイプ（第17図1）、格子叩きの b タイプ（2・3）があり、a タイプが主体をしめる。なお、昨年の東斜面の調査では矢羽根叩きの c タイプもみられた（関連2010第19図29）。

#### ②平瓦（第18～22図）

1573点出土しており、桶巻き作りと一枚作りのものがある。前者は I A～D 類、後者は II A 類にあたる平瓦で、数量的には I A 類が8割以上をしめる。なお、昨年の西斜面の調査で多量に出土した II B 類は全く出土していない。



No.	遺構・層位	現存	特 徴	分類	登録番号	踏査号
1	SX2	完形	長さ：39.7cm、広場幅：15.7cm、底面幅：11.7cm、凸：縄叩き→ロクロナデ。凹：粘土紐巻筋・布目。無縁・小口：ケズリ。色調：黒灰褐色（10YR8/1）	II Ba	X2-5	BI5019
2	S86 梅壇粘土	ほぼ完形	長さ：42.6cm、広場幅：16.5cm、底面幅：12.0cm、厚さ：18.0cm、凸：正格子叩き→ロクロナデ。凹：粘土紐巻筋・布目。無縁・小口：ケズリ。色調：黒灰褐色（7.5YR8/1）	II Bb	B8-4	BI5019
3	SK7	1/4	厚さ：14～26mm（20mm）、凸：格子叩き→ロクロナデ。凹：布目。小口：ケズリ。色調：灰青褐色（10YR8/2）	II Bb	K7-2	BI5019

第17図 丸瓦

【I A類】桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後、凹面と凸面をナデ調整した平瓦である。ナデ調整は丁寧なものが多いが（第18図4）、前段階の叩き目や布目が確認できる不十分なものもある。叩き目には縄叩きのaタイプ（5）、格子叩きのbタイプ（6・7）、矢羽根叩きのcタイプがあり（第19図9・10）、aタイプが主体をしめる。なお、cタイプは従来の分類にはないタイプだが、両面がナデ調整された特徴がI A類a・bタイプと同じであり、後述のI C類に含まれる矢羽根叩きの平瓦とは分けられることから、本書ではI A類cタイプとして記す（註2）。

【I B類】桶巻き作りの平瓦円筒を分割後、凸面をナデ調整した平瓦である。I A類から凹面のナデ調整を省略したとみられるもので、模骨痕が比較的明瞭に認められる（第20図）。また、凸面のナデ調整が不十分で前段階の叩き目が判るものには縄叩きのaタイプがある（12）。なお、凸面のナデ調整は通常は長軸方向をとるが、短軸方向でなされたものもある（13）。

【I C類】桶巻き作りの平瓦円筒の分割後、凸面を叩き調整した平瓦である。全て断面形が円弧状のaタイプにあたるものであり、両側端が極端に折れ曲がるbタイプはない。

凸面の叩き目は桶巻き段階のものに縄・格子叩き目、分割後の二次叩き目に矢羽根・縄・格子・平行叩き目があり、組み合わせには縄→矢羽根（第21図14）、同一原体による縄→縄（15）、縄→平行（16）、縄→格子（18）、格子→平行（19）がある。19は昨年報告した資料（関連2010年第20図36）と接合したものである。そのほか二次叩きで桶巻き段階の叩き目が完全に消されているものもある。なお、二次叩きの前後には凸面がナデ調整されるものもみられるが、凹面はナデ調整されていない。

【I D類】桶巻き作りの平瓦円筒の分割後、凹面をナデ調整した平瓦である。数量は極めて少ないが、多賀城跡政府では例のない完形品が出土している（第21図20）。法量は長さ37.5cm、幅が狭端で24.8cm、広端で30.0cm、厚さが2.0～2.5cmで平面形は台形を呈す。凸面にはつぶれ気味の格子叩き目が全面にみられる。

【II A類】瓦より小さい一枚布を敷いた凸型台の上で、凸面を縄で巻いた原体で叩き締めてからナデ調整をした一枚作りの平瓦である。I A類につぐ数量があるが、平瓦全体の中では1割弱である。凹面の布目は瓦より一回り小さく、端部を折り曲げて周囲をかがり締じた一枚布の圧痕で、異なる布をつなぎ合わせたものが多い。合わせ方から同一の布と判るものもある（第22図21・22、註3）。

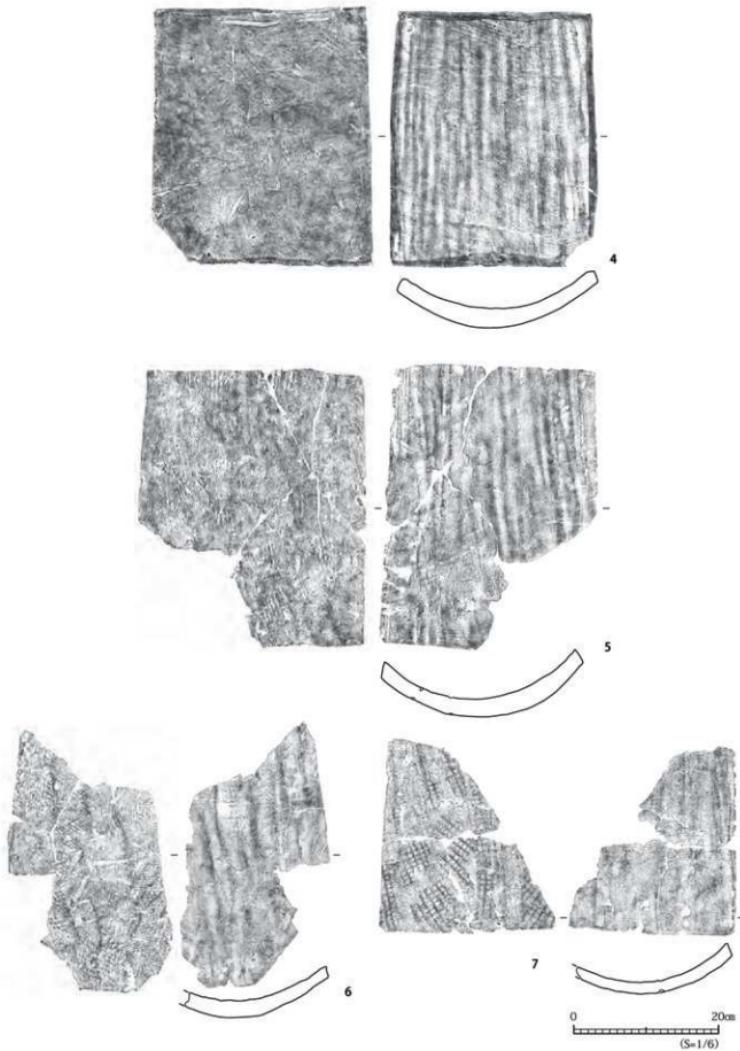
#### ③軒丸瓦（第23図）

瓦当部分の破片が31点出土している。文様が判るのは重弁蓮花纹で、型番まで判明するものには重弁蓮花纹122が4点、重弁蓮花纹133が1点ある。（第23図27）

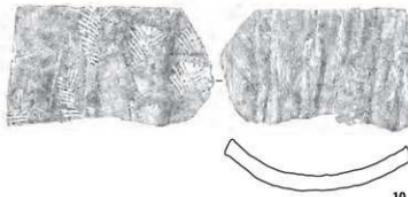
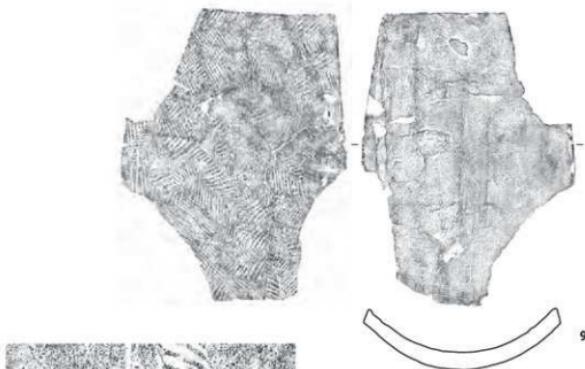
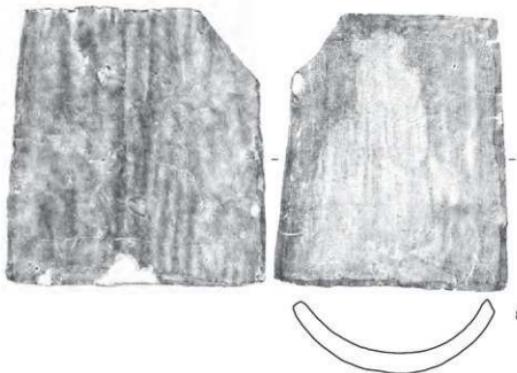
そのうち122は蓮弁に文字のない122A（23）、範への影込みで生じた陽出文字のある122Bがあり、後者には通常の「相」（24・26）のほか、左文字「相」（25）もある。また、25・26はSR4窯跡4層での出土であり、位置も近く、焼きの状態も類似することから同一個体の可能性がある。

#### ④軒平瓦（第24・25図）

16点出土した。瓦当部分の破片資料が多いが、完形品もある。いずれも二重弧文511とみられるもので、使用される平瓦からI A類を用いたaタイプが2点（第24図31・32）、I B類によるbタイプが2点（34・35）、I C類によるcタイプが10点（第25図36～44）、不明が5点あり、I A類の多い平



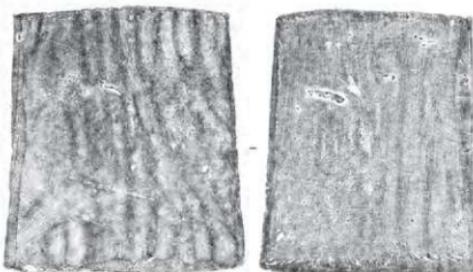
第18図 平瓦 I A類(1)



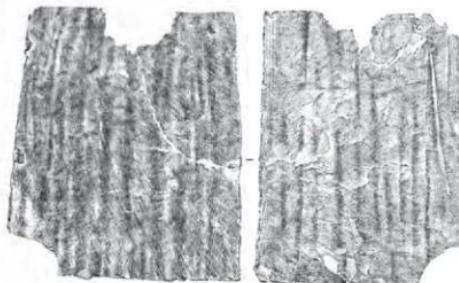
0 5cm  
(S=1/2)

0 20cm  
(S=1/6)

第19図 平瓦 I A類(2)



11



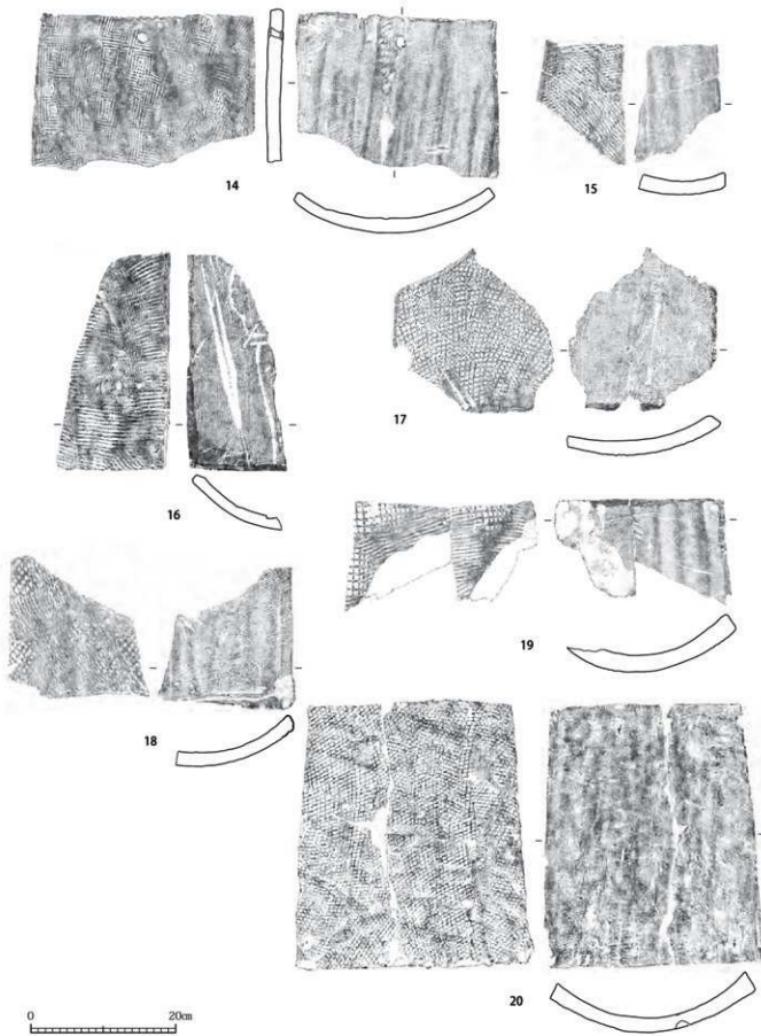
12



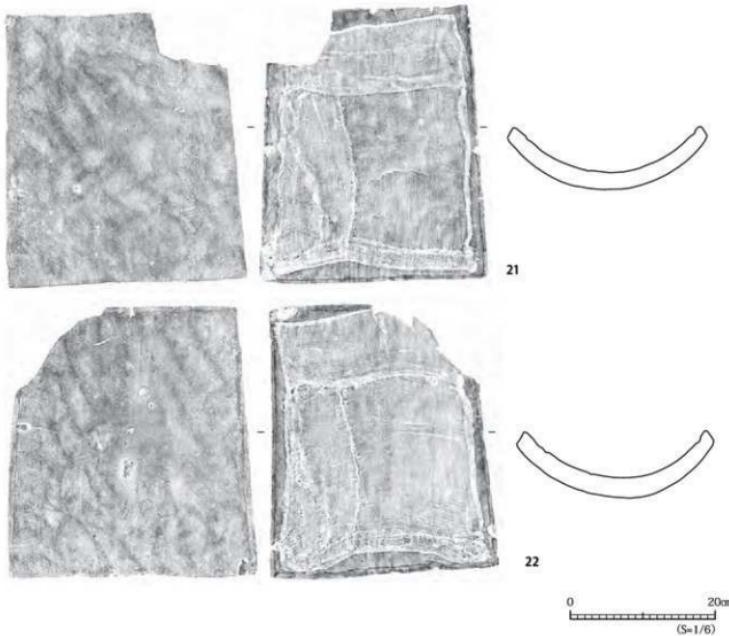
13

0 20cm  
(S=1/6)

第20図 平瓦 I B類



第21図 平瓦 I C・D類



第18図～第22図

No.	遺物・層位	現存	特　徴	分類	登錄番号	組番号
4	SRA 2層	はげ定形	長さ:35cm、底面幅:27.8cm、後縁幅:26.8cm、厚さ:2.7cm。凸：椎骨痕・布目→ナデ。凹：布目→ナデ、圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(10YR5/2)	I A	R4-23	B15020
5	SX2	3/4	長さ:39.4cm、底面幅:25.6cm、厚さ:2.0～2.2cm(2.2cm前後)。凸：縞明ヨリ→布目→ナデ。	I Ab	S7	B15020
6	SRA 5層(3次末灰層)	1/3	厚さ:23cm、凸：柄格子跡→ナデ。凹：布目→ナデ。圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(23Y5/1)	I Ab	R6-23	B15020
7	SX2	1/4	厚さ:18.8cm、凸：柄格子跡→ナデ。凹：椎骨痕・布目→ナデ。圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(10YR5/1)	I Ab	X2-14	B15020
8	SX2	はげ定形	長さ:38.0cm、底面幅:26.6cm、後縁幅:26.0cm、凸：ナデ。凹：布目→ナデ。圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(10YR4/1)	I A	R4-41	B15021
9	SK6 2層	2/3	長さ:37.0cm、底面幅:24cm、凸：矢羽根跡→ナデ。凹：椎骨痕・布目→ナデ。圓窓・小口→ケズリ。新しく 発見した箇所にいくずれ黒色(10YR7/2)	I Ac	K6-2	B15021
10	SRA 1層	1/3	厚さ:21cm、凸：矢羽根跡→矢羽根跡→布目→ナデ。圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(10YR4/1)	I Ac	R5-26	B15021
11	SRA 1層	定形	長さ:36.1cm、底面幅:29.5cm、後縁幅:25.5cm、凸：ナデ。凹：布目、圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(23Y5/1)	I B	R4-32	B15022
12	SRA 1層	はげ定形	長さ:36.1cm、底面幅:29.5cm、後縁幅:25.5cm、凸：ナデ。凹：椎骨痕・布目→平打跡・椎骨 痕跡→ナデ。圓窓・小口→ケズリ。色調：黒灰色(23Y5/1)	I Ba	R4-29	B15022
13	SX2	はげ定形	長さ:37.2cm、底面幅:29.2cm、後縁幅:23.6cm、厚さ:2.0cm。凸：縞明ヨリ→クロナデ。凹：布目。圓窓・小口: ケズリ。色調：黒灰色(23Y5/1)	I Ba	S12	B15023
14	SK8 1層	1/2	圓窓幅:2.2cm、厚さ:1.8cm、凸：縞明ヨリ→矢羽根跡→ナデ。凹：布目・系切跡。圓窓・小口→ケズリ。後縁部中 央に直径1.1cmの穴穴。色調：黒灰色(10YR5/2)	I Ca	K8-8	B15023
15	SRA 4層	破片	厚さ:20cm、凸：(縞明ヨリ)→圓窓跡。凹：椎骨痕・布目→布目。圓窓：ケズリ。色調：灰黒色(10YR6/2)	I Ca	R6-32	B15023
16	SRA 3層	1/4	厚さ:16～22cm、凸：柄格子跡→平行跡。凹：布目。圓窓・小口→ケズリ。圓窓に凸凹台に2る筋割 文字「今」。色調：黒灰色(23Y5/1)	I Ca	R4-20	B15023
17	SK9 1層	1/2	厚さ:15～21cm、(19cm)、凸：正格子明ヨリ。凹：布目。圓窓・小口→ケズリ。色調：灰黒色(10YR5/2)	I Ca	K9-16	B15023
18	SK6 4層	破片	厚さ:20cm、凸：矢羽根跡→正格子明ヨリ→ナデ。凹：布目・系切跡。圓窓・小口→ケズリ。色調：灰黒色 (10YR5/2)	I Ca	R6-31	B15023
19	SRA 1層	破片	厚さ:24cm、凸：正格子明ヨリ→平行跡。凹：椎骨痕・布目。圓窓・小口→ケズリ。色調：(5)YR5/3。	I Ca	R7-17	B15023
20	SX2	定形	長さ:37.5cm、底面幅:30.0cm、後縁幅:26.0cm、厚さ:2.0～2.5cm。凸：椎骨痕・布目→ナデ。凹：布目→ナデ。圓窓・ 小口→ケズリ。後窓：色調：赤灰色(25YR4/1)	I D	R4-42	B15024
21	SX2	はげ定形	長さ:37.5cm、底面幅:28.7cm、後縁幅:25.6cm、厚さ:2.2cm。凸：(縞明ヨリ)→ナデ。凹：本州田原・布目。圓 窓・小口→ケズリ。凸：赤燒灰(10YR5/1)。22と同一の布目	II A	R4-48	B15025
22	SRA 1層	はげ定形	長さ:37.5cm、底面幅:28.7cm、後縁幅:25.6cm、厚さ:2.2cm。凸：(縞明ヨリ)→ナデ。凹：布目。小口・圓窓： ケズリ。色調：黒灰色(10YR5/1)。圓窓横行者、21と同一の布目	II A	R4-26	B15025

第22図 平瓦 II A類

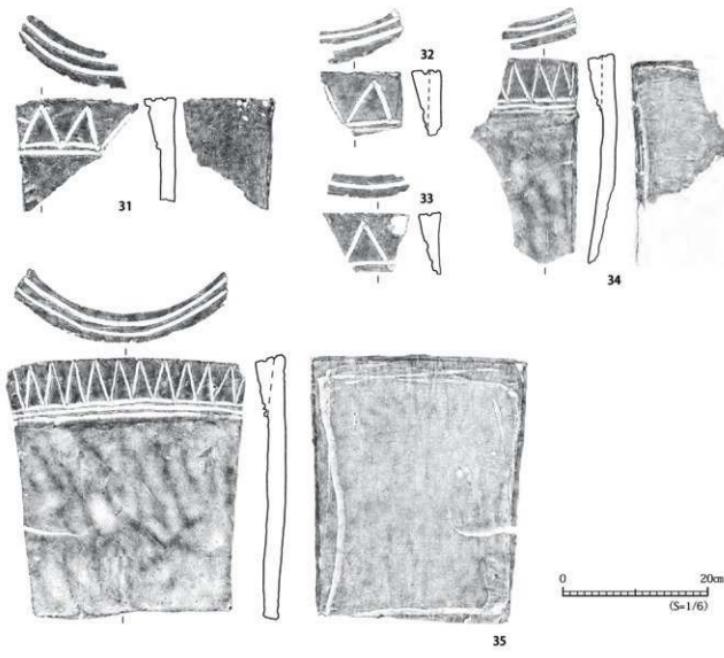


第23図 軒丸瓦

瓦の傾向に対してcタイプが多い。

顎面の文様は鋸歯文とその下の直線文で構成されている。aタイプの文様は類似しており、直線文は1本、鋸歯文の各線はほぼ直線で、下の直線文を含めて一辺約6cmの正三角形状をなす文様が顎面に並んでいる。素材となる平瓦が不明な33も同様で、それらには共通性がある。bタイプでも2点の文様が類似し、直線文は2本で鋸歯文は細かく、一辺5~6cmの二等辺三角形状の文様が顎面に並ぶ。

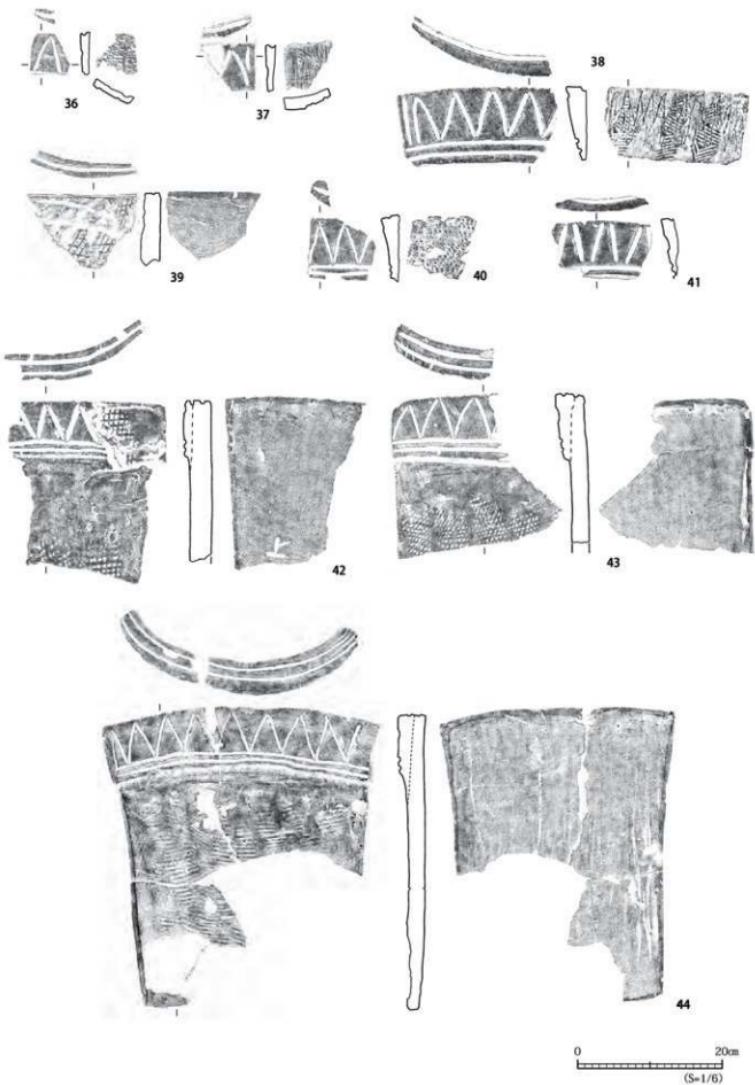
cタイプで直線文の数が判るものは2本である。鋸歯文はやや不均質で、若干湾曲する線がみられる。



第24・25図

No.	遺構・部位	残存	特徴	分類	登録番号	組番号
31	SX2	瓦当1枚	一重弧文。【K4】厚さ5.0cm、瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文1本。【平瓦】厚さ：20cm。△：門ナデ。色調：淡青色(57V6/1)	S1la	R4-39	B15027
32	SX2	破片	一重弧文。【K4】厚さ3.6cm-4cm(3段瓦)、瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文1本。【平瓦】厚さ：1.8cm。△：ナデケズリ(板との接合部)。△：門ナデ。色調：灰褐色(10YR5/2)	S1la	S4	B15027
33	SX2	破片	一重弧文。【K4】側面ナデ→副南宋文・直隸文1本。色調：褐灰色(10YR5/1)	S1l	X3-3	B15027
34	SX2	破片	一重弧文。【K4】厚さ3.6cm-4cm(3段瓦)、瓦当面ケズリ→一重弧文。【平瓦】厚さ：20cm。△：門ナデ。色調：灰褐色(10YR5/2)	S1lb	S5	B15027
35	S86 1層	完形	一重弧文。径3.5cm、広幅29.3cm、厚さ26.4cm。【K4】厚さ3.3cm。瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文1本。【平瓦】厚さ18-25cm(2段)。△：ナデ。口：布目。側面：小口ケズリ。施墨み。色調：黑褐色(2.5YR3/1)	S1lb	R4-22	B15027
36	SX2	破片	一重弧文。【K4】側面ナデ→副南宋文・直隸文。色調：黑褐色(2.5Y5/1)	S1lc	X3-4	B15028
37	S86 5層(北宋灰陶)	瓦当破片	一重弧文。【K4】瓦当面：二重弧文の下の沈線。背面：副南宋文。色調：灰褐色(2.5Y5/1)	S1lc	R6-16	B15028
38	SX2	側面1/2	一重弧文。【K4】瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文2本。色調：灰褐色(2.5Y5/1)	S1lc	R6-38	B15028
39	S86 2次床面	瓦当破片	一重弧文。【K4】瓦当面：二重弧文の沈線。背面：副南宋文の沈線。背面：ナデ→副南宋文。色調：灰褐色(10YR6/2)	S1lc	R6-14	B15028
40	角樋	破片	一重弧文。【K4】瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文2本。色調：灰褐色(10YR6/2)	S1lc	N1	B15028
41	S86 4層(北宋灰陶)	破片	一重弧文。【K4】瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文2本。色調：灰褐色(2.5Y5/1)	S1lc	R6-10	B15028
42	S88 1層	1/4	一重弧文。【K4】厚さ3.6cm。瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文2本。【平瓦】△：格子切口。△：布目。口：切口。側面：ケズリ。凹面に凸筋有りと形容文字上に。色調：灰褐色(2.5Y5/1)	S1lc	K8-5	B15028
43	S89 1層	1/4	一重弧文。【K4】厚さ3.6cm。瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：ナデ→副南宋文・直隸文。【平瓦】厚さ2.4cm。△：格子切口。△：布目。口：切口。側面：小口ケズリ。色調：褐灰色(10YR4/1)	S1lc	K9-9	B15028
44	S88 1層	3/4	一重弧文。径さ3.6cm、広幅32.4cm。瓦当面ケズリ→一重弧文。背面：平行引きナデ→副南宋文・直隸文2本。【平瓦】厚さ2.4cm。△：布目。口：切口。側面：小口ケズリ。色調：灰褐色(2.5Y5/1)	S1lc	K8-6	B15028

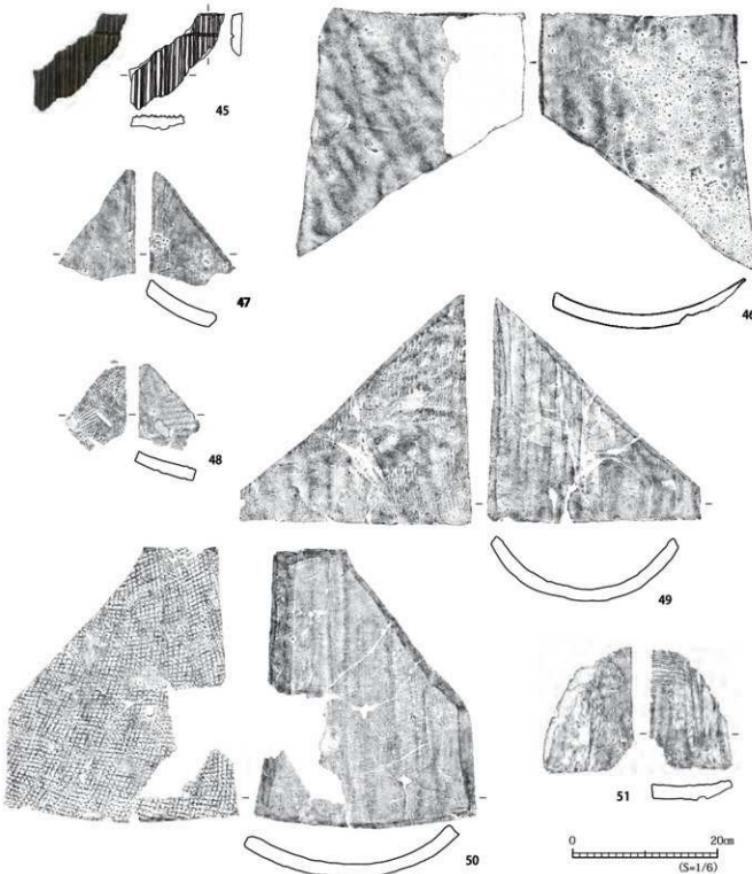
第24図 軒平瓦(1)



第25図 軒平瓦(2)



第26図 軒平瓦(写真)



No	遺構・層位	種類	現存	特　徴	分類	登録番号	器番号
45	S87 1層	鬼板	破片	赤：剥落。黒：質の子供瓦痕。上端：ケズリ。色調：褐灰色。(2.5VS/1)	950AorB	R7-14	B15029
46	最持床面	隅切瓦	ほぼ完形	厚さ：30mm。底周幅：25.8cm。厚さ：18mm。素材：I A 級。凸：内→ナデ。鵞頭・小口：ケズリ。一部剥離。黒灰釉(N3d)	A	R7-4	B15029
47	最持床面	隅切瓦	光端破片	厚さ：20mm。素材：I A 級。凸：布目→ナデ。鵞頭・小口：ケズリ。色調：赤灰色。(2.5YR4/1)	A	R7-3	B15029
48	S87 1層	隅切瓦	光端破片	厚さ：17mm。素材：I C 級。凸：鵞頭→失却剥離。凹：布目→赤切痕(横)。鵞頭：ケズリ。色調：黄灰	A	R7-16	B15029
49	SX2	隅切瓦	完形	厚さ：31.5mm。底周幅：25.8cm。厚さ：17mm。素材：I A 級。凸：繩引き→ナデ。凹：布目→赤切痕→ナデ(税金痕部分中心)。鵞頭・小口：ケズリ。色調：褐灰色(10YR8/1)	A	S13	B15029
50	S88 1層	隅切瓦	ほぼ完形	厚さ：38mm。底周幅：30mm。厚さ：17-20mm(18mm)。素材：I C 級。凸：正格子彫。凹：布目・鵞骨痕。鵞頭・小口：ケズリ。地正丸。色調：褐灰色(10YR8/1)	B	K8-9	B15029
51	SX2	隅切瓦	破片	厚さ：20mm。素材：I A 級。凸：布目・鵞骨痕→ナデ。凹：繩引き→ハケ目(凹面無邊付近)。焼成中に剥離。色調：黄灰(2.5Y4/1)	C	S14	B15029

第27図 鬼板・隅切瓦

また、線が閉じず「ハ」字状をなすものもある(41)。使われた平瓦も二次叩き目に繩叩き(36)、矢羽根叩き(37・38)、格子叩き(39・40・42・43)、平行叩き(44)のものがあり、格子叩きでは格子目の状況も様々である。なお、44は昨年報告の資料(関連2010第19図26)と接合したものである(註4)。

#### ⑤隅切瓦(第21・27図)

11点出土している。平瓦の広端部、または狭端部を残さず切落として先端を鋭角に尖らすものが8点、狭端部片側を三角形状に切落としたものが2点、広端部隅を僅かに切ったものが1点ある。多賀城跡の隅切瓦には分類がないため、ここでは先端が尖る形態をA類、端部片側を三角形状に切る形態をB類、端部隅を切る形態をC類とする。

A類は平瓦Ⅰ A類を素材としたものが主体だが(第27図46・47・49)、ナデ調整がやや難なものがある(49)。他には矢羽根叩きのⅠ C類を素材とするものがある(48)。B類では格子叩きのⅠ C類(50)、第21図17)、C類はⅠ A類が使われている(第27図51)。

#### ⑥鬼板(第27図)

賓の子の圧痕を持つ背面の破片が1点出土した(第27図1)。表は剥落している。残存状況と賓の子の方向などから方形の重弁蓮花文鬼板950A、または950Bの上端部の破片と推測される。

#### ⑦文字瓦(第28・29図)

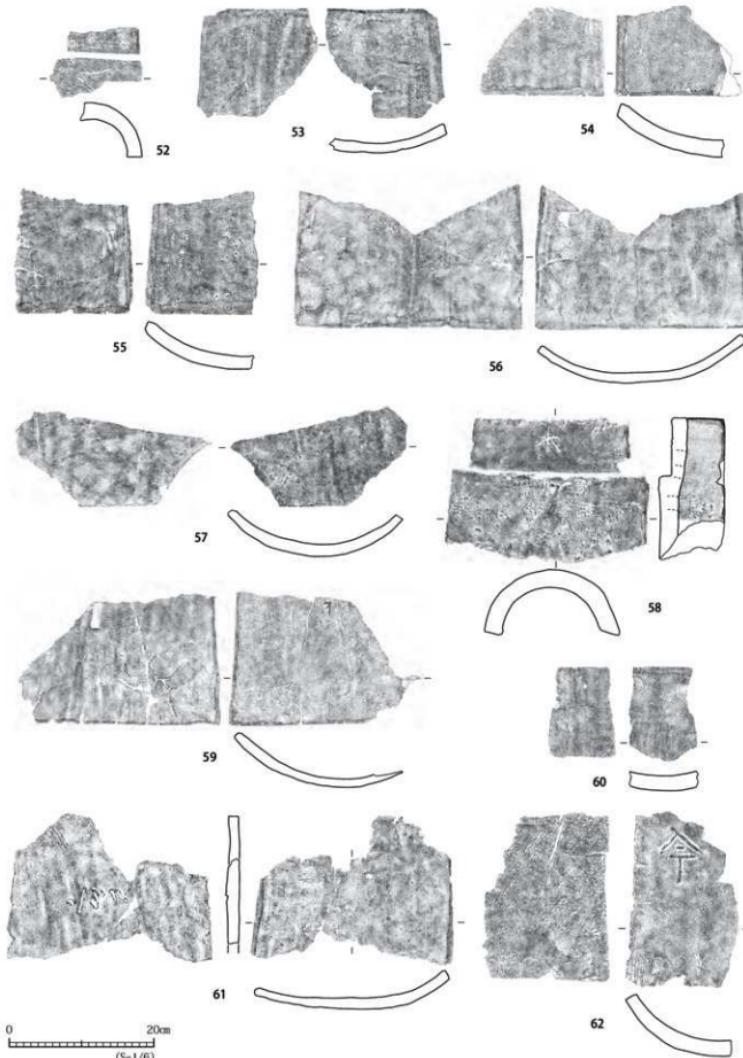
20点出土しており、昨年報告した1点を加えて21点となる(表2)。「上」「木」「下」「申」「造」「□(上?)」「今」「相」などの文字があり、「上」が11点と多い。また、文字にはヘラ状の工具による刻書、凸型台への記銘で生じた陽出・陰刻文字、範への彫込みによる陽出文字があり、刻書が多い。なお、刻書のある平瓦では丁寧なナデ調整が認められる。

「上」のうち9点は平瓦Ⅰ A類凸面への刻書で、他に丸瓦Ⅱ B類aタイプ玉縁中央への刻書(第28・29図52)と二重弧文平瓦511cタイプ凹面に凸型台で陰刻されたものがある(第25・29図42)。平瓦の刻書は狭端部を上にして広端部右側(第28・29図54~57・63)、または狭端部左隅に記されている(53)。2画面に水平(53・56)、左上がり(54・63)、右下がり(52・57)などの書き方がみられ、個性的な特徴が捉えられる。

「木」は丸瓦Ⅱ B類aタイプの玉縁中央に刻書されたものが1点ある(58)。

文字	記入方法	瓦の種別	位 置	出土場所	図・番号	直径	編番号
上	斜書	丸瓦Ⅰ Ba	凸 丸瓦中央	S86 5層(底層)	28・29・52	86-17	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ Ba	凸 丸瓦中央右	S86 5層(底層)	28・29・54	86-18	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	S86 4層	28・29	86-29	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SR7 1層	28-55	87-13	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SX2	28-29-56	X2-7	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SX2		X2-8	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SX2	28-29-57	X2-9	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SD6	28-29-53	D6-8	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SD6	28-29-53	D6-9	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SD6	28-29-53	D6-10	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SD6	28-29-53	K5-11	B15030
上	斜書	丸瓦Ⅰ A	凸 丸瓦中央右	SD6	28-29-53	K5-12	B15030
上	凸型台(陰刻)	斜瓦511c	凹 左側面中央	SK8 1層	15-42	K4-5	B15028
上	斜書	丸瓦Ⅱ Ba	凸 丸瓦中央	SD6	28-29-58	D6-6	B15030
木	斜書	丸瓦Ⅱ Ba	凸 丸瓦中央	SD6	28-29-59	D6-7	B15030
下 / 下(左文字)	斜書・凸型台(陰刻)	平瓦Ⅰ a	凸・凹 広端中央右・中央	SD6 5層(底層)	28-29-59	B6-18	B15030
申	斜書	平瓦Ⅱ A	凸 右側面中央	SX2	22-29-21	R4-48	B15025
造	斜書	平瓦Ⅰ A	凸 広端中央	SX2	28-29-61	S-10	B15030
□(上?)	斜書	平瓦Ⅰ A	凸 広端中央	SX2	28-29-60	K9-12	B15030
今	斜書	平瓦Ⅰ A	凸 広端中央	SX2	28-29-62	L-1	B15030
(相)(左文字)	凸型台(陰刻)	平瓦Ⅰ Ca	凹 中央左	SR4 3層	21-29-16	R4-20	B15023
相	斜書	新丸瓦122	瓦内	SR4 4層(底層)	23-25	R4-3	B15026
相	斜書	新丸瓦122	瓦内	SR4 4層(底層)	23-26	R4-4	B15026
相	斜書	新丸瓦122	瓦内	SK7 底面直上	23-24	K7-1	B15026

表2 文字瓦一覧



第28図 文字瓦各種



第29図 文字瓦(拡大)

「下」は平瓦ⅠA類の凹凸両面に記されている(59)。凹面は凸型台による陽出左文字で瓦の中央、凸面は刻書で広端部右側にある。記入方法と位置・左右は異なるが、書体や大きさには共通性がある。

「申」は平瓦ⅡA類凸面の右側端中央に刻書されたものが1点ある(第22・29図21)。

「造」は1点で、平瓦ⅠA類の凸面に刻書されている(第28・29図61)。右側端を上、左側端を下にして瓦の中央から書かれ、文字の下には点が付されている。「造」の書体は崩れているが、多賀城跡の文字瓦「玉造」の「造」(本文編1982、年報1983・1998)と同じ書き方である。

「□(上?)」は平瓦ⅠA類凸面の狭端部に刻書されたものが1点ある(60)。多賀城廃寺跡に類例がみられるものである(年報1975)。

「今」は凸型台による陽出文字と陰刻文字が各1点ある。陽出「今」は平瓦凹面左側端中央にみられる(62)。平瓦はⅠA類bタイプで凸面のナデ調整が粗い。陰刻「今」は平瓦凹面中央左側にある(第21・29図16)。4画目が1画目の終筆より上に位置する特徴や文字のバランスからみて、多賀城跡の陰刻「今」の分類のうち「今」Dにあたる。平瓦は縄叩きから平行叩きのⅠC類である。

「相」は范による陽出文字で、前述の重弁蓮花文軒丸瓦122にあるものである(第23図24~26)。

## b. 土器

瓦に比べると少ない。須恵器と土師器があり、大部分が須恵器である。

### ①須恵器

坏、高台坏、高台塊、坏蓋、壺蓋、長頸瓶、壺、甕がある。例示しつつ述べる(第30図)。

【坏】口径12~17cm、底径8~12cm、器高3~4cmのものが主体で、器形からⅠ類、ⅡA~C類に分けられる。なお、この分類はC地点の須恵器坏の分類(色麻町1993)と大枠で通用する。

Ⅰ類: 丸底で、体部から口縁部が外傾するものである。体部の外傾は緩やかで、底部は全体的に手持・回転ケズリ調整されるが、切離し技法がわかるものに回転糸切りがある。

ⅡA類: 平底で、体部・口縁部が外反するものである。底部は全体的に手持・回転ケズリ調整される。切離し技法がわかるものにはヘラ切りがある。

ⅡB類: 平底で、体部が内湾気味に立つものである。そのまま緩やかに口縁部に至るものと角度を急にして直線的に外傾するものがある。底部は上げ底風のものがみられる。全体的に手持ケズリ調整されるが、切離し技法が判明するものには回転糸切りがある。

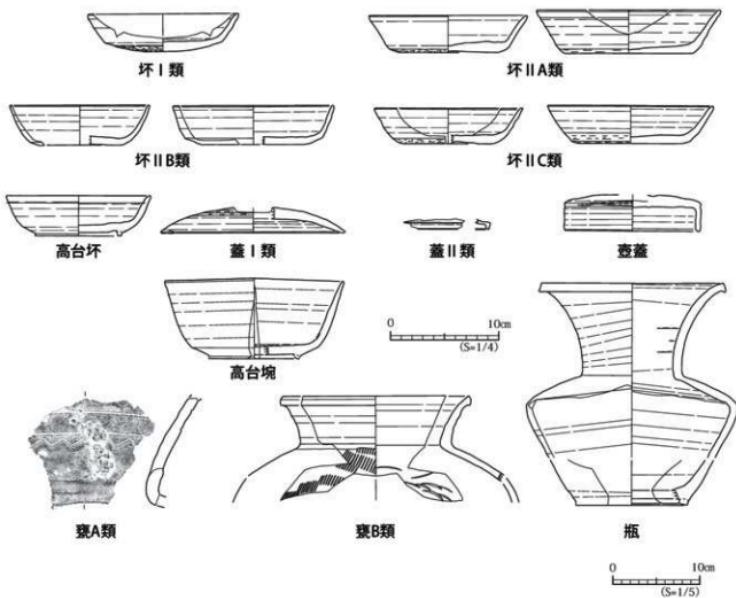
ⅡC類: 平底で体部・口縁部が直線的に外傾するものである。底部は静止糸切りによる切離し後に周縁と体部下端を回転ケズリ調整したものが主体をしめる。

【高台坏】坏に低い高台のつくものである。体部が内湾気味に立ち上がり、外傾して口縁部がやや外反気味の器形をとる。

【高台塊】口径16cm前後、底径9cm前後、器高7cm前後の底の深い塊に低い高台がつくものである。体部は直線的に外傾してそのまま口縁部に至る。

【坏 蓋】口径17~22cmの坏類の蓋で、いずれも破片資料である。つまみが残るものはない。口縁端部が丸くおさまるⅠ類と短く下方に折れるⅡ類がある。

【壺 蓋】口径12cm前後のもので、短頸壺の蓋とみられる。つまみが残存するものはない。口縁部が



第30図 須恵器分類図

比較的平らな天井部から真下に折れるものと斜め下に折れ曲がるものがある。

【瓶】 口径約16cm、器高約19cmの広口の瓶である。

【壺】 破片資料のみで器形がわかるものはない。

【甕】 いずれも破片資料である。口径は不明だが大型品(A類)と口径20cm前後の中型品(B類)がある。A類の頸部には波状文のあるものがある。

【硯】 脚のない形態の円面硯で、直径約13cmの小型品がある。

## ②土師器

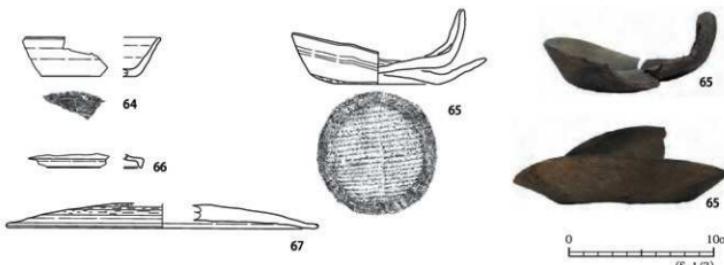
鉢が1点あるのみである。摩滅が著しく、図化・復元はできなかった(図版6中左)。成形にロクロを使用した口径30.0cm前後、底径14.5cm、高さ19.5cmほどの平底の鉢で、口縁部と体部の境には段が形成されている。

### (2) 各遺構の出土遺物

#### a. 窯跡の遺物

##### 【SR4窯跡出土遺物】

燃焼部の一部を精査し、瓦147点(64頁付表)、須恵器10点が出土した。全体的に瓦が多い。窯跡操業時に伴う遺物は瓦16点、須恵器4点で、他は廃絶後の埋土・堆積土からの出土である。



第31図 SR4窯跡出土須恵器

（操業時の遺物）2次床面、4次床面とそれに伴う4層（炭層）から出土している。

2次床面の遺物には須恵器壺が2点あり、1点は波状文のあるA類の頸部小片である。

4次床面に伴う遺物は4層を含めて軒丸瓦7点、軒平瓦1点、丸瓦6点、平瓦1点、須恵器壺・壺各1点がある。軒丸瓦が目立ち、型番が判るものに重弁蓮花文122が2点ある（第23図25・26）。範による陽出文字のある122Bで、25に左文字「相」、26に「相」の文字があり、前述したようにこれらには同一個体の可能性がある。軒平瓦は二重弧文511cタイプの破片、丸瓦はII B類a・bタイプが各1点、平瓦はI C類で凸面の二次叩きが繩叩きのものである。須恵器壺はII A類（第31図64）、壺は小片である。

（廃絶後の遺物）廃絶後の埋土・堆積土は下から天井崩落土の3層、SR5窯跡の掘削と機能時を中心とした人為的な埋土の2層、自然堆積層の1層があり、それぞれ遺物が出土している。なお、廃絶後の遺物の記述では数量は省略する。

3層の遺物には丸瓦II B類aタイプ、平瓦I C類がある。平瓦の凸面は繩叩きから平行叩きのもので、凹面には凸型台による陰刻文字「今」がある（第21図16）。

2層には軒丸瓦、丸・平瓦、須恵器高台杯があり、軒丸瓦に重弁蓮花文、丸瓦にII B類aタイプがある。平瓦はI A・I B・I C類がある。I A類が主体をしめ、aタイプのものがある。なお、以上の瓦のうち図示したものは重弁蓮花文軒丸瓦（第23図29）と平瓦I A類（第18図4）がある。

1層には軒平瓦、丸・平瓦、須恵器壺・蓋・壺があり、軒平瓦に二重弧文511bタイプ、丸瓦にII B類aタイプがある。平瓦はI A・I B・I C・II A類があり、主体はI A類がしめるが、II A類も比較的目立つ。I A類にはa・bタイプ、I B類にはaタイプがある。以上のうち、前節で図示したものに軒平瓦（第24図35）、平瓦I B類（第20図11・12）、平瓦II A類（第22図22）がある。須恵器は壺にII C類（第31図65）、蓋はI類（67）とII類（66）がある。65の壺は焼歪みが大きい。

### **[SR5窯跡出土遺物]**

南半を主体に精査し、瓦143点、須恵器104点が出土した。須恵器が比較的多く、操業時に伴う遺物では瓦が31点、須恵器が48点で瓦を上回る。

〈操業時の遺物〉1次床面、2次床面とそれに伴う4層（炭層）、3次床面とそれに伴う3層（炭層）でそれぞれ出土している。

1次床面の遺物には丸瓦1点、須恵器坏2点があるが、小片である。

2次床面に伴う遺物は4層を含めて丸瓦5点、平瓦8点、種別不明の瓦2点、須恵器の坏4点、壺2点がある。丸瓦にはII B類aタイプがあり、平瓦は全てI A類で、他はいずれも小片である。

3次床面では3層を含めて丸瓦3点、平瓦8点、種別不明の瓦4点、須恵器の坏24点、高台坏6点、壺蓋と壺各5点が出土している。丸瓦にはII B類がある。平瓦はI A類5点、I B類2点、種別不明1点で主体はI A類がしめる。I A類にはaタイプのものがある。

須恵器は坏にII A・II B・II C類がある（第32図68～72）。68・72は平瓦I B類を使用した焼台直上で出土している。高台坏は体部が内湾気味に立ち上がり、外傾して口縁端部がやや外反する坏に低い高台がつくものである（73）。蓋には口縁端部が丸くおさまるII類がある（74・76）。

〈廃絶後の遺物〉天井崩落土の2層と自然堆積層の1層から各々出土している。

2層の遺物には丸・平瓦、須恵器坏・高台杯・壺・壺があり、丸瓦にはII B類がある。平瓦はI A・I B類があり、I A類が主体をしめる。I A類にはaタイプがある。須恵器は坏にII B類があり（75）、塊は口径16cm前後、器高7cm前後の底の深い塊に高台がつくものである（80）。

1層には丸・平瓦、須恵器坏・壺蓋・壺があり、丸瓦にはII B類aタイプがある。平瓦はI A・I B・I C・II A類がある。I A類が主体でa・cタイプのものがあり、cタイプは前節で図示したものである（第19図10）。須恵器は坏にI・II B・II C類（第32図77～79）、蓋にI類がある。

### **[SR6窯跡出土遺物]**

北半を主体に精査し、瓦742点、須恵器87点が出土している。全体的に瓦が多い。操業時に伴う遺物は瓦112点、須恵器3点で、他は廃絶後の堆積土からの出土である。

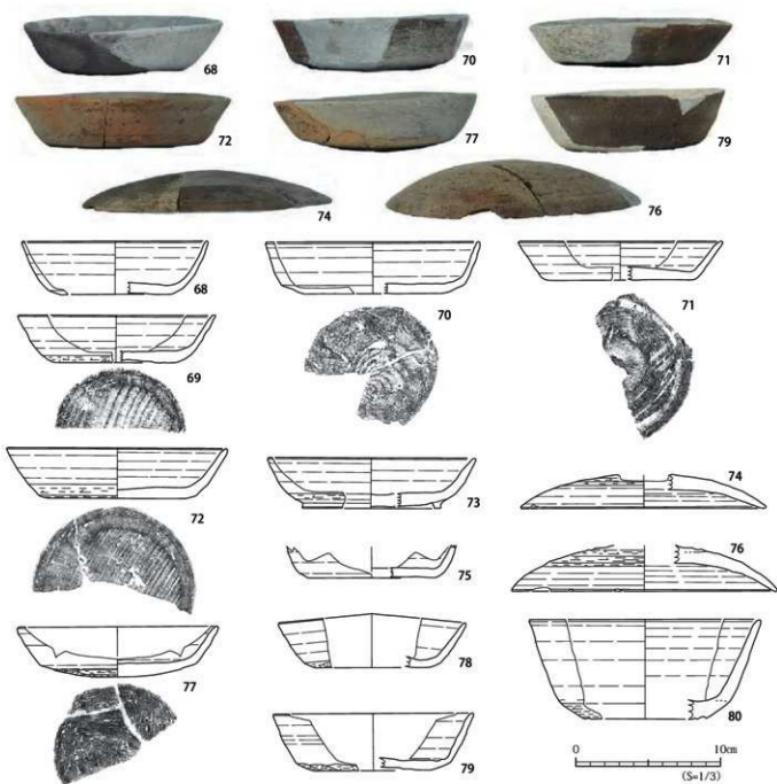
〈操業時の遺物〉2～5次床面、5次床面・側壁の構築に伴う貼土の6層、5次床面に伴う5層（炭層）からそれぞれ遺物が出土している。

2次床面の遺物には二重弧文軒平瓦511cタイプ（第25図39）、平瓦I A類、須恵器坏が各1点、3次床面には平瓦I A類が2点ある。3次床面の平瓦I A類にはaタイプがある。

4次床面には丸瓦5点、平瓦22点があり、丸瓦にはII B類aタイプがある。平瓦はI A類8点、I C類とII A類が各1点、不明12点で、判明するものではI A類が主体をしめる。

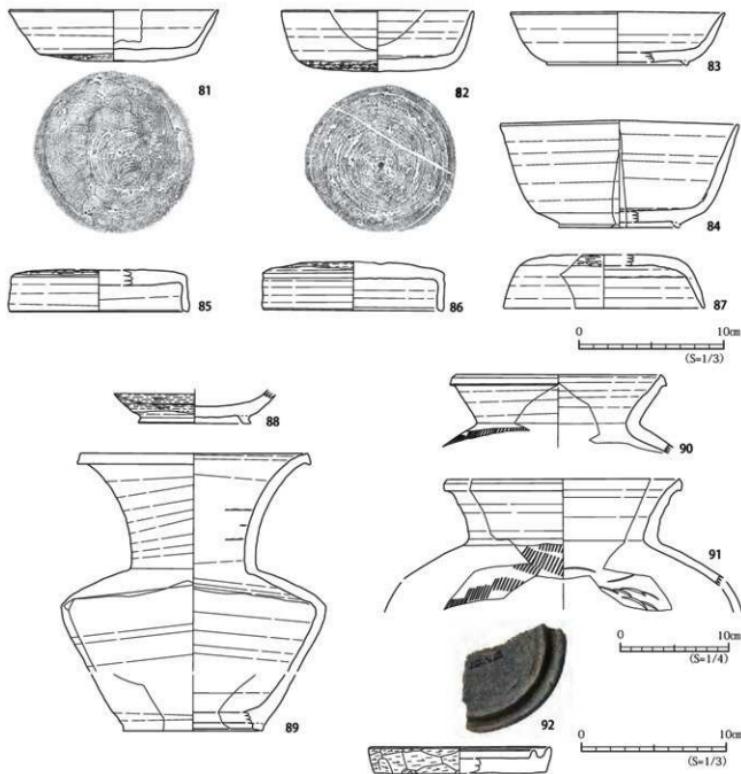
5次床面・側壁の構築に伴う6層には丸瓦2点、平瓦4点がある。丸瓦はa・bタイプ各1点で、bタイプは燃焼部側壁の補強に用いられていたものである（第17図2、図版4下左）。平瓦はI A類2点、I C類と不明が各1点である。

5次床面は5層を含めて軒平瓦1点、丸瓦21点、平瓦80点、隅切瓦1点、須恵器高台塊・壺各1点がある。軒平瓦は二重弧文511cタイプである（第25図37）。丸瓦にはII B類a・bタイプがあり、aタイプ玉



No.	層位	種類	特徴	分類	登錄番号	図版号
68	3次床面	环	1/6 口径：(12.6) cm. 底径：(7.6) cm. 器高：3.7cm. 底：切妻不明→手持ケズリ。外：ロクロナデ。色調：に赤い 黄褐色。(107B/5-4)	II B	RS-12	B1560B
69	3層(3次床面裏層)	环	1/3 口径：(13.6) cm. 底径：(8.4) cm. 器高：3.3cm. 底：切妻系切→周縁部凹削ケズリ。外：ロクロナデ→下端凹削ケズリ。 内：ロクロナデ。色調：灰赤(2SV5/1)	II C	RS-13	B1560B
70	3層(3次床面裏層)	环	1/3 口径：(14.8) cm. 底径：(8.8) cm. 器高：3.6cm. 底：切妻系切→手持ケズリ。外：ロクロナデ。色調：灰赤(2SV5/1)	II B	RS-14	B1560B
71	3層(3次床面裏層)	环	1/2 口径：(10.0) cm. 底径：(6.0) cm. 器高：3.7cm. 底：ハラ切引→手持ケズリ。外：ロクロナデ。色調：黄灰 色(2SV5/1)	II A	RS-16	B1560B
72	3次床面	环	1/2 口径：(14.4) cm. 底径：(9.6) cm. 器高：3.5cm. 底：切妻系切→周縁部凹削ケズリ。外：ロクロナデ→下端凹 削ケズリ。内：ロクロナデ。色調：灰赤(2SV5/1)	II C	RS-33	B1560B
73	3層(3次床面裏層)	高台环	1/6 口径：(14.6) cm. 底径：(9.6) cm. 器高：3.5cm. 底：切妻系切→周縁部凹削ケズリ。外：ロクロナデ。色調：灰 色(2SV5/1)	I	RS-17	B1560B
74	3層(3次床面裏層)	重	1/3 口径：(17.0) cm. 底高：(23.3) cm. 外：ロクロナデ→上半折軸ケズリ→「つまみ點付」→上手ロクロナデ。内：ロ クロナデ。色調：灰赤色(2SV5/2)	I	RS-19	B1560B
75	2層	环	1/3 底高：(8.8) cm. 底：切妻系切→手持ケズリ。外：ロクロナデ。色調：灰赤色(2SV5/1)	II B	RS-20	B1560B
76	3層(3次床面裏層)	重	1/2 口径：(18.1) cm. 底高：(33.7) cm. 外：ロクロナデ→上半折軸ケズリ→「つまみ點付」→上部ロクロナデ。内：ロ クロナデ。色調：灰黄褐色(107B/6-2)	I	RS-18	B1560B
77	1層	环	1/3 口径：(14.0) cm. 底径：(9.8) cm. 器高：3.3~3.7cm. (3.6cm). 底：切妻不明→手持ケズリ。外：ロクロナデ。色調：灰 青(2SV5/1)	I	RS-29	B1560B
78	1層	环	1/3 口径：(14.0) cm. 底径：(8.0) cm. 器高：4.0cm. 底：切妻不明→手持ケズリ。外：ロクロナデ→下端手持ケズリ。	II C	RS-31	B1560B
79	1層	环	1/3 口径：(16.0) cm. 底径：(8.6) cm. 外：ロクロナデ (下端：ロクロナデ→凹削ケズリ)。内：ロクロナデ。色調：褐 灰(107B/4-1)	II B	RS-30	B1560B
80	2層	高台环	1/6 口径：(16.0) cm. 底径：(8.6) cm. 外：ロクロナデ (下端：ロクロナデ→凹削ケズリ)。内：ロクロナデ。色調：褐 灰(107B/4-1)	I	RS-21	B1560B

第32図 SR5窯跡出土須恵器



No.	置位	種類	現存	特徴	分類	定番番号	範囲番号
81	SR6 4層	須志器 环	11枚 完形	口径: 14.4cm. 底径: 10.6cm. 器高: 3.5cm. 成: 制軸系切→手持ケズリ。外: 内: ロクロナヂ。色調: にぶい褐色。(7.5YR5/4)	I	86-36	B15002
82	SR6 4層	环	2/3	口径: (13.2)cm. 底径: (11.0)cm. 器高: 4.2cm. 成: 制軸系切→手持ケズリ。外: 内: ロクロナヂ。色調: 黄褐色。(7.5YR7/1)	II B	86-34	B15002
83	SR6 4層	高台环	1/5	口径: (14.4)cm. 底径: (9.7)cm. 器高: 3.7cm. 外: 英台貼付→ロクロナヂ。内: ロクロナヂ。色調: 黄褐色。(7.5YR5/4)	86-37	B15002	
84	SR6 5層	高台環	1/4	口径: (16.0)cm. 底径: (8.1)cm. 器高: 7.2cm. 外: 英台貼付ケズリ→高台貼付→ロクロナヂ。内: ロクロナヂ。色調: (にぶい)褐色。(7.5YR5/4)	86-25	B15002	
85	SR6 4層	微量	1/3	口径: (12.4)cm. 外: 制軸ケズリ。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y5/1)	86-50	B15002	
86	SR6 4層	微量	4/5	口径: (12.0)cm. 器高: (2.5み付底部)cm. : (3.4)cm. 外: 制軸ケズリ→つまみ貼付→体部→つまみ付底ロクロナヂ。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y5/1)	86-41	B15002	
87	SR6 4層	微量	破片	口径: (14.0)cm. 外: 制軸ケズリ。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y4/1)	86-51	B15002	
88	SR6 4層	微量	破片	底径: (16.0)cm. 外: 手持ケズリ→高台貼付→英台付底ロクロナヂ。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y4/1)	86-40	B15002	
89	SR6 4層	板	破片	口径: (23.0)cm. 器高: 11.8cm. 底径: 24.6cm. 器高: 25.6cm. 外: ロクロナヂ(別の一部ケズリ)。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y5/1)	86-39	B15002	
90	SR6 3層	塊	破片	口径: 18.9cm. 外: 制軸平行切→底部→肩上部ロクロナヂ。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y5/1)	B	86-45	B15002
91	SR6 4層	塊	破片	口径: (21.4)cm. 深度: (最深部): (17.5)cm. 外: 制軸平行切→底部ロクロナヂ。内: 体部ササエ。底部口: クロナヂ。色調: 黄灰褐色。(2.5Y5/1)	B	86-38	B15002
92	SR7 1層	円錐瓶	1/3	口径: (12.8)cm. 底径: (12.0)cm. 器高: 19.9cm. 成: 制軸不規→手持ケズリ。外: ロクロナヂ→手持ケズリ。内: ロクロナヂ。色調: 黄灰褐色。(7.5YR4/1)	87-15	B15002	

第33図 SR6・7窯跡出土須恵器



第34図 SR6窯跡出土須恵器(写真)

縁には「上」の刻書のあるもの(第28・29図52)、bタイプには焼台として使われたものがある(図版4上右)。平瓦はIA類47点、IB・D類各1点、IC類2点、IIA類11点、種別不明18点で、種類が多い。IA類が主体だが、比較的IIA類も目立つ。IA類にはa・cタイプがある。また、IA類凸面には「上」の刻書(第28・29図54)のあるもの、IA類aタイプとIB類には焼台に使われたものがある。隅切瓦はA類で、平瓦IA類を素材とするものである。須恵器高台塊は口径16.4cm、器高8.1cmの塊に低い高台がつくもの(第33図84)、壺は小片である。

〈廃絶後の遺物〉堆積土は天井崩落土の4層と自然堆積層の1~3層からなり、2層以外で遺物が出土している。

4層の遺物には丸・平瓦、隅切瓦、須恵器壺・高台杯・壺蓋・瓶・壺蓋・壺があり、丸瓦にはIIB類がある。平瓦はIA類cタイプとID類以外の各種がある。主体はIA類だが、IIA類も比較的目立つ。隅切瓦はA類で、平瓦IA類を素材としたものである。

須恵器は破片資料が主体だが、数量(45点)・種類ともやや多く、壺にはI・IIB類がある(第33図81・82)。高台壺は低い高台の付くもの(83)、壺蓋はI・II類、壺蓋には口縁部が比較的平らな天井部から真下に折れるものと斜め下に折れ曲がるものがある(85~87)。瓶は口径約16cm、器高約19cmの広口瓶で(89)、壺は中型品のB類がある(91)。

1・3層の遺物については、瓦は4層と概ね同じ内容で、新しい層ほど数が多い。須恵器は減少し、3層で壺・壺蓋・壺・壺、1層で壺・壺蓋・壺が少量あるのみである。全体がわかるものはないが、壺は平底のII類、壺蓋はI類、壺は中型品のB類がある(90)。

### **[SR7窯跡出土遺物]**

焼成部の一部を最終床面まで精査し、瓦58点、須恵器が1点出土した。大部分が瓦で、操業時に伴うものは瓦26点、須恵器1点である。

〈操業時の遺物〉最終床面の遺物は丸瓦7点、平瓦15点、不明瓦2点、隅切瓦2点、須恵器壺1点で、丸瓦にはII B類がある。平瓦で種別が判るのはIA類7点、II A類1点でIA類が主体である。隅切瓦は先端の尖るA類で平瓦IA類を素材とするもの(第27図46・47)、須恵器壺は小片である。

〈廃絶後の遺物〉堆積土は天井崩落土の2層と、その後の漸次的な崩落を交えた自然堆積層の1層からなる。遺物は1層で出土しており、軒平瓦、丸・平瓦、隅切瓦、鬼板、硯がある。軒平瓦は二重弧文511だが、タイプは不明である。平瓦はIA・IB・IC・II A類がある。主体はIA類で、凸面には刻書「上」のあるものがある(第28図55)。隅切瓦はA類で平瓦IC類を素材とするもの(第27図48)、鬼板は方形の重弁蓮花文950A、または950Bの上端背面の破片(45)、硯は脚のない形態の小型の円面硯である(第33図92)。

### **b. その他の遺構、堆積土などの遺物**

#### **[SX2瓦集中遺構出土遺物]**

堆積土から多量の遺物が出土しており、瓦539点、須恵器40点がある。瓦は概ね各種が揃うが、軒丸瓦で型番の判るものはない。軒平瓦は二重弧文511a～cタイプ、丸・平瓦は細分まで含めて大部分があり、平瓦の主体はIA類である。凸面に「上」「申」「造」といった刻書のあるものもある。隅切瓦はA・C類があり、素材が判るものは全て平瓦IA類aタイプである。

以上のうち前節で図示したものに重弁蓮花文軒丸瓦(第23図28)、二重弧文軒平瓦511(第24図31～34、第25図36・38)、丸瓦II B類aタイプ(第17図1)、平瓦IA類a～cタイプ(第18図5・7、第19図8)、IB類aタイプ(第20図13)、ID類(第21図20)、II A類(第22図21)、隅切瓦(第27図49・51)、文字瓦(第28・29図21・56・57・61)がある。

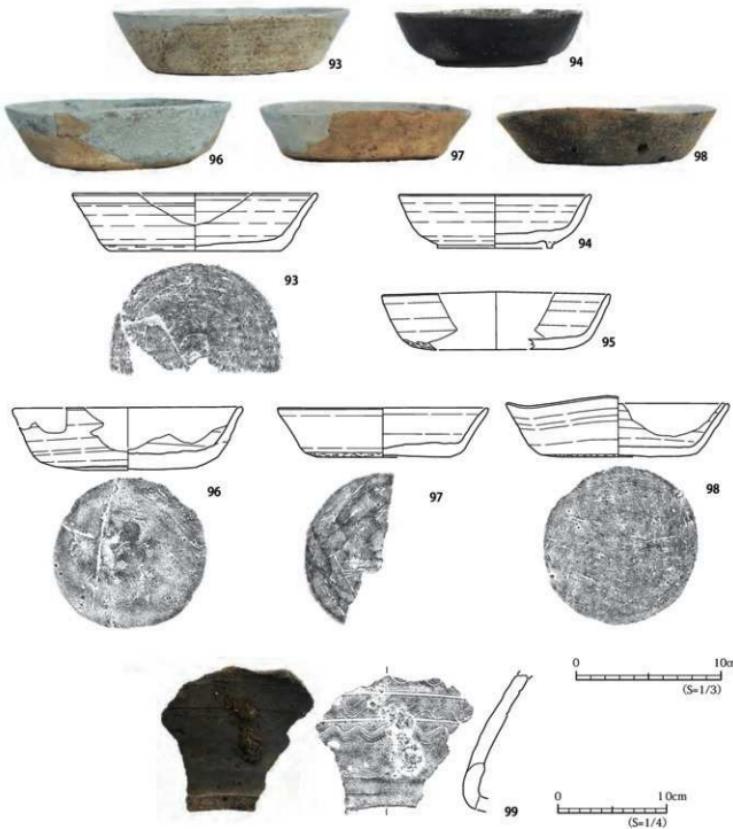
須恵器は壺・高台壺・蓋・壺がある。小片が多く、器形が判るものは壺II A類と高台壺の各1点のみである(第35図93・94)。蓋はI類の小片、壺は波状文のあるA類の頸部資料がある(99)。

#### **[SD6溝出土遺物]**

堆積土から軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、須恵器壺・壺が出土した。瓦を主体に比較的数量が多い。軒丸瓦には重弁蓮花文で、範による陽出文字のない122Aがある(第23図23)。軒平瓦は二重弧文511、丸瓦にはII B類aタイプで玉縁に「木」の刻書のあるものがある(第28・29図58)。平瓦は種類が多く、IA・IB・IC・ID・II A類がある。IA類が主体でa～cの各タイプがみられる。また、凸面に「上」の刻書(53)、凹面に凸型台による陽出文字「今」のあるものがある(62)。須恵器壺・壺はいずれも小片である。

#### **[SK6土壤出土遺物]**

堆積土2層から丸・平瓦、2層上面で土師器鉢1点が出土した。数は少ないが、丸瓦にはII B類aタイプがある。平瓦で種別が判るのはIA類のみでa・cタイプがある。土師器鉢は底を下にした状態で出土した(図版6中左)。成形にロクロを用い、口縁部と体部の境に段が形成されたものである。



No.	層位	種類	残存	特徴	分類	登錄番号	施番号
93	SX2	环	1/2	口径：(12.0)cm、底径：(11.0)cm、器高：(4.0)cm、底：ハラ切り→斜軸ケズリ。外：ロクロナデ→下端斜軸ケズリ。 内：ロクロナデ。色調：青灰(225V-1)	Ⅱ A	X2-18	B15002
94	SX2	高台环	1/2	口径：(13.0)cm、底径：(8.0)cm、器高：(3.0)cm、底：(ハラ切り)→斜軸ケズリ→高台輪付→周縁部ロクロナデ、外：ロクロナデ。下端はロクロナデ→斜軸ケズリ→高台輪付→ロクロナデ。色調：暗灰(223V-0)		X2-19	B15002
95	堆積層	环	1/4	口径：(15.0)cm、底径：(9.0)cm、器高：(4.0)cm、底：切離不等→手持ケズリ。外：ロクロナデ→下端手持ケズリ。 内：ロクロナデ。色調：黄灰(235V-6/2)	Ⅱ B	N3	B15002
96	SK9 2層	环	2/3	口径：(15.0)cm、底径：(9.0)cm、器高：(4.0)cm、底：ハラ切り→ナデ。外、内：ロクロナデ。色調：青い黄色(10YR6/3)	Ⅱ B	K8-1	B15002
97	SK9 2層	环	1/3	口径：(14.0)cm、底径：(10.0)cm、器高：(3.4)cm、底：切離不明→手持ケズリ。外、内：ロクロナデ。色調：青灰(225V-4)	Ⅱ A	K9-7	B15002
98	SK9 2層	环	1/4(F欠損)	口径：(15.0)cm、底径：(10.0)cm、器高：(3.7)cm、底：切離不明→手持ケズリ。外、内：ロクロナデ。燒正み。色調：青灰(225V-4)	Ⅱ C	K9-17	B15002
99	SX2	类	破片	外：ロクロナデ→派状文・沈縞文。内：ロクロナデ。色調：青灰色(10YR4/1)	A	S16	B15002

第35図 その他の遺構・堆積層出土の須恵器

#### **[SK7土壤出土遺物]**

底面直上で軒丸瓦、丸・平瓦が出土している。数量は僅かだが、軒丸瓦は重弁蓮花纹で、范による陽出文字「相」のある122Bである（第23図24）。丸瓦にはⅡ B類bタイプがある。また、平瓦で種別が判るものは全て I A類aタイプである。

#### **[SK8土壤出土遺物]**

堆積土から軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、隅切瓦、須恵器坏が出土しており、軒丸瓦に重弁蓮花纹133がある（第23図27）。丸瓦との接合部が若干残るもので、接合効果を高めるヘラキザミはみられない。軒平瓦は二重弧文511cタイプで、平瓦の二次叩きが格子叩き（第25図42）、平行叩き（44）のものがある。42の凹面には凸型台による陰刻文字「上」がある。丸瓦にはⅡ B類aタイプがある。平瓦はI A・I C・Ⅱ A類があり、主体はI A類がしめる。I A類にはaタイプ、I C類には釘穴のあるものがある（第21図14）。隅切瓦は狭端部片側を切り落したB類で、二次叩きが格子叩きの平瓦I C類を素材としている（第27図50）。須恵器は坏Ⅱ B類が1点出土している。丸底風の平底の坏で、底部はヘラ切り後にナデ調整されている（第35図96）。

#### **[SK9土壤出土遺物]**

堆積土から軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、隅切瓦、須恵器坏・甕が出土した。数量は多いが、軒丸瓦で型番の判るものはない。軒平瓦は二重弧文511cタイプで、平瓦の二次叩きが格子叩きのものがある（第25図43）。丸・平瓦は各種があり、平瓦はI A類が主体をしめる。凸面に「上」「□（上？）」の刻書のあるものがある（第28・29図60）。隅切瓦はB類で、二次叩きが格子叩きの平瓦I C類を用いたものである（第21図17）。須恵器坏にはⅡ A・Ⅱ C類がある（第35図97・98）。ともに底部は手持ケズリ調整されており、切離し技法は不明である。甕はいずれも小片である。

#### **[堆積土・表土の遺物]**

上記の遺構以外に堆積層、表土にも丸・平瓦をはじめとする瓦、坏を主体とする須恵器がみられた。そのうち調査では軒瓦などの注意される資料、残存が良好な資料を採集しており、図示したものには堆積層出土の二重弧文軒平瓦511cタイプ（第25図40）、須恵器坏Ⅱ B類がある（第35図95）。40は平瓦の二次叩きが格子叩きとみられる剥離片である。

## 5. 考察

### A. 遺物

多量の瓦と少量の土器が出土しており、瓦は基本的に多賀城跡第Ⅰ期の瓦群の範疇で捉えられるものである。土器の大部分は須恵器で、土師器は微量である。

#### (1) 瓦

遺構ごとに主要な瓦の数量を示した表3によると(註5)、出土状況が良好で遺構に伴う瓦は必ずしも多くない。そこで、まず瓦の出土傾向について窯跡を中心にさらに若干の整理と分析を行う。

##### a. 出土の傾向

最も精査を行い、多数の瓦が出土したSR6窯跡から傾向を整理する。

〈SR6窯跡の瓦〉最終の5次床面に伴う瓦を定点とし、次いで古い2～4次床面に伴う瓦、廃絶後の堆積土出土の瓦の順に大きく整理・比較してみると(表3)、5次床面では平瓦はⅠ A類を主体に各種があり、Ⅰ A類以外ではⅡ A類が比較的多い。丸瓦Ⅱ B類はa・bタイプがある。他に平瓦Ⅰ C類から製作された二重弧文軒平瓦51lcタイプがある。

古い2～4次床面では平瓦がⅠ A類を主体とする点は変わらないが、他はⅠ C・Ⅱ A類があるのみでⅡ A類も少ない。また、軒平瓦は二重弧文51lcタイプで、平瓦Ⅰ C類による瓦が若干多いことが知られる。丸瓦はa・bタイプがある。続いて廃絶後の堆積土では平瓦Ⅰ A類が突出的に多いが、他にⅠ B・Ⅱ A類の増加も目立つ。一方、丸瓦でタイプが判るのはaタイプのみである。

したがって、SR6出土瓦では一貫して平瓦Ⅰ A類が主体をなすが、5次床面を定点としてみると、古い床面では平瓦Ⅰ C類や丸瓦Ⅱ B類bタイプ、廃絶後は平瓦Ⅰ B・Ⅱ A類が多い傾向が窺われる。

〈SR4・5・7窯跡の瓦〉SR4の操業時に伴う瓦は少ないが、重井蓮花文軒丸瓦122、二重弧文軒平瓦51lcタイプ、丸瓦Ⅱ B類a・bタイプ、平瓦Ⅰ C類がある。平瓦Ⅰ A類はみえないが、前庭部北側に隣接するSK7土壤の底面直上では軒丸瓦122と丸瓦Ⅱ B類bタイプ、平瓦Ⅰ A類が共存している。軒丸・丸瓦を接点としてみると、SR4操業時の状況は前述のSR6窯跡でも古い2～4次床面の様相に近い。SR4では堆積土にも平瓦Ⅰ C類が比較的多く含まれておらず、全体的に古い傾向が認められる。

SR5操業時の瓦は、平瓦ではⅠ A類が主体で、他にはⅠ B類があるのみである。Ⅰ C類はみられず、丸瓦もaタイプのみである。堆積土では平瓦Ⅱ A類が加わるとともにⅠ A類が突出的に多く、SR6

	丸瓦Ⅱ B類			平瓦					軒丸瓦		軒平瓦	
	不明	a	b	I A	I B	I C	I D	E A	重井蓮花文	二重弧文511	c1点	b1点
SR4	2～4次床面	1	1	64	8	8		15		122(2点)		
	堆積土	5		13	2					(3点)		
SR5	1～3次床面	1	1	60	3							
	堆積土	2	3									
SR6	2～4次床面	3	1	13	2	1		1			c1点	
	5次床面	15	4	2	47	1	2	1	11		c1点	
SR7	堆積土	28	7	340	26	7	3	36		(1点)	1点	
	最深床面	2										
SK2	堆積土	9	16	278	13	4	3	22		(7点)	a・c各2点	b1点
	堆積土	3	6	57	3	4	4	8	122(1点)		1点	
SK6	堆積土	2		3								
	最深床面	1	1	4						122(1点)		
SK8	堆積土	1		29		3		3	120(1点)		c2点	
	堆積土	1	3	1	147	1	2	1	(3点)		1点	c1点

\* 床面には直上の災層を含む

表3 F 地点東斜面の遺構と瓦

の堆積土の状況に近い。SR7最終床面の瓦は平瓦ⅠA類が主体で、他にⅡA類がある。丸瓦でタイプが判るものはない。堆積土でも平瓦ⅠA類が主体をしめる。平瓦ⅠC類も含まれるが、ⅠB類も加わる。全体的にSR6の堆積土やSR5と同じ様相が窺われる。

〈窯跡以外の遺構出土瓦〉前述したSK7土壤以外の遺構の瓦は堆積土出土である。それぞれ各種の瓦が含まれるが、主体はいずれも平瓦ⅠA類である。SX2瓦集中遺構やSK9土壤では圧倒的に多く、SR6の堆積土と同じ傾向にある。SR4のような古さが窺われる遺構はない。

以上のことから、SR6窯跡5次床面に伴う瓦を定点としてみると、SR4窯跡とSK7土壤に古い傾向、SR5・7窯跡、SX2瓦集中遺構、SK9土壤に新しい傾向が窺われる。ただ、それは平瓦ⅠC類など少数の瓦に注目して捉えられる微妙な傾向であり、各遺構で平瓦ⅠA類が主体をしめるのは変わらない。東斜面出土瓦の特徴・年代は総体として捉えていくことにする。

#### b. 瓦の特徴

東斜面で出土した多賀城跡第Ⅰ期の軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、隅切瓦、鬼板の特徴を整理するとともに若干の検討もしたい。なお、上記の瓦には文字瓦も含まれるが、それについては後述する。

【軒丸瓦】瓦当文様の判るものは8葉の重弁蓮花文で、型番が判明するものには重弁蓮花文122と133がある。また、122には范による文字のないA、「相」または左文字「相」のあるBがある。

122の范への文字の彫込みについては栗谷庵寺跡出土の122Bに左文字「相」1字の例があることから無記銘→左文字「相」→「相」の順番が知られている（宮城県1956、本文編1982）。東斜面出土の122は3種もあり、そのうち後出の「相」は瓦に古い傾向がみられたSR4窯跡4次床面に伴う炭屑（4層）で出土している。したがって、一連の彫込みが行われたのは東斜面の窯場操業中であり、それもSR4操業以前の比較的短い期間になされたことが考えられる。

133は生産地での出土が初めてであり、本窯跡群での焼成が明確になった。また、今まで丸瓦との接合状況が十分判明していないが、今回の資料では接合部が少し残っており、接合効果を高めるヘラキザミはみられない。なお、122も含めて製作技法の点では他に從来のものと異なるところはない。

ところで、多賀城跡第Ⅰ期の軒丸瓦の文様は5・6葉重弁蓮花文、8葉重弁蓮花文、細弁蓮花文の順に移行し、数量的には8葉重弁蓮花文が圧倒的で9割強をしめる（本文編1982）。この蓮花文は様式的にはa～eの5つに分けられ、その順番で若干の時間差をもって移行する。そのうち122は2番目のb、133は最終5番目のeにあたるもので、bはaとは中房内の周縁蓮子間における隆帶・区画線の有無、cとは蓮弁端部の尖る形状で分けられる。eは蓮弁端部にやや丸みがあり、縱断面もなだらかに盛り上がるるのが特徴である。様式的に122は古く、133は新しい。

【軒平瓦】16点全て半截管状工具による手描きの二重弧文511である。製作技法の点で從来のものと異なるところはない。多賀城跡第Ⅰ期の軒平瓦の瓦当文様は二重弧文・三重弧文から補修瓦にみられる均整唐草文に移行する。数量的には二重弧文511が9割をしめ、素材となる平瓦の種類から桶巻き作りのⅠA～C類によるa～cタイプと一枚作りのⅡA類によるdタイプがあり、桶巻き作りから一枚作りへ大きく移行する。また、前述の重弁蓮花文軒丸瓦とはa～cタイプがa～d、dタイプがeと組む。東斜面出土の二重弧文511はa～cタイプであり、比較的cタイプが多い。古さが窺われる。

表4 目の出山塞跡群各地点の瓦

	軒数	台数	平均	年率	開業	営業	合計
F東側面	販売 率 %	33 1.6	11 0.9	1573 21.5	11 75.7	11 0.5	1人 2883
F西側面	販売 率 %	1 0.6	1 0.6	4 2.6	156 96.3		162
A地点	販売 率 %	3 0.5	40 6.7	249 61.7	2557 89.7	1 1	2651
C地点	販売 率 %	4 0.6	16 2.3	100 14.5	100 R2.5	1 0.1	998

表5 瓦の種類

	発着を作り				一航作り			合計
	I	A	B	C	ID	E	F	
F 東斜面	数量 % 83.3	118.9 4.6	49 3.7	49 3.7	111 0.9	111 0.9	134.0 6.3	
F 西斜面	数量 % 45.5	7.0 4.6	19 7.0	21 7.0	122 2.1	122 2.1	140.0 8.6	
A 地点	数量 % 73.8	189.7 1.4	22 1.4	22 1.4	313 0.8	313 0.8	250.0 12.3	
C 地点	数量 % -	-	93 16.4	-	474 0.6	474 0.6	567.0 0.836	

表6 平瓦の数量と比率

顎面の文様は鋸歯文とその下の直線文からなり、直線文はaタイプが1本、b・cタイプが2本に限られる。鋸歯文はa・bタイプでは各線がほぼ直線で顎面を均質な鋸歯が並ぶが、cタイプはやや不均質で、少し湾曲する線もみられる。また、「ハ」字状のものもあり、多様で奔放な趣がある。接合状況はaタイプに接合効果を高めるキザミがないものがある。cタイプは格子・鋸歯状のキザミのあるものとないものがあり、前者の場合、キザミの形態は様々である。

【丸瓦】粘土繩巻き作り、ロクロ調整による丸瓦で、全容が知られるものは有段の丸瓦ⅡB類のみである。ロクロ調整前の叩きは繩・格子叩きのa・bタイプがあり、昨年報告した矢羽根叩きのcタイプを加えると全タイプが揃う（関連2010第19図29）。主体はaタイプである。丸瓦ⅡB類は多賀城跡では第I～IV期まで一貫して主体となる丸瓦だが、b・cタイプは第I期に限られる。aタイプは厳密には第I期に限定できないが、他の瓦の状況からみて限定しても問題はない。

【平瓦】I A～D 類と II A 類があり、細分まで含めて I C 類 b タイプ、II B 類 a2 タイプ以外の第Ⅰ期の平瓦全てがある(64 頁付表)。また、他の地点の平瓦とともに大別で数量などを示した表6によると I A 類が8割以上をしめ、I B～D 類と合わせて桶巻き作りの I 類が9割を越える。一枚作りの平瓦では II A 類があるが、1割弱にすぎない。西斜面で多量に出土した II B 類は皆無である。II B 類は二重弧文軒平瓦 511 より後出の均整唐草文軒平瓦 660 の製作に用いられており、F 地点西斜面や C 地点で多く、A 地点も比較的多く出土している。東斜面の平瓦はそれらより古い様相を持つ。

なお、平瓦では從来の分類にないものが約50点みられた。総数に比べると少数だが、I A類凸面におけるナデ調整前の叩きが矢羽根叩きのものである。繩・格子叩きのa・bタイプと區別して本書ではI A類cタイプとして記した。その位置付けについては後述する。

【隅切瓦】11点出土している。形状からA～C類に分類したが、現段階での検討はまだ難しい。素材となる平瓦はIA・IC類で、多賀城跡政府の隅切瓦が桶巻き作りのI類によるものが多いことと付合する(本文編1982)。なお、A類の隅切瓦のうち第27図46・49は別個体だが、左・右の側端同士の長さを加えると、それぞれほぼ1枚分の長さとなる。各々切り落とした側も利用され、1枚の平瓦から

2枚の隅切瓦がとられていたことが推測される。

【鬼板】方形の重弁蓮花纹鬼板950A、または950Bがある。破片のためA・Bの限定はできないが、950は多賀城跡関連の鬼板で最も古いもので、脚部への文字の彫込み、頭部の方形からアーチ型への形状変更を通してA→B→Cと変化する。Aは多賀城廃寺跡と本窯跡群、Bは多賀城廃寺跡と本窯跡群、菜切谷廃寺跡、Cは多賀城政府跡と大吉山瓦窯跡に例がある。

### C. 相対的な年代

前節を踏まえて、年代に関わることを簡略に整理すると次のとおりである。

軒丸瓦：重弁蓮花纹122・133	(様式上2・5番目)
軒平瓦：二重弧文511a～cタイプ	(桶巻き作り。cタイプや多い)
丸 瓦：II B類	(粘土紐巻き作り有段丸瓦)
平 瓦：I A類を中心とし、他に I C類など。I類主体	(桶巻き作りが9割。II B類なし)
隅切瓦：I A・I C類が素材	(桶巻き作り)
鬼 板：950A、または950B	(多賀城跡関連では最古)

この内容は昨年まで調査した西斜面の出土瓦とは大きく異なる。西斜面では一枚造りの平瓦 II B類が多量に出土したが、東斜面では全く含まれない(表4・6)。また、西斜面では丸瓦や桶巻き作りの平瓦 I類は少数で、僅かにみられる軒平瓦も均整唐草文660で新しいものである。

東斜面出土瓦と近い様相の瓦が出土した多賀城跡関連の窯跡群には下伊場野窯跡群と本窯跡群A地点がある。下伊場野窯跡群では3基の窯跡から第I期の瓦が多数出土しており(関連1994)、その内容は軒丸瓦に8葉重弁蓮花纹114・116、軒平瓦に二重弧文511cタイプがあり、平瓦は全て I C類aタイプで「今」「下」などの陰刻文字のある瓦を含む。丸瓦は粘土板巻き作りによる無段の丸瓦 I A類と有段丸瓦を主体とし、他に粘土紐巻き作りの丸瓦 II B類がある。

重弁蓮花纹114・116は中房の周縁蓮子間に隆帯による区画を持つ点で古い要素を持つが、郡山遺跡第II期官衙の軒丸瓦よりは運弁・隆帯の形状に後出的な特徴がみられる軒丸瓦で、多賀城跡第I期の8葉重弁蓮花纹の様式上では最古のaに位置づけられる。また、板巻き作りの丸瓦を主体とする点にも紐巻き作りの丸瓦 II B類を主体とする他の多賀城創建期の窯跡群より古い特徴がみられ、下伊場野窯跡群は多賀城創建期でも初期段階の窯跡群と捉えられている。

東斜面出土の軒丸・丸瓦は様式や技法、形態の点で後出的である。平瓦もSR6窯跡の古い床面でI C類がやや多い傾向にあることから、主体をなすI A類は全体的に I C類より新しい平瓦とみられる。東斜面出土瓦は下伊場野窯跡群のものより後出的と考えられる。

ただ、軒丸瓦122は下伊場野窯跡群の114・116のすぐ後の様式である。また、平瓦はI A類を主体としつつも SR6窯跡2～4次床面やSR4窯跡では比較的 I C類が多く、「今」の陰刻文字瓦も出土している。二重弧文軒平瓦511では平瓦 I A類によるaタイプ以上に I C類によるcタイプが目立つ。それらのことと踏まると、後出的ではあるが、古い部分では下伊場野窯跡群と関連性を有していたことが考えられる。下伊場野窯跡群でも有段丸瓦が若干出土しており、丸瓦 II B類による影響を見出されることとも付合する(関連1994)。

A 地点では7基の窯跡から第Ⅰ期の瓦が多量に出土している(宮城県1970)。内容は軒丸瓦に重弁蓮花纹126、軒平瓦に二重弧文511dタイプ、丸瓦にⅡB類があり、平瓦はⅠA類を主体に表4・6(41頁)のとおりである。重弁蓮花纹126は様式上最終のeで、二重弧文511dタイプは一枚作りの平瓦ⅡA類を素材とする。平瓦ⅡA・ⅡB類も一定量で目立つ。ⅡB類は軒平瓦でも後出の均整唐草文660に使われた平瓦で、その軒平瓦の製作は天平10年頃(738)とする見方が示されている(佐川2000)。

東斜面出土の軒丸瓦133の様式はA地点の126と同じ最終のeである。しかし、軒丸瓦には古い122があり、平瓦は桶巻き作りのI類が9割をしめる。平瓦ⅡB類も皆無である。こうした特徴はA地点に先行することを示す。ただし、最終様式の軒丸瓦133があること、平瓦ⅡA類も1割弱はあること、の中にはA地点と類似した布目の平瓦(註6)もあることは注意される。また、窯跡には重複関係や補修があり、多少の継続性が考えられる。A地点とは新しい側で若干重なる可能性がある。

以上のことから、東斜面出土瓦は下伊場野窯跡群とA地点の瓦群の間に位置づけられ、上下ではそれらと重なる可能性がある。年代は下限から示せば、均整唐草文660に使われた平瓦ⅡB類がないことから天平10年頃(738)以前とみられる。上限は下伊場野窯跡群の瓦群が多賀城創建期初期段階に位置づけられ、多賀城跡の創建に関しては神亀元年(724)にはほぼ完成していたとみている(本文編1982)ことから養老・神亀年間頃(717~728)となる。

## (2) 土器

### a. 須恵器

壺、高台壺、高台塊、壺蓋、壺蓋、壺蓋、瓶、壺、壺があり、図化できた資料の数量を遺構と分類に基づいて示すと表7のとおりである。各遺構とも数は少ない。また、出土状況が良好で一括性のある資料はSR5窯跡3次床面、及びそれに伴う炭層(3層)出土の須恵器のみである。

〈SR5窯跡3次床面出土須恵器〉壺ⅡA・ⅡB・ⅡC類、高台壺、壺蓋Ⅱ類、壺がある。壺類は平底で、壺は体部・口縁部が内溝気味に立つもの、もしくは外反するⅡA・ⅡB類を主体に構成される。高台壺は低い高台のつくもの、壺蓋は口縁端部が丸くおさまるⅠ類である。

本窯跡群の土器については須恵器が多量に出土したC地点で分析が行われ、須恵器壺を中心して第Ⅰ~Ⅲ群土器が設定されている(色麻町1993)。各土器群で主体となる壺は第Ⅰ群が丸・平底のⅠ・ⅡA・ⅡB類、第Ⅱ群が平底のⅡA・ⅡB類、第Ⅲ群が平底のⅡC類で、土器群の年代は第Ⅰ群が8世紀初頭頃~養老・神亀年間頃(717~729)、第Ⅱ群が下限を天平10年(738)とする養老・神亀年間前後頃、第Ⅲ群が天平10年前後頃と位置づけられている。

3次床面の須恵器は壺類が平底の点で第Ⅱ群土器以降の特徴をもつ。また、口縁端部が丸くおさま

	4次床面 堆積上	壺			高台壺	高台塊	壺蓋		壺蓋	壺	壺	壺	壺
		I	ⅡA	ⅡB	ⅡC		I	II					
SR4	4次床面 堆積上		1						1	1			
SR5	3次床面 堆積上		1	2	2	1			1	2			
SR6	5次床面 堆積上	1		1		1			3	1	1		2
SX2	堆積上		1										
SX8	堆積上			1									
SX9	堆積上		1		1								
	堆積上			1									

\* 堆積には直上の炭層を含む

表7 F 地点東斜面の遺構等と須恵器

る坏蓋は第II群土器以前とみられている。したがって、資料数は少ないが、3次床面出土須恵器は概ね第II群土器の特徴を備えており、同じ頃の資料と考えられる。

ところで、坏II B類には内済気味に立ち上った体部が角度を急にして口縁部に至る器形のものがあり（第32図70）、その類例は下伊場野窯跡群第3号窯跡の坏にみることができる（関連1994）。この種の坏II B類はSR5の堆積土や他の遺構にもあり（79、第33図82）、瓦と同様に下伊場野窯跡群の影響を受けていることが考えられる。

ただし、底部の切離し・再調整の技法は下伊場野窯跡群の坏がヘラ切り回転ケズリ調整とみられるのに対して、それらはSR5の3次床面の坏が回転糸切り周縁部手持ケズリ調整であるのをはじめとした異なる要素がある。また、回転糸切り技法は本窯跡群では第III群土器の段階から現れており、従来より古い例となる。その一方、3次床面には第III群土器で主体をなす静止糸切り周縁部回転ケズリ調整の坏II C類も含まれている。

総じてみれば3次床面の須恵器には移行期の様相が窺われる。年代は坏II C類の存在、遺構の重複上でSR4・5窯跡ではSR5の3次床面が最終となること、出土瓦におけるSR5の新しい傾向（40頁）などを踏まえて第II群土器の養老・神龜年間前後頃～天平10年頃でも比較的新しい頃と考えられる。

〈その他の出土須恵器〉SR5窯跡3次床面以外の須恵器は第I～III群土器の範疇で捉えられ、年代は8世紀前半頃と考えられる。一括りと数量の不足のため特定はできないが、図化した坏ではII B類が主体で、他に若干I類もみられる。また、窯跡でも新しいSR5窯跡3次床面の須恵器が第II群土器にあたることから8世紀前半頃でも養老・神龜年間前後頃を中心とした頃を想定しておきたい。

### b. 土器

成形にロクロを使用し、口縁部と体部の境に段をもつ鉢が1点あるのみである。同様の特徴の鉢はC地点にもみられる。ロクロを使用するが、年代は8世紀前半頃と考えている。

## B. 遺構

検出した遺構には窯跡4基、瓦集中遺構1ヵ所、溝2条、土壙4基があり、それらは標高60～65mの斜面が東側に張り出した傾斜の緩やかな約20m四方の範囲に立地している。また、これらの遺構には次のような重複関係がある。

- SR4窯跡→SR5窯跡
- SR4窯跡→SX2瓦集中遺構
- SR4窯跡（整地層）→SK7土壙
- SK9土壙→SR7窯跡

以下では、上記の立地や重複関係を踏まえて窯跡を中心に遺構の特徴や変遷などを整理・検討する。

### （1）窯跡の特徴と変遷

〈特徴〉4基の窯跡は東側に張り出した斜面の中央に位置し、煙出しを西側に向けて等高線にはば直交して造られている。いずれも地下式窯窯でSR5～7窯跡は直立する煙道を持つ。規模はSR4・6が全長9.5m前後、窯体床面の幅が1.2m前後、SR5が全長5.5m、窯体床面の幅が0.7mで、大小がある。SR7は全長7.0m以上、焼成部床面の幅が1.4mで、SR4・6と概ね同規模とみられる。また、精査したSR5・6では焼成部奥で天井が一部残存していた。床面からの高さは規模の大きいSR6で0.7m、小さ

いSR6で0.6mである。

窯体の平面的な形状は精査したSR5・6床面では焼成部と燃焼部の境がやや不明瞭で、SR5では前部との境も曖昧である。SR6の前庭部は焼き口から左右に張り出し、やや膨らんだ長方形を呈す。窯体の焼成・燃焼部の境は概ね床面の傾斜の違いで区別され、燃焼部はほぼ平坦、焼成部は5~25°の傾斜をなす。また、燃焼部は前庭部と比べて若干低く窪められている。

床面は地山まで精査したSR4~6では当初は地山を床面とする。その後、嵩上げによる補修が燃焼部で2~4回、焼成部で1回程度行われている。また、側壁は基本的に地山であるが、SR6では3~5次床面と合わせて平・丸瓦を貼付けた補修が行われている。こうした補修の存在から各窯跡はある程度継続的に使用されていたと考えられる。

他にごく一部だが、SR6では焼台が良好に検出された。窯体の長軸方向と直交して丸瓦と平瓦を各々一列に並べたもので、丸・平瓦列の間隔は約40cm(瓦心々)あり、やや階段状を呈している。

以上の窯跡のうち、規模の大きいSR4・6・7の床面とそれに伴う炭層では多量の瓦と少量の須恵器が出土している。瓦を主体として須恵器も焼成していたと考えられる。瓦は前筋で述べたように多賀城跡第I期の瓦群で捉えられるものである。一方、小さいSR5では須恵器の数が瓦を上回る。特に3次床面では壺類や壺蓋の出土が顕著で、焼台の平瓦直上で出土した壺もある。窯跡の小規模さと遺物の様相、大きな窯跡で須恵器も焼成することなどからみると須恵器の小型品主体の焼成が考えられる。そうした窯跡は本窯跡群A地点に8号窯跡の例がある(宮城県1970)。8号窯跡は全長が4.1mと小さく、焼台の瓦を除くと須恵器壺の出土が多数をしめることから須恵器専用窯とみられている。周りには瓦を主体に須恵器も焼成した窯跡もあり、類似性が指摘できる。

〈変遷と年代〉窯跡は南北13m、東西9mの範囲で近接しており、北側のSR4・5にはSR4→SR5の重複関係がある。また、SR5・6・7の間隔は北から約2.6m、約2.9mで非常に狭い。本窯跡群のA地点では広い南斜面で窯跡7基が並んで検出されているが、間隔は4.2~7.0mで、平均は5.8mである。A地点を参考にすると、東斜面の4基の窯跡が同時に存在することは考えられない。

ところで、窯跡の間隔を1つおきにみるとSR4・6が約4.4m、SR5・7が約5.3mで、併存は可能である。SR4・6とSR5・7では西側で埋置の位置もほぼ揃う。また、前筋(40頁)で述べたように各窯跡の出土瓦は、SR6の5次床面を定点としてSR6の古い床面とSR4操業時の出土瓦に古い傾向、SR5・7の出土瓦にSR6廃絶後と同じ新しい傾向があり、SR4・6→SR6(5次)→SR5・7の変遷が想定される。さらに、窯跡廃絶後の堆積状況をみるとSR4・6ではSR4に2層、SR6に4層などの遺物を多く含む層があるが、SR5・7にはそうした層はない。堆積状況はSR4・6とSR5・7で共通性があり、各々の特徴はSR4・6廃絶後には別の窯跡が操業していたこと、SR5・7廃絶後には窯跡がなかった可能性を示唆する。その場合、SR6の4層で須恵器の出土量が多い点も注意される。SR6は須恵器を主体に焼成したSR5と重複関係はないが、4層の遺物様相からみてSR5操業時には廃絶しており、SR5と重複するSR4と同様に古いことが推定される。

以上のような重複・位置関係、遺物の様相、堆積状況からすると、明確な時期設定は難しいが、大きくSR4・6からSR5・7への変遷を考えられる。出土瓦の様相からはSR4・6→SR6(5次)→SR5・7の

想定も可能であり、いずれ1・2基程度での操業とみられる。窯跡の位置や形態の観点から捉えると、北側のSR4・6から南側のSR5・7へ移動し、それに伴って同規模2基の操業から須恵器小型品の焼成を分けた大小2基の操業へと移行したと考えられる。

年代は前節の遺物の検討から上限が養老・神亀年間頃(717～728)、下限が天平10年(738)前後頃であり、補修や変遷の存在から、その間のある程度の期間中に継続して操業していたと考えられる。また、SR5は重複関係や3次床面出土須恵器の様相から、その中でも新しい年代が想定される。

## (2) その他の遺構

窯跡以外の遺構はSD5・6溝が窯跡の西側や南側、SX2瓦集中遺構とSK6～9土壙が窯跡の周りに位置しており、窯跡を中心に分布している。そのうちSX2とSD5・6では堆積層に灰白色火山灰層がみられ、10世紀前葉頃以前の遺構と考えられる。また、各遺構の出土遺物は窯跡と同様の瓦と土器であり、異なる種類や年代のものはない。以上のことから、これらは窯跡と関連する遺構と捉えられる。次に各遺構の特徴や機能などについて述べる。

SX2瓦集中遺構は北東部に位置する長軸3.7m、短軸3.1mの不整な楕円形の窪みに瓦を主体とした多量の遺物が集中する遺構である。SR4窯跡廃絶後の前庭部の窪みに不良品を投棄したものとみられ、SR4以外の窯跡に伴う捨場と考えられる。

SD5溝とSK6土壙はSR4～7窯跡西側の標高の高い所に位置する。後述のSD6溝とSK8土壙のように接続はしないが、より標高の高い北側にSK6、その少し南からSD6が低い南に向かって延びており、基本的なあり方はSD6とSK8と同じである。これらは窯跡の西を仕切るとともに尾根側からの水を窯跡の手前で留め、南に排水する役割をしていた土壙・溝とみられる。

SD6溝とSK8土壙は最も南のSR7窯跡の約3m南にあり、標高の高い西に位置するSK8からSD6が低い東に向かって延びている。これらの遺構から南側に窯跡はない。そのあり方からみて、これらは窯跡の南を仕切るとともに、SR7への水の浸入を防ぐためにSK8で集めた水を東に排水する機能を果たした土壙・溝と考えられる。

SK7土壙はSR4窯跡掘削時の整地層より新しく、その前庭部と西端を擴えて約1m北側に並ぶ土壙である。底面では粘土塊が検出され、遺物もSR4の4次床面に伴う瓦と同じ重弁蓮花文軒丸瓦122、丸瓦ⅡB類bタイプが出土している。粘土置き場などSR4窯跡に伴う何らかの機能が考えられる。

SK9土壙は南東部にある東西に長い楕円形の土壙で、前述のSX2瓦集中遺構とは南北対称的な所に位置する。規模も長軸4.8m、短軸1.6mでSX2に比較的近く、出土遺物も多い。SR4窯跡廃絶後の窪みを利用したSX2と同じく不良品の捨場とする目的で掘られた土壙と推定される。SR7窯跡より古いが、上面での確認にとどまる。他の窯跡も含めて詳しい前後・併存関係は不詳である。

## (3) 窯場の外観と年代

前節までのことを踏まえて、東斜面の窯場に外観と年代について整理する。

〈外観〉東斜面の窯場は標高60～65mの斜面が東に張り出す傾斜の緩やかな約20m四方の範囲に造られており、窯跡、溝、瓦集中遺構、土壙で構成されている。窯跡を中心に西・南側には溝があり、瓦集中遺構と土壙は窯跡の周りに分布する。

窯跡は地下式窯窯で、斜面には直交して造られている。検出した4基の窯跡は狭い範囲で近接しており、重複・位置関係や出土瓦の傾向などからみて、大きくSR4・6窯跡からSR5・7窯跡への変遷が考えられる。同時に操業していたのは1・2基程度とみられる。また、地山まで精査した窯跡では1～4回の補修があり、変遷と合わせて操業期間に多少の幅が想定できる。

窯跡の規模は9.5m前後と約5.5mのものがあり、大小がある。出土遺物からみて大きい窯跡は瓦を主体に須恵器も焼成しており、小さい窯跡は須恵器の小型品を主体に焼成している。

窯跡の周りに位置する溝や瓦集中造構、土壤は排水や不良品の捨場の役割を果たしていたとみられる。ただし、SK7土壇はSR4との位置関係や出土瓦の共通性、底面における粘土塊の存在といった特徴からSR4に伴う粘土置き場など何らかの機能が考えられる。

窯場の外観は以上のとおりであり、全体的にみて小さな窯場である。約20m四方の範囲での1・2基程度の窯跡による操業であり、周りにも排水や捨場の機能を果たす溝や土壤があるのみである。工房は近くにはみられない。やや離れて存在したことが推定される。東斜面の窯場は、生産過程のうち焼成と廃棄を担う場として機能していた小規模な窯場と捉えられる。

〈年代〉出土遺物から上限を養老・神龜年間頃(717～728)、下限を天平10年(738)前後頃とする年代が考えられる。補修や変遷があることから、その間のある程度の期間中に継続して操業している。

ところで、本窯跡群では昨年の調査も含めて今までにA・C地点、F地点西斜面の窯場が調査されている。そのうちA地点は多賀城跡の第I期でも後出の瓦を焼成した窯場、C地点の窯跡も時期が特定されたものは年代がやや降る須恵器窯、F地点西斜面の窯場も同じ頃のものであり、多少の違いはあるが、それらは天平10年前後頃の年代を中心とした頃の窯場である。

上記で示した東斜面の窯場の年代はいずれよりも古い。小規模な窯場ではあるが、現時点の本窯跡群調査地点の中では最も古い窯場として捉えられる。

## C. 東斜面出土瓦の特質

出土した瓦の特徴や年代についてはすでに記述した。ここではさらに東斜面の窯場を位置づけるうえで重要なと思われる出土瓦の特質について述べたい。

### (1) 種類

東斜面出土瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅切瓦、鬼板があり、その数量や比率を他の地点も含めて示すと表5(41頁)のとおりである。表によると各地点とも平瓦を主体とするが、その比率は東斜面が最も低い。代わりに丸瓦や軒丸瓦の比率が高く、他に鬼板や隅切瓦もあるのが特徴的である。道具瓦を含めた豊富な生産が知られる。微量とはいえ鬼板や隅切瓦は入母屋・寄棟造りなどの格式のある建物に使われる瓦である。他の地点に鬼板ではなく、隅切瓦も1点程度にすぎない。11点の出土量は出色であり、供給先に格式の高い建物があることを示す。窯場の性格を考えるうえで注目される。

### (2) 平瓦について

平瓦は出土瓦の主体をなす瓦であり、その様相には注目されることがある。2つほど述べる。

1つめは種類の多さである(64頁付表)。出土した平瓦はⅠ C類bタイプとⅡ B類a2タイプを除く

多賀城跡第Ⅰ期の平瓦全てであり、極めて種類が多い。その多様さは工人集団の違いや時期による変化を示すとみられ、東斜面の窯場では複数の工人集団の製作による瓦を焼成し、また、ある程度長い期間にわたって操業が続けられたことが考えられる。

特に複数の工人集団の存在が考えられることは注目される。SR6窯跡5次床面でみると7種類もの平瓦があり、ほぼ同じ技法の平瓦を焼成した下伊場野窯跡群や木戸窯跡群とは大きく異なる（関連1994・2007）。単一集団の製作とは考えられない。本窯跡群では複数の集団が集まって第Ⅰ期の瓦を製作していたとみられる。なかでも一枚造りのⅡA類が一定量あることには注意される。従来、ⅡA類は本窯跡群A地点における第Ⅰ期でも最終の重弁蓮花文軒丸瓦126との共伴が初例だが、東斜面の窯場の頃まで遡り、一枚造りの技法を用いる工人集団がより早い段階から第Ⅰ期の瓦生産に携わっていたことが知られる。

2つめはⅠA類とⅠC類（aタイプ）との関係についてである。ⅠA類は多賀城跡第Ⅰ期の平瓦の主体をしめるものであり、東斜面出土平瓦でも8割以上をしめる代表的なものである（41頁表6、64頁付表）。先にふれたが、この平瓦では従来の分類にないものが約50点みられた。凸面のナデ調整前の叩き目が矢羽根叩きのもので、繩・格子叩きのa・bタイプと区別して本書ではⅠA類cタイプとして記載した。また、この瓦はⅠC類の矢羽根叩きの平瓦両面をナデ調整したものもある。

ⅠC類は桶巻き作りの平瓦円筒を分割後、凸面を叩き調整したものであり、本来ナデ調整は介在しない。しかし、叩き目が矢羽根叩きのものでは前段階にナデ調整がみられる場合があることが早くから知られていた（本文編1982）。さらに下伊場野窯跡群の報告では他の叩き目のⅠC類も含めて、省略する場合もあるが、叩きの前後にナデ調整があることが捉えられている（関連1994）。ただし、それらは凸面にとどまるもので、凹面のナデ調整は若干の例外を除いてみつかっていない。

そうしたⅠC類の矢羽根叩きの平瓦両面がナデ調整されたものが東斜面では捉えられた（第19図10）。詳細にみると、両面に残る痕跡が凹面は模骨痕・布目→ナデ、凸面は矢羽根叩きを切る布目があり、さらに布目が粗いナデで切られている（叩き→布目→ナデ）。凸面の布目は凹面をナデ調整した際のものである。また、痕跡上最初の矢羽根叩きはまばらなものがあり、調整段階の二次叩きによるものである。したがって、この種の平瓦は二次叩きが矢羽根叩きのⅠC類に布を敷いた凹型台の上でナデ調整を行ない、さらに布を敷かない凸型台の上でナデ調整したものである。

最終調整が両面ともナデ調整であること、痕跡から知られる工程がⅠA類であることから、この種の平瓦を本書ではⅠA類cタイプとして位置づけた。その存在は前節で述べた下伊場野窯跡群との関連性を踏まえ、本窯跡群でⅠC類の技法をもつ工人にナデ調整の技法が加わり、ⅠA類の技法へと繋がることを示唆する。同様のことは従来のⅠA類a・bタイプについても想定される。東斜面出土瓦には技法的な移行を示す平瓦が含まれている。

なお、ⅠA類cタイプの凸面のナデ調整が粗いのは工程上のⅠC類段階で多少のナデ調整があるためと思われる。その意味では移行の本質は、まず凹面のナデ調整にあったとみられる。さらに、その凸面を完全にナデ調整したものがタイプ分けのできないⅠA類となるが、その移行に関しては次の文字瓦の項であわせて述べる。

### (3) 文字瓦

瓦に記された文字には「今」「下」「上」「相」「木」「造」「申」「□(上?)」等があり(26頁表2)、刻書や凸型台・範への彫込みによる陰刻・陽出によって表記されている。これらの文字瓦からの示唆は多く、その存在は東斜面出土瓦の特質をなす。前節を受けて平瓦の調整と文字瓦との関連から述べる。

〈平瓦の調整と陰刻・陽出・刻書〉文字瓦の中で同じ文字が異なる方法で記されたものに「今」「下」「上」があり、「今」には凸型台による陰刻・陽出文字がある。そのうち陰刻「今」は下伊場野窯跡群に多くの例があり、比較的珍しい凸型台による陰刻の手法とともに同窯跡群の特徴をなす。記入された瓦は平瓦 I C 類で、東斜面の陰刻「今」も同じである。また、本窯跡群では C 地点に類例が1例あり(色麻町1993)、同じく I C 類に記されている。文字と記入方法、平瓦には共通性がある。

一方、陽出「今」は下伊場野窯跡群にはない。本窯跡群では今回の例以外に C 地点に4例、D 地点に1例があり、本窯跡群で成立した文字瓦と指摘されている(関連1994)。D 地点の例は未確認だが、平瓦は東斜面のものも含めて全て I A 類 b タイプである(第28図62)。また、それらは凸面のナデ調整が粗く、前段階の格子叩きが明瞭に確認できる特徴がある。

陽出「今」の成立が本窯跡群であること、陰刻・陽出における平瓦の種類の違い、前節でみた平瓦技法の移行などから陽出「今」は平瓦 I C 類の凹面をナデ調整することで生じた文字と捉えられる。凹面のナデ調整は陰刻文字の消失を促す。残すのは可能だが、ナデ調整時には配慮が必要となる。陽出文字でも配慮は必要だが、文字の形態からみて陰刻よりは不要で、むしろ整形はしやすい(註7)。

次に「下」「上」のうち「下」は狭端を上にして1枚の平瓦の凹面中央に陽出左文字、凸面右下に刻書が記されている(第28・29図59)。平瓦は I A 類 a タイプである。凸面のナデ調整は陽出「今」より丁寧だが、やや不十分で縄叩き目が見出せる。同様の文字瓦は多賀城魔寺跡に例が多い(宮城県・多賀城町1969、年報1975)。また、下伊場野窯跡群では凸型台による陰刻「下」が多くみられ、本窯跡群でも昨年1例確認している(関連1994・2010)。陰刻の場合、平瓦は I C 類である。

「上」は陰刻文字と刻書があり、陰刻は平瓦 I C 類による二重弧文軒平瓦511c タイプ、刻書は丁寧にナデ調整された平瓦 I A 類の凸面右下に多くみられる。

以上のような「下」「上」と平瓦のあり方を「今」も含めて整理すると次のとおりである。

陰刻「今」「上」「下」	I C 類	凹面のナデ調整なし
陽出「今」	I A 類 b タイプ	凸面のナデ調整粗い
陽出・刻書「下」「下」	I A 類 a タイプ	凸面のナデ調整不十分 刻書右下
刻書「上」	I A 類	ナデ調整丁寧 刻書右下

文字の記入方法と平瓦の分類には対応関係があり、ナデ調整の程度と関連している。前述のように陽出「今」は平瓦 I C 類にナデ調整を加えて生じた文字である。また、丁寧なナデ調整で仕上げられた平瓦 I A 類の「上」は刻書のみであり、陰刻・陽出文字は調整が不十分な I A 類に限られる。その理由は陰刻・陽出文字が工程上ナデ調整の前に記入されるために、ナデ調整の際には保護・整形の配慮が必要であり、完全なナデ調整には向かないことが考えられる。陽出「今」のナデ調整が粗いのは文字が壊れるために凸面の最終調整がやや省略された結果とみられる。ナデ調整時の配慮の必要性は東

斜面出土の陽出左文字「下」が明確に示している。この平瓦では凸面が比較的よくナデ調整されたために凹面の陽出文字が潰れており、注視しないと文字の認知が難しくなっている。

ところで、潰れてしまえば文字は用をなさない。しかし、陽出「下」の瓦では凸面に刻書「下」があることで機能が果たされている。両面の文字に左右の別はあるが、意味は同じである。凹面の陽出文字は凸面の刻書が機能するので潰れても構わないのである。そのことは凸面の刻書が後出的であり、凸面に十分なナデ調整を加える過程で記入方法が凹面の陽出文字から凸面の刻書に移行したことを意味する。その最終的な結果が丁寧なナデ調整で仕上げられた平瓦 I A 類凸面の刻書「上」である。

以上のことから、文字の記入方法と平瓦の調整には対応関係がある。陰刻→陽出→刻書の変化は平瓦 I C 類にナデ調整の技法が加わり、当初は凹面を中心に、次いで凸面まで含めた丁寧なナデ調整による平瓦 I A 類への移行と合わせてなされたと考えられる。

なお、陽出「今」「下」は多賀城関連の文字瓦で多いものではない。技法変化の過程で生じた過渡的な文字であるためと思われる。また、先には重井蓮花文122の「相」字の一連の彫込みが短い期間になされたことを述べた。陽出「今」「下」の少なさからみると、記入方法・平瓦技法の変化も比較的急速な移行であった可能性がある。ただし、その変化はあくまで平瓦 I C 類と陰刻文字の技法を有した工人のものであり、文字瓦一般に通有するものではない。

〈文字瓦の使用について〉文字が記された瓦は平瓦 I A 類13点、重井蓮花文122と二重弧文511c タイプ、平瓦 I C 類が都合5点、丸瓦 II B 類2点、平瓦 II A 類1点である(26頁表2)。軒瓦や平瓦 I C 類の5点は古い特徴を持つ瓦に記された文字である。また、平瓦 I A 類のうち11点は上述の「上」「下」「今」で、平瓦 I C 類の陰刻文字の系譜をひく文字とみられる。したがって、都合16点、8割弱の文字瓦に古さが窺われる。一方、一枚造りの平瓦 II A 類の文字瓦は僅か1点にすぎない。

こうした傾向は他の地点における文字瓦の出土様相でも知られる。調査された地点でみると、東斜面より新しい A 地点には文字瓦がない。A 地点は平瓦 I A 類を主体に焼成しているが、同じ I A 類でも文字瓦のない時期、または一群があると考えられる。次に C 地点は10点、F 地点西斜面は2点の文字瓦があるが、そのうち5点が二重弧文軒平瓦511c タイプと平瓦 I C 類の陰刻文字、4点が平瓦 I A 類 b タイプの陽出「今」であり、大半に古さが窺われる。

本窯跡群の文字瓦は国名とみられる表記に坂東諸国との関連性が指摘されて久しい。また、郡名の表記などに負担体系の違いや変化をみる見方もある。瓦のあり方とも合わせ考えると、文字の使用は種類ごとに特定の時期や単位・集團などに限られていたとみられる。

〈多賀城跡と東斜面の文字瓦〉今回出土した文字瓦には多賀城跡政府、及び、多賀城廃寺跡の文字瓦と同范、同じ凸型台によるもの、同筆のものがある。東斜面出土瓦の大きな特質である(第36図)。

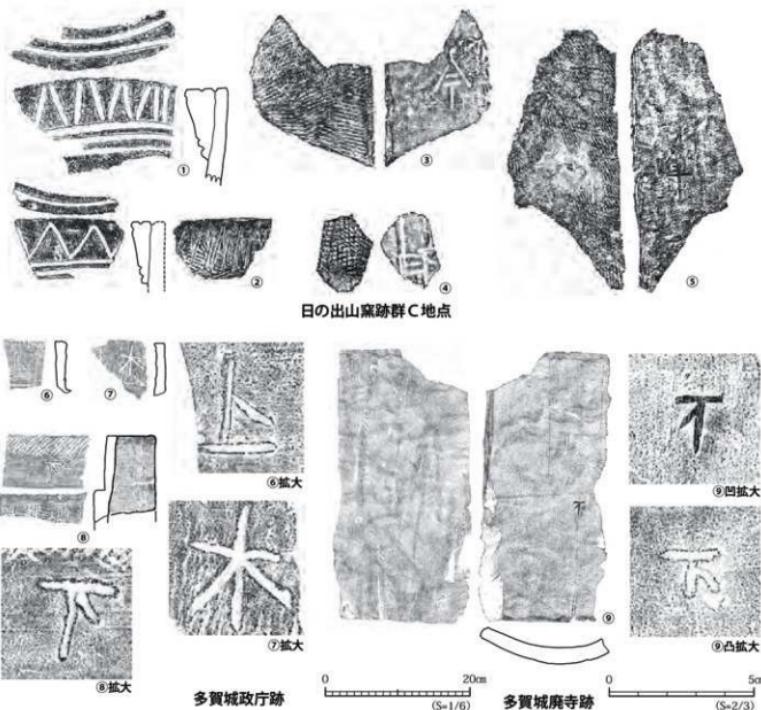
政府跡とは軒丸瓦122の「相」が同范、平瓦 I C 類の陰刻「今」と平瓦 I A 類の陽出「下」が同じ凸型台によるもの、丸瓦 II B 類の刻書「上」「木」が同筆である。そのうち軒丸瓦122の2点、陽出「下」と刻書「上」はSR4・6窯跡に直接伴う遺物である。

陰刻・陽出文字では叩き目も同じである。刻書「上」は文字の大きさやバランス、2画目が右下がりの書き方が一致し、同筆と判断できる。記入部位も玉縁中央の段の近く、丸瓦も II B 類 a タイプで同

じである。刻書「木」も文字の特徴が一致し、細かい位置も含めた記入部位、丸瓦の種類まで同じである。

なお、政府跡の文字瓦はいずれも北・東辺縁地跡付近で出土している。

その他、一昨年に西斜面のSIIb 穫穴住居跡で出土した丸瓦の刻書「下」(関連2009)も政府跡に一致



共通性のある瓦

第36図 C 地点と多賀城政府・廟寺跡の文字瓦

するものがある。SIIb の丸瓦はカマドの芯材に用いられたもので、住居跡の年代も天平10年前後頃(738)に降ることから、後に東斜面から持込まれて使用されたと考えられる。

多賀城廃寺跡とは軒丸瓦122「相」が同范、平瓦 I A 類の陽出「今」「下」が同じ凸型台、刻書「上」「□(上?)」が同筆である。陽出「今」は位置や大きさ、1画目終筆の割れ、2画目の起筆の位置、5画目中央にみられる粘土痕などの特徴が一致し、同じ凸型台と判断できる。陽出「下」では鑿の痕跡や木目圧痕が完全に一致する。2画目下の直線的に延びる鑿の痕跡は明瞭である。凸面の刻書「下」は東斜面の瓦に割れが多くて断定できないが、大きさやバランス、位置は同じである。また、廃寺跡の瓦では右側端中央下に渦巻き状の記号がある。東斜面の瓦ではナデ消されているが、起筆部分が少し残る。刻書「上」は2画目の跳ね上がる特徴、「□(上?)」も文字の特徴や記入部位が一致する。

ところで、多賀城廃寺跡では中門西南方で刻書主体の文字瓦を含む多量の瓦が出土している(年報1975)。近世以降の寺院中枢部からの投棄ではあるが、文字瓦296点の内容をみると、多い方から平瓦 I A 類「上」172点、丸瓦 II B 類「下」101点、平瓦 I A 類「□(上?)」37点、丸瓦 II B 類「毛」21点、丸瓦 II B 類「木」「常」各14点、平瓦 I A 類「下」13点、平瓦 I A 類陽出「下」11点の順であり、平瓦 I A 類の刻書「上」の多さ、「毛」「常」以外の文字内容は東斜面出土文字瓦と共通性がある。

以上のような文字瓦の一一致から、東斜面の窯跡で焼成した瓦の供給先には多賀城跡政府と多賀城廃寺跡の存在が指摘できる。本章の(1)で述べた瓦の種類に隅切瓦や鬼板があることとも整合する。

#### (4) C 地点との共通性

東斜面出土瓦にはC地点の瓦とも共通性がある。C地点はF地点と沢を挟んだ約200m西側に位置し、平成2~4年に窯跡7基、堅穴住居・堅穴遺構14軒などが確認されている。遺構は出土・分析された第I~III群土器、A・B群の瓦から第1~3期に分けられ(註8)、第2期の遺構にA群とした重弁蓮花文・二重弧文軒瓦や平瓦 I A ~ D 類、第3期にB群とした細弁蓮花文・均整唐草文軒瓦や平瓦 II B 類が伴う。東斜面出土瓦とはA群が対応し、軒平瓦や文字瓦に共通性がみられる(第36図)。

C地点のA群の軒平瓦は大半が二重弧文511cタイプである。東斜面のものと合わせみると顎面の鋸歯文が「ハ」字状のもの、ヘラキザミの入れ方などに類似したものがある。後者では素材がI C類矢羽根叩きの平瓦である点も共通しており、原体も似ている。ただし、鋸歯文の書き方は異なる。

C地点の文字瓦は10点あり、5点が二重弧文511cタイプと平瓦 I C 類の陰刻「今」(2点)「相」「常」「上」、4点が平瓦 I A 類 b タイプの陽出「今」で、他に丸瓦 II B 類に左文字「下」がある。陰刻「今」のうち1点は東斜面と同じ凸型台によるもので、平瓦の特徴も一致する。陽出「今」も位置や2画目の起筆の位置などが一致し、同じ凸型台とみられる。平瓦の叩き目も同じ格子叩きだが、ナデ調整の多少があるため原体の共通性までは判断できない。

以上のような共通性から東斜面の窯場とC地点には密接な関連が考えられる。C地点第2期の遺構には工房跡とみられる堅穴住居跡と堅穴遺構がある。一方、東斜面の窯場では近くに工房跡がみられない。C地点の工房跡は生産ライン上で東斜面の窯場と繋がりを持つ工房跡の可能性がある。

## D. まとめ —F 地点東斜面の様相と特質—

以上のことを踏まえて、F 地点東斜面の窯場の様相と位置付けについてまとめる。

〈窯場の外観と内容〉窯場は斜面が張り出した約20m 四方の狭い範囲に立地し、1・2基程度の地下式窯で操業している。窯跡を中心として周りには排水や不良品の捨場などの機能を持つ溝・土壌がある。工房跡は近くにはみられない。その外観は生産過程のうち焼成と廃棄を担う場として機能している小規模な窯場として捉えられる。

製品の焼成は多賀城跡第I期の瓦を中心とするもので、鬼板や隅切瓦を含む豊富な種類を生産している。数量の多い平瓦では桶巻き作りの I 類が9割をしめる。他に須恵器の焼成もみられ、SR5 窯跡では須恵器の小型品主体の焼成をしていたと考えられる。

操業年代は上限が養老・神亀年間頃、下限が天平10年(738)前後頃である。窯跡には補修や変遷があり、その間の一定期間に中に継続して焼成をしていたとみられる。期間の限定は難しいが、第I期の軒丸瓦の主体をなす8葉重弁蓮花文の様式上で2番目の軒丸瓦122と最終の133があること、平瓦 I・II 類の比率から A 地点の方が後年まで操業していたとみられることからすると、多賀城造営に伴う瓦生産の最初と最後以外の中心的な期間が考えられる。

また、操業当初には下伊場野窯跡群と関連を有したとみられる。平瓦 I C 類、陰刻文字「今」の存在がそれを示しており、須恵器の坏 II B 類の器形からすると、影響は須恵器にも及ぶ。その後、平瓦 I C 類には四面を主体としたナデ調整の技法が加わり、さらに凸面への丁寧なナデ調整が施されて完全な平瓦 I A 類へ移行したことが窺われる。

その他、軒平瓦や文字瓦の共通性からみて C 地点とも密接に関連していたと考えられる。東斜面の窯場には工房跡がみられないが、同じ頃の C 地点(第2期)には工房跡とみられる堅穴住居、堅穴造構がある。生産ライン上で東斜面の窯跡と繋がりを持つ工房跡の可能性がある。

以上のことより、東斜面の窯場は遺構の分布や構成、規模の点では小さな外観を呈している。しかし、焼成品は多賀城跡第I期の豊富な種類の瓦であり、その造営に伴う瓦生産の中心的な期間に操業している。また、下伊場野窯跡群や C 地点と密接な関連を持ち、瓦の変遷や窯場のあり方をみるとうえで注目される点が多い。同范・同じ凸型台・同筆による文字瓦の存在から具体的な供給先として多賀城跡政府と多賀城廢寺跡をあげることもできる。

〈窯場の位置付け〉従来、本窯跡群は多賀城創建期における最盛期の窯跡群として捉えられてきた(関連1994)。しかし、今まで調査された地点をみると、A 地点は第I期でも後出の瓦を焼成した窯場、C 地点も時期が特定された窯跡は年代が天平10年(738)前後頃に降る須恵器窯であり、昨年調査した西斜面も概ね同じ頃の窯場である。また、本窯跡群の製品の供給先については、採集資料も含めて大要は知られているものの具体性にはやや欠けている。

東斜面の窯場は上記の各地点の窯場より古く、多賀城造営に伴う瓦生産の中心的な期間に操業している。焼成した瓦の供給先には多賀城跡政府と多賀城廢寺跡があり、それらの造営と直接的な関係を持つ。多賀城創建期における最盛期の窯跡群の実態を示す初めての窯場として位置づけられる。

多賀城第I期政府の一部には日の出山窯跡群 F 地点東斜面の窯跡で焼成した瓦が葺かれている。

### III. 日の出山窯跡群調査の総括

平成19年度から実施した本窯跡群の調査は今年度(平成22年度)で最終となる。調査は平成19年度にA地点北斜面、平成20年度からはF地点について3次にわたって実施した。その結果、A地点で遺構は確認されなかったが、F地点では窯跡をはじめとする遺構を検出し、東・西斜面の窯場の内容が捉えられた。以下では、平成19年度以前に行われたA地点南斜面とC地点の調査成果も踏まえて、F地点を中心に今回の調査を総括する。なお、A・C地点の調査概要是次のとおりである。

【A 地点南斜面】昭和44年調査：宮城県1970

本窯跡群東側の丘陵部に立地する広い南斜面で4～7m間隔で並ぶ地下式の窯跡7基が検出された。そのうち6基が瓦を主体に須恵器も焼成した窯跡、1基が須恵器の窯跡で、瓦は主に多賀城跡第I期の瓦でも後出的な重弁蓮花文軒丸瓦126、二重弧文軒平瓦511dタイプ、丸瓦II B類、平瓦I A・II A類を焼成している。須恵器はC地点第III群土器の主体をなす坏II C類を中心に出土している。

【C 地点】平成2～4年調査：色麻町1993

中央西側の丘陵南麓に立地し、窯跡7基、堅穴住居・堅穴遺構14軒などが検出された。窯跡は6基が地下式、1基が半地下式の構造で、焼成品が判る4基は須恵器を焼成している。年代は出土した瓦(A・B群)や土器(第I～III群土器)から次の第1～3期で捉えられている。

第1期	堅穴住居・堅穴遺構4軒	第I群土器	8世紀初頭頃(下限：養老・神龟年間頃)
第2期	堅穴住居・堅穴遺構3軒	瓦A群・第II群土器	養老・神龟年間頃(下限：天平10年前後頃)
第3期	窯跡4基、堅穴住居5軒	瓦B群・第III群土器	天平10年前後頃

各期とも堅穴住居・堅穴遺構は工房跡である。第1・2期に限定される窯跡はないが、第1期は多賀城創建以前の操業を示す遺構群、第2期はA群とした多賀城跡第I期の重弁蓮花文・二重弧文軒瓦、平瓦I A～D類や第II群土器の生産に関わる遺構群とみられている。第3期の窯跡は須恵器窯で、その焼台や補修にB群とした細弁蓮花文・均整草花文軒瓦、平瓦II B類が転用されていることから、それらの瓦や第III群土器の生産に関わる遺構群と考えられている。

## 1. 遺構について

まず、F地点の窯跡、工房跡とみられる堅穴住居跡などを中心に本窯跡群の遺構を整理する。なお、以下の記述で工房跡とみられる堅穴住居跡、堅穴遺構を一括的に言及する際には工房跡と表記する。

### a. 窯跡

F地点では東斜面で4基、西斜面で3基の窯跡を検出した。窯跡は直立式の煙道を持つ地下式窯窰であり、構造的にはA・C地点で主体をなす窯跡と差はない。F地点のものを加えて本窯跡群で調査された窯跡はA・C・F地点各7基の合計21基となる(表8)。その構造は地下式18基、半地下式1基、不明2基であり(C-第3・7号窯跡:註9)、大部分が直立式煙道をもつ地下式窯窰である。

地点	遺構名	構造	埋深	焼成部				燃焼部				前 跡 部				製品	備考	
				長さ	幅	高さ	傾斜	長さ	幅	高さ	傾斜等	形状	長さ	幅				
A	1号窯跡	地下	直立	8.0	3.0	1.0	1	10~15'	1.0	0.8	1	平坦	5.4	高橋円形	2.3	0.9	瓦・須恵器	排水溝有り 瓦壁抹込み
	3号窯跡	地下	直立	7.8	3.6	1.1	2	12°	2.0	1.1	2	変形	5.3	舟方形、底面に窪み	1.8	1.2	瓦・須恵器	底面に瓦片込み
	4号窯跡	地下	直立	9.6	3.4	1.05	2	7~25'	1.9	0.8	2	変形	5.3	逆三角形状	3.3	0.8	瓦・須恵器	排水溝有り
	5号窯跡	地下	直立	8.2	3.5	0.95	5~6	7~25'	2.0	0.8	2	平坦	5.5	舟方形	4.5	1.1	瓦・須恵器	
	6号窯跡	地下	直立	7.7	3.2	1.35	2	12~26'	1.8	1.1	2	変形	5.0	舟方形	2.0	1.1	瓦・須恵器	瓦壁抹込み
	7号窯跡	地下	直立	7.7	3.4	1.15	4	10~20'	1.8	0.9	3~	変形	5.2	舟方形、底面に窪み	2.1	1.1	瓦・須恵器	瓦壁抹込み
	8号窯跡	地下	直立	4.1	1.6	0.6	1	7~12'	1.0	0.3	1	平坦	2.6	舟方形	1.5	—	須恵器	
	第1号窯跡	地下	直立	8.4	3.2	1.1	2	17'	1.8	0.7	2	変形	5.0	舟方形	3.4	1.7	須恵器	底面抹込み、側壁補修
C	第2号窯跡	地下	直立	8.6	3.1	0.9	6	15°	1.0	0.6	6	平坦	4.1	土算用、一段低い。底面凹凸	4.5	3.2	須恵器	側壁抹込み、瓦片溝有り
	第3号窯跡	地下	直立	—	(3.6)	—	—	—	—	—	—	舟形	—	底面凹凸	36~	2.1	須恵器	外周溝有り
	第4号窯跡	地下	直立	8.8	5.1	1.1	1	13°	2.2	1.0	1	平坦	7.3	舟方形	1.5	4.0	須恵器	
	第5号窯跡	地下	直立	5.9	2.2	1.0	2	23°	1.6	0.5	9	平坦	3.8	舟方形、一段低い。底面凹凸	2.2	2.4	須恵器	底面抹込み、側壁補修
	第6号窯跡	地下	直立	3.8	3.2	1.1	2	17°	1.8	0.7	2	平坦	5.0	溝状	3.4	1.7	須恵器	外周溝有り
	第7号窯跡	地下	直立	(1.0)	(1.0)	(0.4)	1	10°	—	—	—	舟形	—	—	—	—	須恵器	
	SR1窯跡	地下	直立	7.9	2.9	1.0	1	23°	2.1	1.1	2	平坦	5.0	舟方形、一段低い。底面凹凸	2.9	2.8	瓦・須恵器	須恵器主体、外周溝有り
	SR2窯跡	地下	—	11.4	—	—	—	—	—	—	—	舟形	—	—	—	—	瓦・須恵器	平瓦主体
F重	SR3窯跡	地下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	舟形	—	—	—	—	瓦・須恵器	平瓦主体、瓦片溝有り
	SR4窯跡	地下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	舟形	—	—	—	—	瓦・須恵器	平瓦主体
	SR5窯跡	地下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	舟形	—	—	—	—	瓦・須恵器	SH4より新しい
	SR6窯跡	地下	直立	9.0	4.2	1.1	2	5~25°	2.6	1.3	5	平坦	6.8	舟方形、一段低い	1.9	2.3	瓦・須恵器	平瓦主体
	SR7窯跡	地下	—	(7.0)	—	1.4	—	—	—	—	—	舟形	—	—	—	—	瓦・須恵器	平瓦主体

\*長さの単位:m。( )は複数長。底面の横斜等は1次底面で記載。

表8 窯跡一覧

構造以外に形状や規模の観点も加えてみると、窯跡には概ね以下のものがある。

A1類：窯体の焼成部と燃焼部の境がやや不明瞭な地下式窯跡で、全長が8~11m前後の大きいもの

(A 地点：A-1~2-7号窯跡、F 地点東斜面：FE-SR4-6-7窯跡、F 地点西斜面：FW-SR2-3窯跡)

A2類：窯体の焼成部と燃焼部の境がやや不明瞭な地下式窯跡で、全長が4~5m前後の小さいもの

(A 地点：A-8号窯跡、C 地点：C-第6号窯跡、F 地点東斜面：FE-SR5窯跡)

A3類：焼成部に対して燃焼部をやや絞り込む形の地下式窯跡で、全長が8m前後のもの

(C 地点：C-第1・2・5号窯跡、F 地点西斜面：FW-SR1窯跡)

B類：半地下水式窯跡

(C 地点：C-第4号窯跡)

各類の詳しい特徴は省略するが、最も多いA1類は瓦を主体に須恵器も焼成した窯窓、A2類は須恵器を主体に焼成した小型の窯窓、A3類は須恵器を主体に焼成した窯窓、B類は天井架構以前に放棄されたC地点の半地下水式の窓で、地点や年代的な順番で整理すると次のとおりである。

F 地点東：A1類3基(瓦主体) A2類1基(須恵器主体)

A 地点：A1類6基(瓦主体) A2類1基(須恵器)

F 地点西：A1類2基(瓦主体)

A3類1基(須恵器主体)

C 地点：

A2類1基(須恵器)

A3類3基(須恵器)

B類1基

A・F 地点では瓦と須恵器が焼成されている。窯跡の数からみても主体は瓦である。従来はA地点にしかなかった瓦窯跡としての実質がF 地点東・西斜面の調査で備わってきた。また、A・F 地点の窯跡は瓦を主体に焼成する大きなA1類と須恵器を主体に焼成する小さなA2・3類の窯跡からなり、一つの形態として本窯跡群には大小の窯跡で構成される窯場があることが知られる。

なお、規模は古いF 地点東斜面の窯跡に対してA 地点の窯跡はA1・2類とも約1m 小さい。さらに新しいF 地点西斜面の窯跡では逆に1~3m 大きく、多少の違いがみられる。各地点の窯跡の形態や數、

本窯跡群における年代(生産)上の画期、窯跡の規模に関する一般的な傾向などを熟慮した評価が今後必要と思われる。

#### b. 工房跡(堅穴住居跡・堅穴造構)

西斜面で5軒検出し、形態や構造を捉えた。類似する工房跡はC地点でも14軒確認されている。残りの良くない1軒(C-第12号住居)を除いて、構造的には次のものがある。

A類：基本的な構造が居住用の堅穴住居跡と同じもの (C-第2~9・13・14号住居、FW-SII-3号)

B類：基本的な構造が居住用の堅穴住居跡と異なるもの (C-第1・10・11号堅穴造構、FW-SI4・5号)

A類は居住用の住居跡と同様の施設とロクロビットや粘土貯蔵ピットを持つ工房跡である。床面で粘土塊も確認される。平面形は一辺4~5mの方形が主体で、主・壁柱穴による上屋構造を有し、斜面上方にカマドが設けられている。カマドは粘土主体で構築され、焚き口側壁の芯材に丸瓦を用いたものもある(C-第4b・6・13号住居、FW-SIIb)。

ロクロビットは一辺20~30cmの方形ピットの中央に径5~10cmの棒状の痕跡のあるものが多い。掘方には黄褐色粘土が充填され、堅くしまっている。大半は主柱穴の脇に位置する。粘土貯蔵ピットや粘土塊は比較的カマドと対応する側にある(C-第2・7号住居、FW-SIIb)。粘土は白色や淡黄色を呈すものである。他に床面中央に焼面が広がるものもある(C-第5号住居)。

B類は上屋構造や斜面下方の壁が不明瞭で、A類より作業場としての性格が強いとみられる工房跡である。平面形は等高線に長辺を描いた長方形で、規模が大きく、長辺は約7~10m、短辺は3m以上ある。内部ではカマドを3軒で確認している(C-第10号住居、FW-SI4・5)。他には貯蔵穴状ピットや周溝が一部にあるのみで施設が少ないが、床面では粘土塊や焼面・焼土の分布がみられる。粘土塊の多くは斜面下方の隅で検出され、長さ約2m、高さ約25cmに及ぶ塊もある(FW-SI4)。焼面や焼土は中央部にみられ(C-第1・10号堅穴)、分布状況はA類と同じ傾向がある。

以上のような工房跡の特徴はC地点とF地点西斜面で共通する。工房跡はC地点で確認されていたが、瓦窯跡が未確認であったために瓦窯跡との関係は微妙であった。F地点西斜面では平瓦が焼成されており、関連が明らかである。特にB類は窯跡に近接している。また、須恵器窯が操業していたC地点の第3期ではB類は確認されていない。瓦の焼成と関連が強いことが考えられる。

#### c. その他の遺構

F地点では窯・工房跡以外に東斜面で瓦集中造構、溝、土壌、西斜面で平場跡、粘土採掘坑跡を検出した。瓦集中造構、溝、土壌は窯跡の周りに分布し、排水や不良品の捨場に使われたとみられる。西斜面の平場跡、粘土採掘坑跡は工房跡の斜面下方に位置し、作業場や材料調達の場として機能している。粘土採掘坑跡底面の地山は淡黄色粘土でFW-SI4堅穴住居跡の粘土塊と同質である。

F地点以外ではC地点で土師器焼成遺構が確認されている。長さと幅が1~2m前後の円・楕円・隅丸長方形を呈し、斜面下方に「コ」字形に開口する形態のもので、何らかの窯体を伴う可能性が指摘されている。長胴形の土師器甕を焼成している。

## 2. 遺物について

F 地点出土遺物には多量の瓦と少量の土器がある。瓦は多賀城跡第Ⅰ期の瓦群で捉えられ（本文編1982）、個々の特徴や製作技法は概ね一致する。土器の大部分は須恵器で、土師器は微量である。

### a. 瓦

〈東斜面〉軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅切瓦、鬼板があり、文字瓦も含まれている。他の地点も含めて数量と比率を示した表5(41頁)によると、各地点とも平瓦が主体をしめるが、F 地点東斜面では種類が多い。平瓦以外の数も比較的あり、軒瓦や道具瓦を含めた豊富な生産が知られる。

各種の瓦をみると、軒丸瓦に重弁蓮花文122・133、軒平瓦に二重弧文511a～c タイプ、丸瓦にⅡ B 類の各種があり（64頁付表）、平瓦は主体のⅠ A 類の他にⅠ C 類b タイプとⅡ B 類を除く多賀城跡第Ⅰ期の平瓦全てがある。重弁蓮花文122・133は第Ⅰ期の8葉重弁蓮花文の様式上では2・5番目にあたる。二重弧文511a～c タイプは桶巻き作りの平瓦Ⅰ A～C 類から製作されており、平瓦は桶巻き作りのⅠ 類が圧倒的に多い。そうした特徴は同じ瓦窯跡のA 地点やF 地点西斜面に比べて東斜面の出土瓦が最も古い様相にあることを示す。なかには平瓦Ⅰ C 類からⅠ A 類への移行が知られる平瓦や文字瓦もある。年代は上限が養老・神亀年間頃、下限が天平10年（738）前後頃である。

また、文字瓦には多賀城跡政庁、多賀城廐寺跡のものと同范、同筆等のものがあり、供給先を具体的に示す資料である。C 地点と共通性のある軒平・文字瓦もあり、C 地点との密接な関連も知られる。

〈西斜面〉軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、平瓦が圧倒的に多い（表5・6）。軒瓦や丸瓦は僅かで、平瓦を中心に生産している。また、平瓦の大部分は一枚作りのⅡ B 類で、軒瓦も第Ⅰ期では後出の重弁蓮花文軒丸瓦125、均整唐草文軒平瓦660である。均整唐草文660は平瓦Ⅱ B 類からの製作で、その年代は天平10年（738）前後頃とする見方が示されている（佐川2000）。西斜面出土瓦は東斜面とは異なる新しい様相を持つ。なお、その種の瓦は東斜面では全く出土していない。

### b. 土器

本窯跡群の出土土器については須恵器が多量に出土したC 地点で分析され、須恵器を中心して第Ⅰ～Ⅲ群土器が設定されている。F 地点の出土土器は少ないが、東斜面ではFE-SR5窯跡3次床面、西斜面ではFW-SIIb 壁穴住居跡を中心にC 地点の土器群に沿って年代が捉えられた。

〈東斜面〉須恵器に壺、高台壺、高台塊、壺蓋、壺蓋、壺、瓶、壺、甕、土師器に鉢がある。

まず、FE-SR5窯跡3次床面出土須恵器をみると壺・高台壺・壺蓋・甕があり、壺類は平底で、壺はⅡ A・B 類が主体をしめる。壺蓋は口縁部が丸くおさまるものである。それらの特徴はC 地点第Ⅱ群土器と類似し、同じ頃の須恵器とみられる。壺Ⅱ B 類には下伊場野窯跡群の壺と似た器形のものがあり、切離し等の技法上の違いの存在も含めて関連が注目される。その一方では第Ⅲ群土器で主体をなす壺Ⅱ C 類もみられ、絶じて移行期の様相が窺われる。年代はⅡ C 類を含むことなどから第Ⅱ群土器の天平10年（738）前後頃を下限とする養老・神亀年間（717～728）頃でも比較的新しい頃とみられる。

次に、他の須恵器、土師器は第Ⅰ～Ⅲ群土器の範疇で捉えられる8世紀前半頃のものである。前述

の FE - SR5 出土須恵器や坏 II B 類の多さなどから第 II 群土器の年代を中心に想定している。

〈西斜面〉須恵器に坏、高台坏、坏蓋、高盤、高台盤、鉢、瓶、短頸壺、壺、土師器に壺がある。

まず、FW - SIIb 堅穴住居跡出土土器は須恵器に坏、高台坏、坏蓋、高台盤、瓶、短頸壺、壺、土師器に壺があり、須恵器の坏類と高台盤は平底で坏は II C 類である。坏蓋は口縁部が下に短く折れるもので、それらの特徴は第 III 群土器と共通する。年代は天平10年(738)前後頃に位置づけられる。

他の須恵器は8世紀前半頃のものだが、前述の FW - SIIb 出土土器や坏 II C 類の多さから第 III 群土器から大きく離れると考えにくい。若干古めの土器や瓦もあることから、年代は8世紀第2四半期頃を中心にみている。

### 3. 各地点の窯場の内容

今回の成果を加えて各地点の窯場について立地、範囲などの観点から内容を整理する。

〈立 地〉今回の調査で A 地点北斜面では遺構が検出されず、F 地点では東西の両斜面で年代の異なる窯場を確認した。各地点の窯場の立地は次のとおりである。

F 地点東：傾斜の緩やかな丘陵の狭い張り出し部。標高60～65m。

F 地点西：傾斜の緩やかな広い西斜面。標高60～65m。

A 地点：傾斜の緩やかな広い南斜面。標高60～65m。

C 地点：傾斜の緩やかな広い南斜面。標高60～70m 前後。

F 地点東斜面が異なる様子にあるが、他は60～70m 前後の緩やかで広い南・西斜面に立地する点で共通する。また、C 地点は不明だが、窯跡が尾根を挟んで向かい合う木戸窯跡群のような形態(関連2007)は今のところみられない。

〈範 囲〉 F 地点はほぼ確定的だが、A・C 地点は調査性格の違いからみて、より広い可能性がある。

F 地点東：約20m 四方。

F 地点西：南北約70m、東西約40m 以上。

A 地点：南北約15m 以上、東西約40m 以上。

C 地点：南北約60m 以上、東西約95m 以上。

〈構成要素〉 窯場を構成する要素として各地点では次の遺構が捉えられている。

F 地点東：窯跡4基、清2条、土壌4基、瓦集中造構1ヵ所

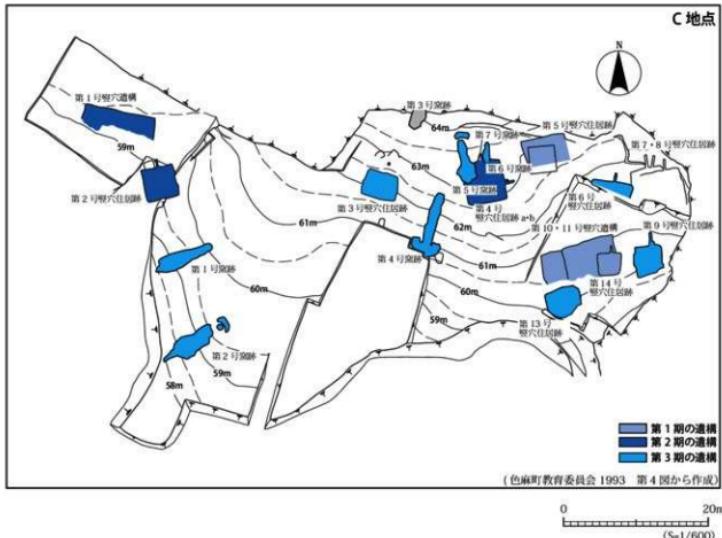
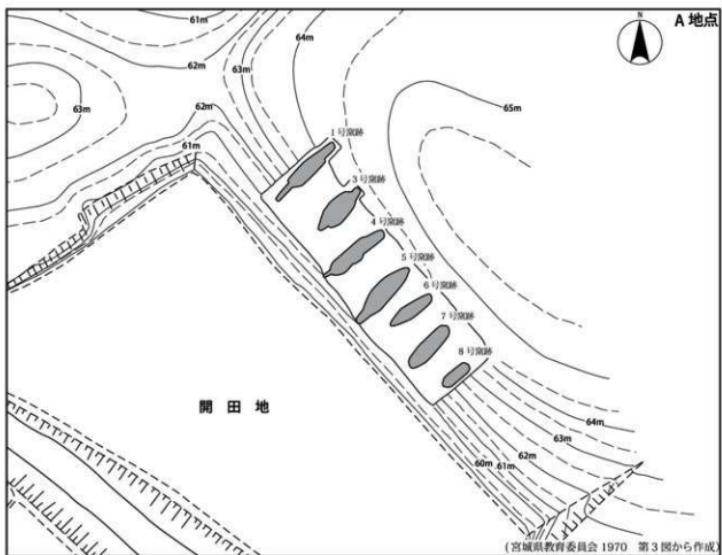
F 地点西：窯跡3基、工房跡5軒、平場跡1ヵ所、粘土採掘坑1ヵ所

A 地点：窯跡7基

C 地点：工房跡3～4軒(第1・2期) 窯跡4基・工房跡5軒(第3期)

F 地点西斜面では原料の採集から製品の成形・焼成に至るまでの遺構がみられ、要素が揃っている。窯跡、工房跡、粘土採掘坑は窯場における生産過程の基本的な構成要素といえる。一方、他の地点では全ては揃わない。未確認の遺構は各調査区の近くか、若干離れた場所にあることが考えられる。

〈分布状況〉 各窯場における構成要素の分布は概ね以下のとおりである。なお、F 地点東斜面の窯跡



第37図 A・C 地点の窯場

には変遷があり、同時に操業していたのは1・2基程度である。

F 地点東：1・2基の窯を中心として排水・捨場などの役割を持つ溝・土壌が周りに配される。

F 地点西：北側に3基の窯、南側に5軒の工房、西側に平場・粘土採掘坑が所在。場を使分け。

A 地点：4～7m 間隔で7基の窯が並ぶ。

C 地点：第1～3期とも遺構の分布は散在的。

場の使い分けが明確な F 地点西斜面、多数の窯が並ぶ A 地点の様相が各々目立つ。しかし、F 地点西斜面のように構成要素が揃う例は稀少であり、他は要素不足で不明な部分も多い。したがって、現段階では各地点の比較検討は早いと言わざるをえない。ただ、現状の知られる範囲で大きく把握すれば、A 地点には大規模集中的な窯場、C・F 地点には分散的な窯場の様相が窺われる。

〈窯跡の製品と年代〉各窯場の窯跡で焼成した主な製品と年代は概ね次のとおりである。なお、A 地点の年代は須恵器環における第Ⅲ群土器との共通性（色麻町1993）と平瓦Ⅱ B 類の存在から記した。

製品 F 地点東：重弁蓮花纹122・133、二重弧文511a～c、平瓦（I 類92%、II 類8%）、丸・隅瓦、鬼板、須恵器

F 地点西：平瓦（I 類14%、II 類86%）、須恵器

A 地点：重弁蓮花纹126、二重弧文軒瓦511d、平瓦（I 類75%、II 類25%）、丸瓦、須恵器

C 地点：第3期…須恵器（第Ⅲ群土器）

年代 F 地点東：養老・神龟年間頃（717～728）～天平10年（738）前後頃

F 地点西：8世紀後半期頃（725～750）

A 地点：天平10年（738）前後頃

C 地点：第3期…天平10年（738）前後頃

瓦は F 地点東斜面の内容が豊富である。瓦窯跡における焼成は平瓦が主体で F 地点西斜面と A 地点では90%前後の比率を持つが（41頁表5）、F 地点東斜面は約75%であり、他の瓦がやや目立つ。また、平瓦における桶巻き作りの I 類と一枚造りの II 類の比率は F 地点東斜面、A 地点、F 地点西斜面の順に I 類が減り、II 類が増える。F 地点東・西斜面での比率は全く逆転している。年代も F 地点東斜面の窯跡が古く、他は天平10年（738）前後頃を中心とした比較的新しい窯跡である。

## 4. 調査の総括

今回の調査による各地点の様相・年代などをまとめ、前節の整理を踏まえて本窯跡群に位置づけることで調査成果を総括する。なお、本窯跡群全体の様相に関しても若干の予察を付す。

### a. 調査成果の総括

〈調査地点の様相〉今回の調査による各地点の窯場の外観や年代、内容は次のとおりである。

【F 地点東斜面】

本書で詳述したが、標高60～65m の丘陵の斜面が東に張り出した約20m 四方の狭い範囲に立地する窯場である。1・2基程度の地下式窯を中心として周りに排水や捨場等の機能を持つ溝・土壌を配した構成をとる。窯場の規模はごく小さいが、平瓦 I 類を主体として多賀城跡第Ⅰ期の豊富な種類の

瓦をはじめとして須恵器も焼成している。年代は上限が養老・神亀年間頃、下限が天平10年(738)前後頃で、瓦の内容から多賀城造営に伴う瓦生産の中心的な期間に操業し、下伊場野窯跡群やC地点とも密接な関わりを持つ。また、瓦の供給先には多賀城跡政府と多賀城廃寺跡がある。

#### 【F 地点西斜面】

標高60～65mの比較的広い西斜面の南北約70m、東西約40mの範囲に立地する窯場である。北側に3基の窯、南側に5軒以上の工房、その西側に平場や粘土採掘坑が場所を分けて分布する。全体的に小規模だが、構成要素が揃い、場所の使い分けもなされた窯場である。主に均整唐草文660の製作にも使われた平瓦II B類を焼成するほか、須恵器も焼成している。年代は8世紀後半期頃である。東斜面とは窯場の外観・製品が異なる年代の新しい窯場である。

#### 【A 地点】

史跡指定された南斜面と尾根を挟んだ北斜面では遺構は検出されなかった。表土から南斜面と同種の丸・平瓦が少量出土しており、南斜面の製品がやや広めに散在したものとみられる。A 地点の窯場は尾根から南側の斜面に形成されている。

（総括）本窯跡群は多賀城創建期における最盛期の窯跡群であり、活動期間も長い窯跡群として位置づけられてきた（関連1994）。しかし、発掘調査が行われていたのは A・C の2地点のみであり、確認された窯跡も A 地点は第I期でも後出的な瓦窯跡、C 地点で時期が特定された窯跡も天平10年(738)前後頃にくだる須恵器焼成の窯跡である。その状況を踏まえると、今回の調査で捉えた窯場は本窯跡群において次のように位置づけられる

F 地点東・西斜面の窯場は瓦を主体に焼成した窯場である。従来、瓦窯跡の遺構を捉えていたのは A 地点のみであり、上記2ヶ所の窯場は本窯跡群に瓦窯跡としての実体を改めて付与するものである。特に東斜面の窯場は多賀城の造営に伴う瓦生産の中心的な期間に操業し、豊富な種類の瓦を焼成している。また、文字瓦から供給先には多賀城跡政府と多賀城廃寺跡をあげられる。本窯跡群でその頃の窯跡・多賀城跡などとの直接的な関係を捉えたのは初めてである。ごく小さな窯場ではあるが、本窯跡群の位置付けに実体を与える重要な窯場といえる。

一方、西斜面の窯場は主に平瓦II B類を焼成した窯場であり、平瓦I類の焼成を主体とした東斜面、続く A 地点よりも後出的な窯場である。東斜面の窯場から通じてみれば、本窯跡群の活動期間の長さを示す一端となる窯場として位置づけられる。また、この窯場では粘土の採集から製品の成形・焼成に至るまでの構成要素となる遺構が揃って確認された。本窯跡群に限らず、当時の1つの窯場の規模・形態を考えるうえで貴重な例となる。

その他、A 地点で遺構は検出されなかつたが、従来の南斜面、今回の F 地点東・西斜面の窯場と合わせみると、本窯跡群では尾根を挟んで窯跡が向かい合う木戸窯跡群のような形態（関連2007）は現段階ではみられない。本窯跡群と木戸窯跡群では窯場の形態が異なることが想定される成果といえる。

各地点の窯場は以上のように位置づけられる。今回の調査では主に F 地点で多賀城跡第I期の瓦の焼成を主体とする窯跡とそれに伴う遺構を確認し、東・西斜面の窯場の内容が各々捉えられた。それらの内容・年代は異なるものであり、両斜面の調査によって本窯跡群が多賀城創建期における最盛

期の窯跡群であり、活動期間も長いとされる捉え方の妥当性が遺構・遺物の実体から把握できた。今回の調査における最大の成果である。

F 地点は本窯跡群では最も新しく発見された地点であり、判明した両斜面の窯場も小規模である。しかし、遺構の残存状況は良好で新旧の瓦窯跡が揃って遺存している。本窯跡群の位置付けを端的に示す遺構・遺物を持つ貴重な地点である。

#### b. 窯場の様相

今回の調査・整理を踏まえて、最後に本窯跡群の様相に関する予察を少し述べる。前節3で述べたが、各地点の窯場の様相についての詳細な比較検討はまだ早く、現段階で比較すれば様々な方を呈すると言わざるをえない。ただ、大きく把握すれば A 地点と C・F 地点との差が注意される。広い南斜面に多数の窯が並ぶ A 地点では大規模で集中的な瓦主体の生産が行われた様相が窺われる。一方、C・F 地点は小規模、散在的な感が強い。F 地点東斜面は1・2基程度での操業、西斜面は整った様相を示す窯場だが全体的にコンパクトである。C 地点第1・2期は3・4軒の工房が点在し、第3期は窯や工房が多少はあるが、分布は散在的である。

しかし、視野を広げてみると C・F 地点には関連性がある。C 地点(第2期)と F 地点東斜面の軒平・文字瓦には共通性があり、両地点には密接な関連が考えられる。間に沢を挟むが、両地点は約200m しか離れていない。東斜面の窯場の近くに工房跡がないことからすると、C 地点に工房があり、窯と工房が少し離れて一連の生産が行われていたことが推測される。

また、F 地点西斜面の窯場は主に平瓦 II B 類を焼成しているが、瓦は平瓦のみでは機能しないことから他に丸瓦や軒瓦を焼成した窯場が想定できる。同じ頃の C 地点(第3期)では須恵器が焼成されており、窯の焼台や補修には平瓦 II B 類による均整唐草文軒平瓦660、それと組む細弁蓮花文軒丸瓦230・231が転用されている。近くにそれらを焼成した窯場が存在することを示しており、当時の C・F 地点には主に須恵器を焼成した C 地点、平瓦焼成の F 地点西斜面、軒瓦・丸瓦なども焼成した窯場が存在したと考えられる。

以上のことからすると、C・F 地点の窯場は個々には小規模で散在的な特徴が見られるが、それは関連しながら機能している。やや広い範囲でみれば必ずしも小規模とは言えず、A 地点の集中的な大規模さに対し、分散的な形態で大規模な窯場が形成されていた可能性がある。その違いは窯場の経営方法や成立事情・年代などによると推測されるが、詳細については今後さらに検討が必要である。

## 註

- (註1) 各遺跡の出典は「日の出山窯跡群Ⅰ」(関連2009)を参照のこと。
- (註2) 同様の平瓦を昨年はⅠ D 類と報告したが(関連2010第21図42)、Ⅰ A 類c タイプに訂正する。
- (註3) 同じ布目のものはSRSの1層でも1点出土している。また、連断できないが、本窯跡群の A 地点にも類似したものがある(図録編1980PL88-1)。A 地点のものは使い込まれた様子が窺われる。
- (註4) この資料は昨年の報告書註2で述べたように二次叩き目が平行叩きの二重弧文511でも額面がナデ調整されたものである。
- (註5) 平瓦は多賀城跡の分類で大別、丸瓦は傾向をるために細分まであげた。
- (註6) 註3参照
- (註7) なお、本文編1982では「今」の陽出を最終の凸面ナデ調整時とするが、ナデの粗さからみてその時点での陽出は難しい。叩き段階の陽出とみるのが妥当である。文字圧痕を含む凸型台圧痕が凹面のナデを切るのは叩き段階と同じ凸型台を使用したためとみられる。
- (註8) 報告書(色麻町1993)はローマ数字だが、多賀城の遺構期と区別するに本書ではアラビア数字です。
- (註9) 各地点の遺構を区別するために、以下の記述では遺構番号の前に地点名のアルファベットを付す。なお、F 地点東斜面は FE、西斜面は FW とする。

## 引用・参考文献

- 佐川正敏 2000 「陸奥国の平城宮式軒瓦 6282 - 6721 の系譜と年代」一宮城県中新田町城生遺跡と福島県双葉郡町山五番遺跡、原町市泉庵寺—「東北文化研究所紀要」第32号 東北学院大学東北文化研究所
- 色麻町教育委員会 1990 「壁の誇る遺産 日の出山窯跡群」
- 色麻町教育委員会 1993 「日の出山窯跡群 一詳細分布調査と C 地点西部の発掘調査ー」色麻町文化財調査報告書第1集
- 宮城県教育委員会 1956 「栗切谷庵寺跡」宮城県文化財調査報告書第2集
- 宮城県教育委員会 1970 「日の出山窯跡群 一扭糸文化財緊急調査概報ー」宮城県文化財調査報告書第22集
- 宮城県教育委員会・多賀町 1969 「多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城庵寺跡ー」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1980 「多賀城跡 政庁跡 図録編」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「多賀城跡 本文編」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1976 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1975」(第25・26次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1984 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1983」(第44次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994 「下伊場野窯跡群」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1999 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1998」(第69次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2007 「木戸窯跡群Ⅱ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第32冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2008 「六月坂遺跡Ⅱ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第33冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2009 「日の出山窯跡Ⅰ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第34冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2010 「日の出山窯跡群Ⅱ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第35冊

規格	尺寸										厚度					轉速		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	
SR4	4寸底面	1							1							122	133	不規
	4寸(削面)	3	1	1					5							2	5	1
	3寸	1							1							1	11	3
	2寸	3							3	7	1					3		
SR5	小 輪	18	5						23	43	3	4	3	6	14	79	3	
	2寸底面	25	7	1					33	50	11	3	5	9	15	96	6	2
	1寸底面	1							1							8	1	1
	2寸底面	4	1						5	8						2		
SR6	3寸底面	2	1						3	1	2					8		
	3寸(削面)	7	1						8	10	1	1				6	20	1
	2寸	8	3						12	43	6	1	2			3	15	71
	小 輮	22	3	4					29	64	9	1	5	1	3	24	107	7
SR7	2寸底面								1							1		
	3寸底面								1							2		
	4寸底面								2	5	8					1	12	22
	6寸(削土)								1							1	4	
SR8	5寸底面								2	2	2					5		
	5寸(削面)	15	4						19	39	1	1	2	1	11	18	75	
	4寸	30	18						48	59	14	1	4	3	3	10	12	106
	3寸	15	5	4					6	30	109	1	2	7	2	14	13	151
SR9	小 輮	35	5	3					12	58	146	6	5	3	1	12	27	207
	3寸(削面)	84	43	14	3				20	164	37	27	1	5	17	10	11	4
	5寸	5	2						7	7						48	83	573
	1寸	1							1	18		1	2		3	1	7	2
SR10	小 輮	6	2						8	25		2	1	2		3	25	45
	5寸	107	9	16					132	220	36	2	17	12	1	4	3	22
	4寸	14	3	6					23	41	8	1	7	3	4	4	8	9
	3寸	1	2						3	1	1					1	4	1
SR11	鉛筆	252	65	88	1	21	446	929	135	7	48	50	14	49	12	111	218	1573
	鉛筆	252	133						21	446	1119					4	1	28
	鉛筆	SK7	4	1	1	1	4	4							1	5		2
	鉛筆	SK8	22	1	3	1	27	119	23	5	1	2	1	7	22	180	5	1
SR12	鉛筆	6	3	6	2	1			18	33	2	1	5	11	2	3	1	1
	鉛筆	6	3	6	2	1			21	446	929	135	7	48	50	14	49	12
	鉛筆	6	3	6	2	1			21	446	929	135	7	48	50	14	49	12
	鉛筆	6	3	6	2	1			21	446	929	135	7	48	50	14	49	12

表計集瓦出土斜面東付表



窯跡検出状況（南東から）



窯跡4基の位置（東から）

図版1 窯跡検出状況・窯跡4基の位置



検出状況（東から）



SR4 窯跡燃焼部断面（東から）



SR5 土層堆積土断面（南東から）



SR5 下層調査（南東から）

図版2 SR4・5 窯跡



検出状況（東から）



全景（東から）



堆積土断面（北東から）

図版3 SR6 窯跡－1



焼成部床面・残存天井（東から）



残存焼台（東から）



焼成部下層調査（北西から）



燃焼部下層調査（北西から）



5次床面



3次床面

燃焼部側壁補修瓦（東から）

図版4 SR6窯跡－2



SR7検出状況（東から）



SR7堆積土断面（東から）



SR7最終床面（上が西）



SX2検出状況（南東から）



SX2堆積土断面（南東から）

図版5 SR7窯跡・SX2瓦集中遺構



SD 5 検出状況（北から）



SD 6 東側検出状況（南東から）



SK 6 堆積土断面（東から）



SK 8 堆積土断面（西から）



SK 9・SR 7重複状況（東から）



SK 9 堆積土断面（東から）

図版6 溝・土壤

報告書抄録



---

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第36冊  
日の出山窯跡群Ⅲ

平成23年3月25日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市高崎一丁目22番1号  
TEL (022) 368-0102  
FAX (022) 368-0104  
印刷所 今野印刷株式会社

---